
戦神とテストと召喚獣

邊瑠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦神とテストと召喚獣

【Nコード】

N6880K

【作者名】

邊瑠

【あらすじ】

英国紳士を父に持つのに英語は苦手。マシモ 刃物と拳銃モデルガンマニアの私が、バカ共とドタバタ学園コメディーを繰り広げる物語だ。見たい奴だけ見るといい。……もっとも、この物語に価値があるのかどうかわからんがね。

注意 オリジナル主人公視点で進めていきます。オリジナルの展開になる部分もありますので、気に入らない方はブラウザバックをお勧めします。

試召戦争編 プロローグ

さて、面倒なテストが終わり、今日から新しいクラスメイトと共に一年間を過ごすわけだが。

自分のクラスを知る為には、生徒指導の鬼である西村教諭から手渡しで封筒を受け取らなければならないと言う、面倒くさい手続きとも言えない手続きを行わなければならない。

そんなわけで、現在、西村教諭の前に立っている。

「おはようございます、西村教諭」

「ああ、おはよう御門。今日も早いな」

「ええ、寝るつもりなんで」

「此処に早く来て寝る意味がわからんのだが」

「遅刻しないでしょう?」

「そんな理由で早く登校する奴は、俺の知る限りお前が初めてだよ」

適当な雑談を終わらせ、宛名に『御門 澪』と書かれた封筒を貰う。

「結果はわかっているだろう?残念だったな。お前ならAクラスは

楽に行けただろうに」

「倒れたアイツを見捨てて筆を進めると？冗談はよしてください」

「……そうだな、お前がそんな事をするわけないな。ましてや、倒れたのが幼馴染同然なら仕方ないか」

封筒を開けて中の紙を取り出す。

見る必要もないが、なんとなくだ。

『御門 澪…… Fクラス』

Fクラス。

学力が最低な生徒が集まるクラスだ。

ちなみに、先程の会話でわかるかもしれないが、Aクラスがトップ。

次がBクラス、Cクラスと学力は下がる。

「やれやれ。彼女が倒れなければ、二人ともAクラスだったのにな」

「ああ、教諭。勘違いされている様なので言わせていただきますが」

紙を封筒に戻し、ポケットに入れながら言う。

「私は最初から白紙で提出するつもりでしたよ、あのテスト」

「白紙で提出って、お前は何を考えているんだ？」

怪訝そうな顔で聞いてくる。

まあ、当然の疑問か。

「教諭、私はね、見てみたいのですよ」

「見てみたいって、何をだ？」

「下克上」

そう、下克上。

Fクラスさくじやくが、Aクラスかききゆうの首を討ち取る。

想像しただけでも、興奮してくるじゃないか。

現代で下克上なんて、滅多に見られたものじゃないのだから。

「……ハア、そうだった。そうだったな。お前はそんな思考の持ち主だった。なあ、危険人物バトルジャンキー？」

「バトルジャンキ
危険人物とは失礼な。そんなサディスティック思考に満たされて
いませんよ、私の脳内は」

それでは、と言い残してその場を去る。

さてさて、Fクラス諸君。

私を退屈させてくれるなよ？

試召戦争編 プロローグ（後書き）

どうでしたでしょうか？

初っ端から意味不明でなければよいのですが。

小説初心者なので、その辺りがよくわかりません。
指摘やアドバイスをいただけると踊って喜びます。

次は、オリジナル主人公の設定です。

主人公設定

名前 御門 漣

性別 男

家族構成 父と母、祖父母。

両親は仕事で外国、祖父母は田舎に居る。

その為、家には1人で住んでいる。

ちなみに、父は金髪碧眼の英国紳士。 親バカ

母はアルビノで、白髪紅眼の大和撫子。 同じく親バカ

性格 穏やかというか無関心というか。

大抵の事は受け入れるが、退屈を嫌う。

弱天然で、テストで凡ミスをする事も・・・。

容姿 男なのか女なのか、大抵の者は本人が性別を告げるまで判断が出来ない。

整った容姿であり、銀髪碧眼。

髪は母の趣味で腰まで届く長さになっている

歩く度にユサユサと揺れて鬱陶しい為、常にマフラーのように首に巻き付けている。

時々、瑞希の指示でリボンを着けていたりゴムで縛っていたり、ツインテールだったりポニーテールだったりする。

秀吉が可愛いと称されるならば、漣は綺麗と称されるのが相応しい。

他人が騒ぐため容姿が整っていること自体は自覚しているが、何がどう評価を受けるのかは理解していない。

身長 結構、長身。

雄二より頭半個分高い。

体重 本人もわかっていない。

体型 筋肉はついているが、それが身体に表れることが無いためスラリとした細身。

学力 天才と称され、瑞希より高い成績を残すが何故か英語が壊滅的。文法がわからないだけで単語はできる。

英語の代わりとでも言うのか、ドイツ語ならば片言で日常会話ができる。

理数系が得意で、その為か思考速度が速い。

運動能力 運動は得意で、運動能力が秀でている。

特に「瞬発力と動体視力は化物級」と言われている。

特技 射撃・刃物の扱い・料理・似非声帯模写

追記 両親の一人称が共に「私」だった事が影響したのか、一人称は「私」。

親同士の仲が良く、瑞希とは家族ぐるみの付き合いであり、明久のお隣さん。

過去に一度、父親同士が勝手に漣と瑞希を婚約者に行っていたことがある。

制裁を与え、三時間説教をして取り消した。

漣と瑞希はよく共に行動し、まさに阿吽の呼吸である。夫婦と称される事もあるが、そういう関係ではない。

母・瑞希の母・瑞希の三人によく着せ替え人形のように扱われていた為、女装には抵抗がない。

好物は飴であり、よく棒付きの飴を銜えている。本気を出す時に、どれだけ残っていても噛み砕く。

生まれつき刃物と銃器の扱いが上手く、趣味は刃物とモデルガン集め。

制服を改造し、刃物を仕込みまくっているうえに、モデルガン二丁は常備している。

その為、教師や生徒達には危険人物として知られている。バトルジャンキー

しかし、問題を起こすわけでもなく、寧ろ暴徒を鎮めている。教師からは信頼されるが、「戦神」「銃使いの切り裂きジャックツパー」と称して恐れる者もいる。

召喚獣 通称「ジャック」

本人をそのままデフォルメさせた姿。

黒いロングコートを羽織り、日本刀一本と拳銃二丁を所持している。

召喚獣の腕輪 通称「一心シンクロ同体」

澁本人とジャックの感覚をリンクさせる。

ジャックの五感が全て伝わってくるため、戦闘時に重宝される。

ただし、明久よりもフィードバックが酷い。

ちなみに、視覚は左眼のみにリンクする。

主人公設定（後書き）

ちよこつと修正。

正直、「銃あるんだから投げナイフいらなくね？」って思ったので変えました。

試召戦争編バカテスト 第一問

以下の問いに答えなさい。

『調理の為に火をかける鍋を制作する際、マグネシウムを選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この問題点と代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『問題点・・・マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であること。』

合金の例・・・ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

土屋康太の答え

『問題点・・・ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金の例・・・未来合金（ すごく強い）』

教師のコメント

すごく強いと言われましても。

御門 滯

『合金の例・・・シユラルミン』

教師のコメント

濁点がありませんね。とても惜しいです。

試召戦争編バカテスト 第一問（後書き）

バカテストはこんな感じでいいのでしょうか？

かなり不安です。

試召戦争編 第一問

現在、私はFクラスの教室に居る。

正直言つて、酷い教室だ。

床は畳、椅子は無く座布団が敷いてある。

机は卓袱台で、窓はガラスが割れて風が入り放題。

教室の隅は蜘蛛の巣が居座っている。

壁はひび割れ落書きもある。

しかも、少々カビの臭いもしていたり。

衛生上に悪いとかの問題では無いと思う。

此方に来るとき、Aクラスも覗いたのだが。

此処とは大違いだ。

ざっと見ただけでもノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫、リク
ライニングシートが完備された大きな教室であることが理解できた。

実力主義も此処までくれば異常ではないだろうか？

まあ、下克上を見せてくれるならばこれくらい耐えるのだが。

Fクラス諸君。楽しませてくれなければ暴れるぞ。

さて、席の指定は無い様なので、隅の席を選んで鞆を置く。

しかし、最初から問題発生。

グラグラ揺れる。

「……………」

マジっぜえーです。

一巡りしてみると、どれもこれも似たような物ばかり。
いやはや、此処までとはな。
これは、マジで。

「愉しませてくれなければ、切り刻もうか」

比較的マシな卓袱台を探して、その席へ座る。
顔を伏せて眠り、意識を闇へ落した。

・
・
・
・
・
・
・

眼が覚めると、結構人が集まっていた。

あー、何だったか。

こんなときに使う擬音語があったな。

……。

ああ、思い出した。

ザワ……ザワ……

……こんな感じだったか？
なんとも馬鹿げた思考を捨て顔を上げ、我がクラスメイトをざっと眺める。

おやおや、我が友が三人もいるじゃないか。
そのうちの一人が私に気付いたらしく、声を掛けてきた。

「おはようさん、漣」

「ああ、おはよう、雄二」

坂本雄二。

独断と偏見による私の為の脳内プロフィールによると、コイツは私の幼馴染であるお隣さんを虐めるのが好きらしい。
もっとも、コイツが居るならば退屈しないですみそうだが。

「お前がFクラスとはな、驚いた。何があつた？」

「テストを早退してな。無得点扱いだ」

「そりゃあ、災難だったな」

肩を竦めて言ってくるので、苦笑してやる。

「もともとFクラスに入るつもりだったからな。問題ない」

「Fクラスに入るつもりだった？お前ならAクラスも楽勝だろうに、何の為に？」

「雄二。最初からAクラスでは退屈なだけだ」

「……つまり、Fクラスから這い上がってやるつ。そう言う意味か？」

頷いてやると、「お前らしいな」と呆れた顔を向けてきた。私は何故か危険人物として知られているからな。恐らく血に飢えているとか考えているのだろう。もちろん、そんなことは無いのだが。

「まあ、俺としてはお前が居てくれて助かる」

「……殺るつもりか？」

「なんかかなり不穏な気がするが、やるつもりだ」

「了解した。私は今からお前の兵、剣となり銃となるつ。好きに使え」

「いきなり従者宣言かよ。頼りになるが」

「期待には応えてやるさ」

口元が歪むのが自覚できる。
ああ、退屈せずにすみそうだ。

・
・
・
・
・
・

しばらくして、担任は遅れてくるらしい。
そして、まだ二人クラスメイトが来ていない。
まあ、二人が誰なのか。わかるのだが。

思考という海に沈んでいると、ガラツと扉が開いて、一人の男子生徒が入ってくる。

「すみません、ちょっと遅れちゃいました」

「早く座れ、このウジ虫野郎」

思ったとおり、我が幼馴染にしてお隣さんのバカ。吉井明久だった。そして、思ったとおり、雄二は明久を虐めるのが好きらしい。

「ウジ虫野郎は酷くない!？」

「騒ぐな明久。頭に響く」

「あれ、溲もこのクラスなの？」

不思議そうに聞いてくるので頷いてやる。

……いや待て、お前見てただろうが。テストの時に私がアイツを背負って出て行くところ。

記憶力が低いのか記憶に残らないほど印象が浅い光景だったのか、もしくは真正のバカなのか。

……どうでもいいか。

「で、なんで雄二が教壇にいるの」

「一応、クラスの代表だからだ」

ニヤリと唇を歪める雄二を見て、退屈はしないのだと言うことが実感できた。

雄二が代表か。今はどうか知らんが、神童だしな。相應しいかもしれん。

面白い情報が手に入った事に満足して、再び眠りに落ちる事にした。

試召戦争編 第一問（後書き）

どうでしたでしょうか？

意味不明ではありませんでしたか？

不安で不安で仕方が無いです。

雄二君や明久君の特徴が崩れていなければいいのですが。

試召戦争編バカテスト 第二問

以下の問いに答えなさい。

- ☐ (1) グルコース(ブドウ糖)の化学式を書きなさい
- ☐ (2) $\text{Ca}(\text{OH})_2$ の物質名を書きなさい

姫路瑞希・御門漣の答え

- ☐ (1) $\text{C}_6\text{H}_{12}\text{O}_6$
- ☐ (2) 水酸化カルシウム/消石灰

教師のコメント

正解です。 $\text{C}_6\text{H}_{12}\text{O}_6$ は他にも、ガラクトースやフルクトース(果糖)にも当てはまります。
(2)は、水酸化カルシウムでも消石灰でもOKですね。

吉井明久の答え

- ☐ (2) ?

教師のコメント

何故、選択問題の答えがここにあるのか疑問です。
確か、十問ほど後な筈ですが……。

試召戦争編バカテスト 第二問（後書き）

バカテストはネタが思い付きません。

かなり苦労します。

試召戦争編 第二問

「席に着いてもらえますか？」

何時の間に教室に来たのか、我がクラスの担任であろう人物の声で眼が覚める。

「HRを始めますので。えー、おはようございます、2年F組担任の……」

黒板に名前を書こうとして、

「福原慎です、よろしく願います」

やめた。

驚くべき事に、我がクラスではチヨークの配布すらされていないらしい。

恐るべしはFクラスか？

「まずは設備の確認をします」

設備の確認、とは言ってもな。

「卓袱台、座布団、えー……不備があれば申し出てください、必要なものがあれば極力自分で調達するようにしてください」

不備だらけだぞ、この教室。

卓袱台はグラグラ、座布団は綿が少なく、無いと言ってもいいだろう。

実際、不備を申し出る者はそれなりに居たのだが。

福原教諭は「我慢してください」で終わらせたり、ボンドを支給したりビニールテープでの補強だったり、あまり改善策にならない事ばかりだ。

不備を申し出る意味は無かった、ということだな。

・
・
・
・
・
・
・

「では、廊下側の人から自己紹介をお願いします」

ハイ、自己紹介スタート。

「木下秀吉じゃ、演劇部に所属しておる」

おや、我が友じゃないか。

ちなみにコイツ、女と見間違えてもおかしくはない。

秀吉の笑顔にときめいている野郎共には警戒しておこう。

……私も秀吉と同じようなものだからな。

こんな男ばかりのむさ苦しい空間では、私達はある意味異分子かもしれん。

「このクラスで一番仲が良いのは、漣じゃな。今年一年、よろしく頼むぞい」

コイツと仲が良いのは必然的か。

私は声帯模写の真似事ができるため、よく演劇部に助っ人として呼ばれていたのだ。

コイツの姉、Aクラスの木下優子とも顔見知りだ。

『なに！木下と仲が良いだと！？』

『ブラックリスト入りにしとくか？』

……先程、秀吉の笑顔にときめいた奴等だな。

マジっぜえーです。面倒くさい。

「……土屋康太」

小柄であるのに引き締まった身体をしているコイツも、我が友だ。性格は、大人しいの一言に尽きると判断する。

「……仲が良いのは、漣」

嬉しい事を言ってくれるじゃないか、康太。

コイツはあまり深く人と関わろうとしないタイプの人間だ。

そんな人物に仲が良いと言われれば、嬉しいものだ。

ちなみにコイツには世話になっている。

この学園内の様々な情報を提供してくれるのだ。

「……です。海外育ちで、日本語は会話はできるけど読み書きが苦手です」

ん？あれは、島田美波か。

去年、帰国子女として転校して来た女だ。

現状では、我がクラス唯一の女子となる。

まさに紅一点。

「失礼、忘れてください。とにかくよろしく申し上げます」

一礼して着席。

自己紹介は進んで私の番だ。

ゆっくりと立ち上がり、自己紹介。

「先の自己紹介で名前が出たが、私が御門溲だ。嫌いなものは退屈。というわけで」

ゆっくりとクラスメイトを眺めて、

「Fクラス諸君。私を退屈させてくれるなよ？」

唇が歪む。さあ、私を愉しませておくれ。

『御門、好きだ！俺と付き合ってくれ！』

『実は俺も好きなんだ！！』

『結婚してください』

「……第一声がソレか、バカ共が」

コメカミを押さえる。

「別に同性愛に嫌悪感はない。お互いが納得し、愛し合っているのなら、相手が同性であろうと子供であろうと問題なからう。実際、同性での結婚を認められた前例も幾つかある」

子供の前例は知らんが。

「しかし、残念ながら私には興味が無い領域だ。諦めて別の相手を探せ」

『押忍！了解しました師匠！！』

……ミスったか。
何か尊敬の念がこもった視線が幾つも……。
しくじった。

着席すると、まるで図った様にガラリと扉が開く。
そこには、息を切らせて胸に手を当てている女子生徒がいた。

「あの、遅れてすいま、せん……」

『えっ？』

ほう、全員呆然としているな。
面白い現象だ。

「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので、姫路さんもお願いします」

「は、はい！あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします…」

もともと小動物を連想させる小柄な身体を、さらに縮ませて声を上げる。

新雪のような白い肌、腰まで届く柔らかな髪は、穏やかで優しい彼女の性格をそのまま表現しているかのようだ。

見慣れた私ですら庇護欲をかきたてられるその可憐な容姿は、この男だらけのFクラスでは恐ろしく違和感がある。

まあ、驚いている理由はこの容姿ではないのだが。

『はい、質問です』

「あ、は、はいっ。なんですか？」

『なんでここにいるんですか？』

そう、彼女がFクラスにいるということが問題。
彼女は入学して最初のテストで学年三位を記録し、その後も上位一桁以内に常に名前を残すほどの才女なのだ。
知っている者からすれば、簡単な理由なのだが、な。

「そ、その……」

まあ、つまりは

「振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました……」

私と同じ、ということだ。

試験の途中での退席は0点扱いとなる。

彼女は振り分け試験を最期まで受けることができず、結果としてFクラスへと振り分けられてしまったというワケだ。
彼女の言い分を聞いて、口々に言い訳をしだすバカ共。

『そう言えば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ。科学だろ？ あれは難しかったな』

『俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の大ウソをありがとう』

……大丈夫か、このクラス？

「で、ではっ、1年間よろしくお願いしますっ！」

ペコリと頭を下げ、明久と雄二の隣に空いている席に座ろうとする。
しかし、

「あっ……」

「ん？」

眼が合った。

で、何を思ったのか、トコトコと私の隣に空いていた席に座った。

……。

じーっとこちらを見ている。

「あー。どうした？」

「あ、あの」

ぐっ、と胸の前で拳を握って。

「ごめんなさい！」

「……」

謝られた。

いや、まあ思い当たる事はあるが。
というかアレしかないが。
純粹すぎるんだよな、コイツ。

「謝る理由がわからんよ」

「えっとその、私のせいで途中退室になってしまった」

まあ、要約すると。

高熱で倒れたコイツを、背負って保健室に連れて行ったのが、私だ。
つまり、私が無得点になった直接的な原因は、コイツにある。

「その、ごめんなさい」

肩を落してかなり申し訳無さそうに謝ってくる。

あー。どうするべきか。

「とりあえず、頭を上げる」

「は、はい」

いや、そこまで露骨にビクリとされると、少しショックだぞ。

「あれは私が自分で望んで行動したことだ。お前が謝る必要はない」

「で、ですが」

「私とお前の仲だろう、瑞希？」

幼馴染同然のコイツを、見捨てる事はありません。

「そもそも、私は元からFクラス希望だったのだ。何も問題ない」

軽く微笑み、髪を軽く撫でてやる。

慰めるとき、何時もこうやっているのだ。

「あの事を後悔するよりも、私と同じクラスになれたことを喜んでくれた方が嬉しい」

髪を伝い、頬に軽く触れてやる。

「そう……ですね、澪君」

眼を閉じて、私の手に擦り寄る。

やれやれ。

瑞希の事は解決したが、

『姫路さんとあんなに仲良く!』

『木下だけではなく、姫路さんまで!』

『羨ましい、羨ましすぎる!』

……この状況、どうしたものか。

結局、騒ぐバカ共は刃物をチラつかせて沈黙させた。

・
・
・

・
・

「そういえば」

「なんですか？」

チヨコリと首を傾げる。

その仕草がまた、無駄に小動物を連想させてくれる。

「珍しいな、お前があのような状況で緊張しなかったのは」

36

もともと瑞希は、引っ込み思案というか何と云うか。目立つ事が得意ではない。

今回は遅れてきた事と、瑞希の実力でFクラスに来たという事実でクラス中の注目を集めた。

Aノ注目の中で平然とできるようになったのか、と子供の成長を喜ぶ親の様な気持ちに浸っていると。

「……………えっ？」

……………固まっていた。

あー、うん。何と云うべきか。

気付かなかつたらしい。

いや、少し鈍すぎではないか？

まあ、それはそれでコイツらしいか。

そう思い、固まった瑞希を見ながら苦笑していると、明久が瑞希に話しかけようとしていた。

「あのさ、姫」

「姫路」

明久の声にかぶせるように、と言つよりは遮るように雄二が声を掛けた。

「は、はいっ。何ですか？」

「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む」

「私の親友の一人だ。何度か話した事があるだろう」

「はい、聞いたことがあります」

親友の一人だからな。何度か瑞希に雄二の事を話した事がある。

「えっと、姫路です。よろしくお願ひします」

雄二の挨拶に対して深々と頭を下げ、きっちり挨拶をする。
さすが、家柄の良いお嬢様、とでも言っておこうか。

「ところで、姫路の体調は未だに悪いのか？」

「あ、それは僕も気になる」

ようやく会話に入ってこれた明久。

「あ、吉井君？」

「姫路、明久がブサイクですまん」

行き成り明久の精神へと攻撃する。
ファイトだ、いじめられっ子。

「い、いえ。目もパツチリしているし、顔も整っていて全然ブサイクなんかじゃないですよ」

「そう言われると、確かに見てくれは悪くない顔をしているかもしれないな。俺の知人にも明久に興味を持っている奴がいたような気もするし」

「え？ それは誰なの!？」

明久は雄二の発言に勢い良く食い付く。
しかし、現実はそのなに甘くないと言ったことを、私は知っている。
この情報が、明久にとってどんなに残酷な話か……。

「確か、久保」

現実を受け止めるよ、親友。

「利光だったかな」

久保利光 〓 XY染色体（男）
Aクラスだったはずだ。
ちなみに、メガネ。

「……………」

「おい明久。声を殺してさめざめと泣くな」

ノンフィクションです。
全て実話です。

しかし、親友をこのままにしておくのも……………。
どうにかしてみよう。

「明久、雄二の言っていることは半分冗談だ。気にするな」

「え？ 残り半分は？」

「言ったたろう、気にするな」

「あ、うん。漣が言うなら……」

……ああ、嘘は言っていない。

奴は、「明久に興味を持っている」という領域は既に超えている。

……ファイト、親友。

「はいはい、その人達。静かにしてください」

バンバン、と福原教諭が教卓を叩く。

バキッ パラパラ ガシャン

「……面白い腕力ですね、教諭」

教卓が、木材の塊に変化した。

「え〜……替えを用意してきます」

教諭は早足で教室を出て行く。

いいのか、こんな設備で？

瑞希なんて苦笑いだ。

しかし、この学園のやり方は気に食わんな。

明久や雄二がFクラスなのは理解できる。バカだからな。

私も白紙で提出したのだからFクラスで文句は無い。

だが、高熱で早退せざるをえなかった瑞希がFクラスというのは、再試験が無いのは、少々理不尽だろう。

……少し、暴れてやろうか？

「……雄二、溲。ちょっといい？」

「ん？なんだ」

「どうかしたか？」

ちよつと、真剣に危ない事を考えていると、明久に声を掛けられた。

「こごじや話しにくいから、廊下で」

「別に構わんが」

「了解した」

コイツの事だ、話題の検討は付いている。

「んで、話って?」

「この教室についてなんだけど……」

「Fクラス教室についてか?」

「噂や想像以上に酷いもんだな」

「やっぱりそう思うよね」

「もちろんだ」

「Aクラスの設備は見た?」

「ああ、まるで高級ホテルだな」

「正直羨ましいほどにな」

口元が歪むのが自覚できる。

雄二も、微かに笑みを浮かべていた。

「そこで僕からの提案。折角二年生になったんだし、『試召戦争』をやってみない?」

まさか、コイツから提案するとは。かなり予想外だ。

「戦争、だと？」

「うん。しかもAクラス相手に」

「何が目的だ、我が親友？」

「いや、だってあまりにも酷い設備だから」

「わかりやすい嘘をつくな」

「まったく勉強に興味のないお前が、今更勉強用の設備なんかの為に戦争を起こすなんて、そんなことはありえないだろうが」

お前、わかってて言ってるな？

あたりまえだろう。

ちょっとしたアイコンタクトで意思疎通を交わす。

「そ、そんなことないよ。興味がなければこんな学校に来るわけが

」

「お前、この学校を選んだのは『試験校だからこその学費の安さ』が理由だと言っていないかったか？」

「あー、えーっと、それは、その……」

そろそろか？

そうだな。

「……姫路の為、か？」

そこまで露骨にビクリとすんなよ。
わかりやすすぎる。

「お前は本当に単純だな。詐欺師なんかになるなよ。向いてない」

「べ、別にそんな理由じゃ……」

「はいはい。今更言い訳は必要ないからな」

「だから、本当に違っつてばー！」

ああ、ヤベエ。

唇が歪む。

「気にするな、明久。そこまで焦らずとも問題ない」

「お前に言われるでもなく、俺達はAクラスを相手に試召戦争をやるうと思っていたからな」

「え？どうして？澪はともかく、雄二は全く勉強してないよね？」

以前は神童と呼ばれていたがな。

「世の中学力が全てじゃないって、そんな証明を試してみたくな」

「ほう、そんな事を考えていたか。それはなかなか面白い」

「お前は這い上がる事だけか？」

「当然。退屈はしないだろうしな」

「????？」

なんのことやらわかっていない様子だ。

「Aクラスに勝つ作戦はお前が考えているのだろう、雄二」

「もちろんだ　　つと、先生が帰ってきたな。教室の戻ろっぜ」

「あ、うん」

教室に戻って自己紹介が再開された。

「さて、それでは自己紹介の続きをお願いします」

「えー、須川亮です。趣味は」

何かハプニングがある訳でもなく、淡々と自己紹介は進んだ。

「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ」

「了解」

教諭に呼ばれ席を立ち、教壇へ向かう。

「坂本君はFクラス代表でしたよね？」

教諭に問われ、躊躇い無く頷く。

その表情に、不安など一切無い。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

一拍置いて、

「さて、皆に一つ聞きたい」

全員の視線を集める。

その様を確認した後、雄二の視線は教室内を巡る。

僅かにカビの臭いが漂うこの教室。

汚く、ボロい畳と、綿の無い座布団。

薄汚れた卓袱台は、埃が積もっている物もあった。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが」

置くのは一拍。

それだけで十二分。

「不満はないか？」

「大アリじゃあつ!!!!!!」

それは最早、魂の叫びに等しく。

「だろう？ 俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

『そつだそつだ！！』

『いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！ 改善を要求する！』

『そもそもAクラスだって同じ学費だろ？ あまりに差が大きすぎる！』

このクラスに蹂躪するのは不満の声で。

「みんなの意見はもつともだ。そこで」

自信に満ちた、力強い笑みを浮かべるのは、我がクラスの王^{マスター}。

「これは代表としての提案なんだが」

これから戦友になるこの兵隊^{クラスメート}に、

「 FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思っ

ただ一言。

Fクラスの代表、坂本雄二は。

戦争の引き金を引いた。

試召戦争編 第二問（後書き）

……。

ハイ、詰め込みすぎました。

なんか、かなり意味不明ですね。

うう、後悔しています。

次からはもう少しゆったりとやりたいと思います。

試召戦争編バカテスト 第三問

以下の英文を訳しなさい

『 This is the bookshelf that my
grandmother had used regularly
y.
』

姫路瑞樹の答え

『 これは私の祖母が愛用していた本棚です』

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

『 これは』

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか。

吉井明久の答え

『 ^ ￥\$』

教師のコメント
出来れば地球上の言語で。

御門澗の答え

『これは私が愛用していた祖母の本棚です』

教師のコメント

お祖母さんに何があったのか凄まじく疑問です。

試召戦争編バカテスト 第三問（後書き）

ネタがないですねえ。

……どうしましょうか。

フツ……困ったものです。

試召戦争編 第三問

Aクラスへの宣戦布告。

さすがに、我がクラスメイト達には現実味に欠ける提案だと思われる。

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるのは嫌だ』

『姫路さんがいたら何もいらぬ』

『御門がいればそれでいい』

そんな声が教室中から聞こえる。

男か女か判断できない私を選ぶより、女に見える秀吉を選べと思うのは私だけか？

まあ、そんなことはどうでもいい。

問題はそんなことじゃない。

たしかに、FクラスとAクラスでは戦力差がある。

とても大きな戦力差が……。

そんな相手に勝負を挑むのは、超ハイリスクだ。

普通に考えれば、まず不可能だろう。

しかし、それを可能にする可能性があるのが、『試験召喚戦争』だ。テストの点数に応じた強さを持つ『召喚獣』を喚び出して戦うことのできるシステム。

テストの点数だけが重要視されるのならば、我々の勝算はゼロだ。

しかし、これはあくまでも『戦争』。
つまり、点数など関係ない。

たとえどれだけ戦力差があろうとも、
戦略、戦術、兵の優秀さ、錬度、技術。

これに奇跡や偶然を加えてもいい。

それらを掌握してしまえば、全ては此方のモノ。

多対一で攻めてもいい。自分の得意な土俵に引きずり込んでもいい。

それが許されるモノこそが、『戦争』。

『殺し合い』だ。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺たちが勝たせてみせる」

雄二のはっきりとした声が響き渡る。

『何を馬鹿なことを』

『できるわけないだろう』

『何の根拠があつてそんなことを』

どう考えても、勝てるとは思っていないようだ。

私的に、雄二は学力こそ低いがバカではない、そう思っている。

でなければ、神童と呼ばれるような過去を持ち合わせていないだろう。

更に言えば、時折私でさえ驚くような発想をする事がある。
コイツにはあるのだ。
Aクラスに勝つと断言できる、なんらかの根拠が。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争に勝つことのできる要素が揃っている」

雄二の自信に満ちたその一声で、ざわめきが起こる。

不安の意味もあるのだろうが、期待の意味も含まれたざわめきだろ
う。
もちろん、私も期待している。

さあ、教えてくれ主よ。^{マスター}お前の策を。

得意の不敵な笑みを浮かべ壇上から皆を見下ろす雄二に、期待感が
膨らむ。

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に
来い」

「……………！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

必死になって顔と手を左右に振り否定のポーズをとる康太。

瑞希が顔を赤らめスカートのすそを押さえて遠ざかると、康太は顔

についた畳の跡を隠しながら壇上へ上がった。

ふむ。こんなときにもスカートを覗こうとするのはアイツらしいのだが。

それに気付かなかったのは、康太の技術が凄いのか、周りの奴等がアレなのか。

判断に困るな……。

「土屋康太。こいつがあ有名な、寡黙なる性識者だ」

「……………!!!(ブンブン)」

土屋康太。この名は別に有名な訳ではない。

しかし、寡黙なる性識者となると、話は別だ。

その名は男子には畏怖と畏敬を、女子には軽蔑を以って挙げられる。

『ムツツリーニだと……?』

『馬鹿な、ヤツがそうかどうか……?』

『だが見る。あそこまで明らか覗きの証拠を未だに隠そうとして
いるぞ……』

『ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ……』

畳の跡を必死に手で隠す姿が、果てしなく哀れに見える。
もはや誤魔化しようが無いというのに。異名は伊達ではないらしい。

「????」

瑞希は大量の疑問符を頭に浮かべているらしく、首を傾げている。
恐らく、『ムツツリーニ』という渾名がよくわからないのだろう。
しかし、教えてやらない。彼女には綺麗なまままでいて欲しい。
私の数少ない癒しの1つなのだから。

「姫路のことは説明する必要もないだろう。皆だってその力はよく
知っているはずだ」

「えっ？ わ、私ですかっ？」

「ああ。ウチの主戦力だ。期待している」

雄二の言うとおり、瑞希は我がクラスの主戦力^{キース}だ。
学年トップクラスの学力は頼りになる。

「そっだ。俺達には姫路さんがいるんだっ た」

「彼女ならAクラスにも引けをとらない」

「ああ。彼女さえいれば何もいらないな」

……先程から瑞希にラブコールを送っている奴は誰なのだろうか。
瑞希おじやんの父親から頼まれている以上、妙な奴ならば排除しなければなら
ないのだが……。

「木下秀吉だっている」

秀吉は特に学力で有名な訳ではないが、演劇部のホープだったりA
クラスにいる双子の姉の事は良く聞く。

『おお……！』

『ああ。アイツ確か、木下優子の……』

「当然俺も全力を尽くす」

過去に神童と呼ばれた男。

私が密かに期待する者の1人。

学力はわからないが、統率力はかなりのものだ。

『確かになんだかやってくれそうな奴だ』

『坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか？』

『それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか』

『実力はAクラスレベルが二人もいるってことだよな！』

「それだけじゃない。うちには、規格外な奴がいる」

……………。

私か？私の事か？

何だ規格外って。確かに一般人とは違う自覚はあるが、規格外とか言うなよ。

「このクラスには、御門漣がいる」

『御門漣。あの鉄人すら一目置く英雄、戦神か！？』

『英語がダメなだけで、他の科目ならあの霧島翔子すら凌駕するんだろ？』

『入学と同時に、姫路さんに言い寄って来た三年生を潰したって話も聞いたんだけど』

『他にも鎮圧した暴徒は数知れずの死刑執行人だ……………』

死刑執行人って、殺した事はないぞ。

確かに、瑞希に言い寄った屑は潰したが……………。
しつこかったからな、アイツは。

瑞希が何度嫌がっても寄ってくるから、顔面を殴って服を刻んで放置した記憶がある。

「ああ、コイツこそが規格外。姫路のような切り札^{エクス}じゃない。俺達の最終兵器だ」^{ジョーカー}

『ってことは、Aクラスレベルが三人いるってことか!?!』

『マジか……。Aクラス打倒、いけそうじゃないか?』

高レベルが三人いることでヤル気が出たのか、士気が上昇するFクラス。

「それに吉井明久だっている」

……シン

士気は、一気に下降した……。いや、雄二。このタイミングで明久を使うのは、ちょっとアレじゃないか?

「ちょっと雄二! どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ! 全くそんな必要ないよね!」

『誰だよ、吉井明久って』

『聞いたことないぞ』

やれやれ。

雄二の発言のせいで、大混乱じゃないか。

「ホラ！ 折角上がりかけてた士気に翳りが見えてるし！ 僕は雄二たちとは違って普通の人間なんだから、普通の扱いを って、なんで僕を睨むの？ 士気が下がったのは僕のせいじゃないでしょう！」

「そうか。知らないようなら教えてやる。こいつの肩書きは『観察処分者』だ」

あー、それを言うのか。

『……それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？』

「ち、違うよ！ ちょっとお茶目な十六歳につけられる愛称で」

「そつだ。バカの代名詞だ」

「肯定するな、バカ雄二！」

「あー、落ち着け明久。お前はただのバカではないだろう?」

「み、漣!」

「ほう。じゃあ、どんなバカだ?」

えー、あー。

「……学校公認の」

「もっと酷くなったよ!」

いや、すまん。フォローの言葉がなかったのだ……。少し反省していると、瑞希が首を傾げてコチラを向いた。

「あの、観察処分者ってどういうものなんですか?」

「ん? そうだな、簡単に言ってしまうえば教師の雑用係だ。力仕事などの雑用を、特例として物に触れるようになった試験召喚獣でこなす存在が《観察処分者》だ」

通常、召喚獣が物に触れることは不可能だ。奴らが触れることができるのは、他の召喚獣のみ。

幽霊だと思えば簡単かもしれない。

もっとも、校内の床は特殊な処理を施して召喚獣が立てるようにし

ているのだが。

「そうなんですか？ それって凄いですね。試験召喚獣って見た目と違って力持ちって聞きましたから、そんなことができるなら便利ですよ」

瑞希の眼が輝いている。

さすが、私が知っている人の中で最も純粋な娘だ。

「いや、そう大したものではないんだ」

確かに自分の思った様に使役できるのならば、それは恐ろしく便利だ。

試験召喚獣の力は、明久程度の得点であろうと絶大なものなのだから。

やろうと思えば岩を砕くことすら容易だ。

しかし、利点があるのならば、欠点があるのが道理。

基本的に、召喚獣という存在は教師の監視下でなければ呼び出せない。

つまり、便利に使いたくても、そんなことは不可能だということ。

明久は教師が召喚獣で作業したいときに呼ばれ、召喚獣を喚び出し、作業する。

そういった雑用を行うだけだ。

そこに明久に対してメリットなんてあるわけがない。

教師の監視下で自分の為に来ることなんて皆無といって良いのだから。

さらに付け加えると、物に触れるようになった明久の試験召喚獣の負担は何割かが自分にフィードバックされるらしい。

明久の召喚獣に重たいものを持たせて校舎内を走り回らせたとして、う。

そうすると、明久自身にもその疲労の何割かが返ってきてしまう。しかも、その作業中に荷物を召喚獣の足に落とすなんてことをすると同じ箇所痛みが生じる。

自らの為に使うことが不可能で、疲労や痛みは彼自身のものになる。これでは利点より欠点のほうが遙かに大きい。

それこそが、罰。

そして、だからこそその《観察処分者》。

凄い事でもなく便利というわけでもない。

成績不良かつ学習意欲の欠ける生徒に与えられるペナルティ。

それこそが、バカの代名詞と呼ばれる理由なわけだ。

『おいおい《観察処分者》ってことは、試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいってことだろ?』

『だよな。それならおいそれと召喚できないヤツが一人いるってことになるよな』

まあ、そういうことだ。

なんせ、痛みがフィードバックするのだ。

明久の召喚獣になにかあったら、明久自身にもなにかある。

召喚なんぞしたくないだろう。

「気にするな。どうせ、いてもいなくても同じような雑魚だ」

「雄二、そこは僕をフォローする台詞を言うべきところだよな?」

「とにかくだ。俺達の力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思う」

「うわ、すごい大胆に無視された!」

いいのかそれで?

まあ、いいだろう。

私が率先してFクラスを引っ張る訳ではない。
ここは、流れに身を任せるとしよう。

「皆、この境遇は大いに不満だろう?」

『『『当然だ!』』』

「ならば全員筆^ペを執れ! 出陣の準備だ!」

『『『おおーっ!』』』

「俺達に必要なのは卓袱台ではない! Aクラスのシステムデスクだ!」

『『『うおおーっ！！！！』』』』

「お、おー……」

おお。小さくだが、瑞希も握り拳を挙げている。こっぴつ雰囲気には慣れていないはずだが……。

「明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になつてもらつ。無事大役を果たせ！」

「……下位勢力の宣戦布告の使者つてたいてい酷い目に遭うよね？」

「大丈夫だ。奴がお前に危害を加えることはない。騙されたと思つて行つてみる」

「本当に？」

「ああ。俺を誰だと思っている」

雄二の明久いじめが始まった。

「大丈夫、俺を信じる。俺は友人を騙すような真似はしない」

雄二の更なる追い打ち。

「わかったよ。それなら使者は僕がやるよ」

「ああ、頼んだぞ」

お前、鬼畜だな。

人の使い方が巧いといってくれ。

雄二とアイコンタクトで会話をし、溜め息を付く。

明久、お前は疑う事を覚えろ。

・
・
・
・
・
・
・
・

「騙されたあつ！」

そんな台詞を叫びながら教室に転がりこんできたのは、もちろん明久だ。

私の予想をそのまま再現してくれた明久に、呆れと哀れみが生まれた。

「やはりそうきたか」

「やはりってなんだよ！ やっぱり使者への暴行は予想通りだったんじゃないか！」

「当然だ。そんなことも予想できないで代表が務まるか」

「まあ、正論だな。その程度の事も予想できない代表には従いたくない」

「漣！そんな冷静に判断をしなくてもいいから！」

いや、重要な事だぞ、これは。勝敗が賭かっているのだから。

「吉井君、大丈夫ですか？」

さすがに、制服までボロボロになっている明久を心配したのか、瑞希が駆け寄る。

「あ、うん。大丈夫。ほとんどかすり傷」

「吉井、本当に大丈夫？」

瑞希に続いて島田も駆け寄る。

……何かを企んでいるようだ。

「平気だよ。心配してくれてありがとう」

「そう、良かった……。ウチが殴る余地はまだあるんだ……」

「ああっ！ もうダメ！ 死にそう！」

慌てて腕を押さえて転げまわる明久。

オロオロする瑞希。

口元が歪んでいる島田。

「……カオスだ」

思わずそう呟いた私を、誰が責められようか。

「そんなことはどうでもいい。それより今からミーティングを行うぞ」

そう言って雄二は扉を開けて外に出た。
どうやら場所を移すらしい。

「あー、ドンマイだ、明久」

どう慰めれば良いのかわからない。
とりあえず、一言告げて雄二を追う。

「あの、痛かったら言っってくださいね」

そう明久に言っくと、瑞希は小走りで追ってきた。

「クラスメイトの方はどうだ、瑞希？」

「あ、はい。個性的な人が多くて楽しそうです」

「そうか。まあ、明久や雄二なんかは特に個性が強いからな。気を
つけておけ」

そう言っくと、瑞希は苦笑する。

先程までのやり取りで理解できたのだろう。

つと、明久達が少し遅れているようだ。

待ってやる為に足を止めると、瑞希もそれに倣う。

こういつ従順なところには、苦笑しか出てこない。

「どうかしました？」

「いや、愛らしいと思っただけだ」

「そ、そうですか」

顔を赤らめる瑞希の頭に手を置く。

そう、愛らしい。

私が瑞希に抱く感情は、これが最も当て嵌まる。

とは言っても、娘に抱く愛おしさであって女に抱く愛おしさではないのだが。

「……一度、Das Brechen ええと、日本語だと……」

……。
この和やかなムードをぶち壊す単語が聴こえる……。

「……………調教」

待て康太。

何故お前はその単語を知っている？

ドイツ語ができるわけではないだろう？

あれか？ 性に関する知識だからか？

「そう。調教の必要がありそうね」

「調教って。せめて教育とか指導って言ってくれない？」

「じゃ、中間をとってZ? ch t i g u n g 」

「……それはわからない」

「折檻だ、島田」

「あつ、そうよ。折檻だった、折檻。あれ？御門ってドイツ語できるの？」

「あ、漣君は英語が出来ない代わりにドイツ語ができるんですよ」

「とはいっても、ぎりぎり片言で日常会話ができるレベルだがね」

「待って、折檻って悪化してるよね」

「そう？」

ドンマイだ、明久。

「康太、何故『調教』という言葉を知っていた？」

慰めようがないので、疑問を消化することにした。

「……………一般教養」

「え、そうなんですか？」

「違う、違うぞ瑞希」

だから変な知識を蓄えなくてくれよ？

「相変わらずムツツリーニは性に関する知識だけはズバ抜けてるね」

「同感だ」

「……………！！（ブンブン）」

バカのような話をしながら歩くと、少し先を歩いていた雄二が屋上への扉を開いた。

雲一つない空から差し込む光。

春風とともに訪れた陽光に、眼を細めた。

……………風ではためく瑞希のスカートを注視してカメラを構える康太と、康太の後頭部にモデルガン突き付ける私以外は。

「すまん、康太。他の女ならば関係ないが、瑞希おじさまの父親に頼まれている以上、私には瑞希を護る義務があるのだ」

「……………！！（コクコク）」

チャキリと銃を鳴らすと、慌てたように首を縦に振る。
スカートから眼を離してくれたので、銃を右太股のホルスターに戻した。

・
・
・
・
・
・
・

「明久。宣戦布告はしてきたな？」

雄二がフェンスの前にある段差に腰を下ろす。

「一応今日の午後に関戦予定と告げてきたけど」

私たちもそれに倣い各々腰を下ろした。

「それじゃ、先にお昼ご飯ってことね？」

「そうなるな。明久に、今日くらいまともな物食べるよ？」

あー、あれは問題あるな。

「そう思っならパンでもおごってくれと嬉しいんだけど」

「えっ？ 吉井君ってお昼食べない人なんですか？」

「いや。一応食べてるよ」

「あれは食べているとは言えんだろっ？」

「何が言いたいのさ」

「いや、お前の主食って」

「水と塩だろっ？」

哀れみを含んだ雄二の声に続いて、私が告げる。

あれを昼食と言つのは、世界中の料理人に喧嘩を売っているようなものだろう。

「きちんと砂糖だつて食べているさー！」

「あの、吉井君。水と塩と砂糖つて、食べるとは言いませんよ……」

「舐める、が表現としては正解じゃろうな」

明久が叫んだ瞬間、皆の目が優しくなった……気がした。

「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いよな」

「し、仕送りが少ないんだよ！」

実際は結構多い筈なのだが。
ゲームや漫画に使っているのだろう。

「……あの、良かったら私がお弁当作ってきましょうか？」

「え？」

どこがおかしくないか？
しかし、さすがは瑞希。
優しさがずば抜けている。

「本当にいいの？ 僕、塩と砂糖以外のものを食べるなんて久しぶ

りだよ！」

お前がどうやって生きているのか、とても興味がある。
解剖させて欲しい。

……嘘だな。

「はい。明日のお昼で良ければ」

「良かったじゃないか明久。手作り弁当だぞ？」

「うん！」

流石にこれは、雄二もからかえないだろう。

「えっと、その。澪君もどうですか？」

「ん、私か？」

行き成りの提案だな。

「私は別に構わないのだが」

「いえ、ですがその」

チラリと私の手元に視線を落す瑞希。

「それだけ、というのはちょっと……」

「ふむ、確かにこれだけというのは、いささか問題があるか？」

私の手元にある物は、超万能栄養食。

あのダンボール命の蛇オヤジも愛する、

カロリー イト

が握られている。

「そついえばお前、いつもそれだけだったな」

「漣、それでは明久と五十歩百歩じゃぞ」

「……………漣は料理が出来るはず」

「出来るには出来るのだが、面倒でな」

私としては、食事という行為に『栄養の摂取』以上のものは求めていない。

いや、純粹に美味しい料理は食べたいと思うのだが。別に味は求めていなかったりする。

「ふむ、では頼もうか、瑞希」

「はい、わかりました」

嬉しそうに笑う瑞希

「……ふーん。瑞希ってば随分優しいんだね。吉井と御門に作ってくるなんて」

とは対照的に、どこかおもしろくなさそうな島田が声を挙げる。

「あ、いえ！ その、皆さんにも……」

「俺達にも？ いいのか？」

「はい、嫌じゃなかったら」

「それは楽しみじゃのう」

「……………（コクコク）」

「……………お手並み拝見ね」

本人を含めて七人分。
作るのに苦勞するはずだ。

「わかりました。それじゃ、皆に作ってきますね」

それでも嫌そうな顔は一つしない彼女に対して、

「姫路さんって優しいね」

明久が言う。

否定はしない、っと言うよりは、する必要が無い。

「いえ、そんな。私は……」

「今だから言うけど、僕、初めて会う前から君のこと好き」

「おい明久。今振られると弁当の話はなくなるぞ」

「にしたいと思ってました」

明久。すまん、お前を排除しなければならぬかもしれない。

「明久。それでは欲望をカミングアウトした、ただの変態じゃぞ」

「雄二、私には瑞希を護る義務があるのだが。どうすればいい？」

「ああ、刻めばいいんじゃないか？」

「了解した」

「すみませんでした！！ 僕が悪かったですっ！！」

折りたたみ式ナイフの刃を立てると、明久が土下座した。
コイツにはプライドが無いらしい。

「さて、話がかかなり逸れたな。 試召戦争に戻ろう」

意識を切り替え、耳を傾ける。

「雄二、一つ気になっていたんじゃが、どうしてDクラスなんじゃ
？ 段階を踏んでいくならEクラスじゃろうし、勝負に出るならA
クラスじゃろう？」

「そういえば、確かにそうですね」

「まあな。当然考えあつてのことだ」

「どんな考えですか？」

わかるか？ とでも言いたげに視線を向けてくる。
一応予想は付いている。
憶測だが。

「Eクラスについては、そうだな。戦うまでもない相手だから、か？」

「さすがだな、親友」

雄二が唇を歪める。

そんな雄二を見て疑問を言うのは明久だ。

「でも僕らよりはクラスが上だよ？」

「ま、振り分け試験の時点では確かに向こうが強かったかもしれないな」

「だが、実際のところは違う。お前の周りにいるメンバーをよく見れば、自ずと答えが出てくるだろう」

そう言われると、明久はグルリとメンバーを見回している。

「美少女が二人と馬鹿が二人とムツツリが一人。あとイケメン（？）が一人いるね」

「ふっ、わかってるじゃないか明久。だがクエスチョンマークは必要ないぞ」

「ええっ！？　そこに雄二が反応するの！？」

「明久、私はお前に言われるほど馬鹿ではない」

「知ってるよ！　知ってるからナイフを構えないで！！」

「……………（ポツ）」

「ムツツリーニまで！？　どうしよう、僕だけじゃツッコミ切れない！！」

「まあまあ。落ち着くのじゃ、代表にムツツリーニ、澪も」

この騒ぎを鎮めるのは、美少女にカウントされたであろう秀吉だ。ストッパー役が似合うらしい。

私も、珍しく馬鹿騒ぎに参加してみたが、あまり意味がなかった。

「む、そうだな」

「いや、その前に澪が珍しく妙な反応をしたことにたいしてツッコミを入れたんだけど」

「漣、続きを頼む」

私が言うのか？

まあ、いいが。

「瑞希に問題ない今、正面からやり合ったとしてもEクラスに勝利する事は容易だ。つまり、Aクラスが目標である以上はEクラスと戦っても無意味だということだ」

「？ それならDクラスとは正面からぶつかると厳しいの？」

「ああ。確実に勝てるとは言えないな」

「だったら、最初から目標のAクラスに挑もうよ」

なんとも愚かな提案をしてくれるじゃないか。

「話は最後まで聞くものだ、明久」

諭すように告げてやる。

「いいか、戦闘というものは経験が大切だ。これは時には技術や知識を上回る重要なモノだ。試召戦争の経験が皆無である現時点でAクラスに挑むなど、愚か以外の何物でもない」

「それに、初陣だからな。派手にやって今後の景気づけにしたいだろう？ それに、さっき言いかけた打倒Aクラスの作戦に必要なプロセスだからな」

これで説明終了か、雄二？

ああ、完璧だ。

苦笑を零しながら眼でコンタクトを取る。
「どうやら、問題ないようだ。」

「あ、あの！」

ん？ 瑞希にしては大きな声。
「どうかしたのだろうか？」

「ん？ どうした姫路」

「えっと。その。さっき言ってなかった、って……… 漣君と吉井君と坂本君は、前から試召戦争について話し合ってたんですか？」

「ああ、それか。ついさっき姫路の為にって明久に相談されて」

「それはそうとー！」

また雄二の明久いじめが始まるかと思っただが、明久本人が阻止しようだ。

「さっきの話、Dクラスに勝てなかったら意味がないよ」

「負けるわけないさ」

雄二は明久の心配を笑い飛ばす。

「お前らが俺たちに協力してくれるなら勝てる」

少し間をおいて、

「いいか、お前ら。ウチのクラスは 最強だ」

根拠なんてないその言葉に、私の闘志が燃え上がるのがわかる。

「いいわね。面白そうじゃない！」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

「……………（グッ）」

「が、頑張りますっ」

他の者から見たら、何と愚かな光景だろうか？

Fクラスさくがいくら刃を振るおうとも、一切通用しないからこそこのAさクラス。
いきょう

そんなAクラスに、真剣に勝負に挑もうとするFクラスの集団。

ああ、

何と愚かで

何と馬鹿馬鹿しくて

何と面白そうなことか！！

さあさあさあ、

諸君、私を愉しませておくれ！！

「そうか。それじゃ、作戦を説明しよう」

涼しい風がそよぐ屋上で、私たちは勝つ為の作戦に耳を傾けた。

ん？ なにか忘れていないだろうか？

何と云うか、命に関わるような。

そんな重大な問題を……。

試召戦争編 第三問（後書き）

この小説の更新を待っていてくれた方……がいるのかどうかわかりませんが、

突然音沙汰無しになってしまい申し訳ございませんでした！

なんというか、これからの小説について悩んでいたのです。

このまま、姫路さんと一对一の純愛にするか。

霧島さんやらお姉さんの方の木下さんやらを巻き込んでハーレムE
NDを目指すか。

しかもそんな悩みを抱えているときに、教師陣が大量の宿題を……。

もう、更新なんてできる状態ではなかったのです。

もう宿題ラッシュは終わりましたが、純愛にするかハーレムにするかはまだ決まっていないのです。

っというわけで、皆様のご意見を伺いたいです。

- ・ 一对一の純愛がいいのか、ハーレムがいいのか。
- ・ ハーレムならば誰を巻き込むのか。

上記の二つに関しての皆様のご意見をお待ちしております。

最後にもう一度。

更新が遅くなってしまい、申し訳ありませんでした。

試召戦争編バカテスト 第四問

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- 『(1) 得意なことでも失敗してしまうこと』
- 『(2) 悪いことがあった上に更に悪いことが起きるたとえ』

姫路瑞希の答え

- 『(1) 弘方も筆の誤り』
- 『(2) 泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、(2)なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

御門澁の答え

- 『(1) 河童の河流れ』
- 『(2) 弱り目に祟り目』

教師のコメント

正解なのに正解ではありません。字を良く見て回答しましょう。

土屋康太の答え

『(1) 弘方の川流れ』

教師のコメント

シユールな光景ですね。

吉井明久の答え

『(2) 泣きつ面蹴つたり』

教師のコメント

君は鬼ですか。

試召戦争編バカテスト 第四問（後書き）

バカテストのネタがありません。

困りました・・・。

試召戦争編 第四問

対Dクラス戦、開始。

なのだが、残念ながら私は現在補習室で補充試験を受けている最中である。

理由は単純。

あのテストで途中退室したため、点数が無いからである。合法的に暇潰しが出来るチャンスだというのに……。
悲しいものだ。

しかし、一人で虚しく試験を受けているのかというと、そうでもない。

私と共に途中退室した人物、姫路瑞希も受けているのだ。もともと、和気藹々とした雰囲気など皆無だが……。
まあ、テストを受けているのだから当たり前か。

で、今受けているテストが終わる。
つと同時に、何故か雄二が入室。

「漣、ちょっと」

手招きをしてくるので、とりあえず近づく。

「どうした？ なにかトラブルか？」

「ある意味、な」

「そうか。で、私に頼みがあると」

「そういうことだ」

テスト中の奴に頼むのか？
別に構わんが。

「で、なにがあった？」

「明久が逃亡する可能性がある」

「よしわかったなにをすればいい脅せだと了解した徹底的に脅して
くるから伝言を寄越せ」

雄二の顔面が引き攣っているがどうでもいい。
そんなことよりも暇潰しができるチャンスを削っていく明久に制裁
を与えねばならんだ。

「あー、とりあえず。こう言っておいてくれ。アレンジは任せる」

耳打ちでメッセージを聞いて、明久の居場所を教えてもらい現場へ
ダッシュ。

待っている明久。

私の暇潰しを潰すというのならば、

私がお前を潰してやる。

時には友情より貴重なものがあるのです。

・
・
・
・
・
・
・

む、明久の後姿を発見。

ふむ。少し戦意を上げてやろう。

「よう明久元気が元気だろ元気だつて言えよおい！」

「なんで突然怒られてるの!？」

何をバカなことを。

怒ってなどいないぞ、私は。

「ああそつだとも怒ってなどいないいくら貴重な暇潰しを潰されそ

うになったとしてもそんな事程度で親友を斬首刑に処してやるうな
と思うわけが無いだろう」

「ごめんなさい!! よくわかんないけどごめんなさい!!」

ふう〜。ストレス発散終了。

さよなら怒れる私。

おかえり日常の私^{いつも}。

「ってあれ? なんで遷が此処にいるのさ?」

「ああ、雄二からの頼まれ事があったな」

「テストはどうしたの?」

「抜け出した」

どうやら私は、教師陣からの受けがいいらしい。

そのおかげで、少しならば無茶を言っても受け入れてもらえるのだ。
今回もそれを利用し、テストの担当だった教師に頭を下げて許可を
頂いた。

「雄二からの伝言だが」

そこまで言って、近づいてくる気配があったため目を向ける。

明久もそれに気付いて、私の視線の先へと目を向けた。

「吉井！　　つと御門？　　なんでここに？　　じゃなくて、木下達がDクラスの連中と渡り廊下で交戦状態に入ったわよ」

ポニーテイルを揺らしながら駆けてきたのは、島田だった。ふむ。背は高く、脚も綺麗で美少女と言っていいのだが。どことなく女の魅力が欠けてる気がする。

「ああ、胸か」

なるほど、納得した。

「吉井、アンタの指を折るわ。小指から順に、全部キレイに」

バカだな明久。

口に出すからそうなるんだ。

ふむ、先程からかったからな。謝礼としてフォローしてやろう。

「たしかに、島田は胸部という女性的魅力には欠けるが」

「御門、アンタ地獄か天国か選びなさい」

明久は骨折ですむのに、私は死去してしまつらしい。
ハッキリ発言しているからだろうか？

「話は最後まで聞くものだぞ、島田」

とりあえず宥めておく。

「島田は胸部という女性的魅力には欠けるが、それを十分に補う事ができる魅力を持っている。明久、何だと思う？」

「えっ？ いきなり聞かれても……」

わからんか。

「あの体形だ。いわゆるモデル体形といつても過言ではない程バランスがいい。さらにあの脚線美。モデルにも劣らない魅力がある」

島田の脚に視線を向ける明久を見て問う。

「っというのが私の自論なのだが、お前はどつ思つ？」

「なるほど。そういう見方もあるのか」

なるほど、と呟きながら小さく頷く明久。
そして、私達の前には赤面した島田がいる。

少し遊びすぎたな。

ちよつと反省。

「そ、そんなことよりも試召戦争に集中しなさいよっ！」

あ、怒った。

すると突然、どこかで悲鳴と怒号が聞こえた。

『さあ来い！ この負け犬が！』

『て、鉄人！？ 嫌だ！ 補習室は嫌なんだっ！』

『黙れ！ 捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別講義だ！
終戦まで何時間かかるかわからんが、たっぷりと指導してやるか
らな』

『た、頼む！ 見逃してくれ！ あんな拷問耐えられる気がしない
』！』

『拷問？ そんなことはしない。これは立派な教育だ。補習が終わ
る頃には趣味が勉強、尊敬するのは二ノ宮金次郎、といった理想的

な生徒に仕立て上げてやるっ』

『お、鬼だ！ 誰か、助けっ イヤアアアー (ボタン、ガチャ)

』

おや、誰かが死んだらしい。

きっと素敵きんぐな教育を受けるだろう。

「島田さん、中堅部隊全員に通達」

「ん、なに？ 作戦？ 何て伝えんの？」

明久は一拍、間をおいて、

「総員退避、と」

「この意気地なし！」

うわ、痛そう。

眼を殴られた。わざわざチヨキで。

「目が、目があっ！」

「目を覚ましなさい、この馬鹿！ アンタは部隊長でしょう！ 臆

病風に吹かれてどうするのよ?。」

おお、良いことを言っている。

「いい、吉井? ウチらの役割は木下の前線部隊の援護でしょう? アイツらが戦闘で消耗した点数を補給する間、ウチらが前線を維持する。その重要な役割を担っているウチらが逃げ出したりしたら、アイツらは補給できないじゃない」

この言葉に、眼を見開く明久。

「ごめん。僕が間違ってたよ。補習室を恐れずにこの戦闘に勝利することだけを考えよう」

「ええ。それに、そこまで心配することないわ。個別戦闘は弱いかもしれないけれど、これは戦争なんだから多対一で戦えばいいのよ」

「そうだね。よし、やるぞ!」

「うん。その意気よ、吉井!」

拳を上げる二人。

苦笑を零していると、報告係が走ってきた。

「島田、前線部隊が後退を開始したぞ！」

「総員退避よ」

コイツ、即決しやがった。

「吉井、総員退避で問題ないわね？」

いや問題だらけだ。

さすがの明久も、此処は否定してくれるはずだ。

「よし、逃げよう。僕らには荷が重すぎた」

「そうね、ウチらは精一杯努力したわ」

……。

少しでも信じた私が馬鹿でした。

仕置きが必要だな。

「そんなお前達にプレゼントだ。恐ろしくやる気が出るぞ」

「え、何？　どんなプレゼント？」

「お前に雄二からの伝言だ」

「伝言？」

真面目な顔をして頷いてやる。

その真剣さが伝わったのか、明久も真剣な表情になった。

「いいか、とても重要な伝言だ。一字一句、聞き漏らすなよ？」

「う、うん。わかったよ」

「ならば伝言だ。よく聞け」

ゆっくりと瞬きをして、明久の眼をしっかりと見据える。

「『逃げたら、刻む』」

新しい刃物を調達したばかりなんだ。

これは雄二から『逃げたらコロス』という伝言をアレンジしたものだ。

まあ、意味合いは同じだ。問題ないだろう。

「全員突撃しろーっ！」

明久がやる気になってくれた。
ありがたいことだ。

さて、私は補充試験を受けなければ。

再び補習室に戻り、担当教師に頭を下げて感謝しておく。

「御門漣、ただいま戻りました」

「おや、おかえり。席についてください」

指示された席につく。

「科目はどうしますか？」

「総合科目をお願いします」

テスト用紙を貰い、軽く深呼吸。

「始めてください」

試召戦争しきしょうの準備じゆんびを始める。
刃を砥ぎ、弾丸を込める。

さあ、待っているDクラス。
処刑の時間まで、あと少しだ。

・
・
・
・
・
・
・

補充試験を終えて、私と瑞希は現在雄二の隣に立っている。

「よう、テストはどうだった？」

「問題ない。いつもどおりだ」

ああ、英語が悲惨なのだっていつもどおりぞ。

「瑞希、お前はとうだった？」

「私は大丈夫でした」

「さすが、学年三位だな」

「い、いえ、そんな大したことでは」

わたわたと手を振る。

そんな瑞希を見て、微苦笑が零れるのは雄二も同じらしい。
微苦笑を止め、真面目な話。

「戦況の方はどうなんだ？」

「今のところはピンチってワケでもないが、危ない状況にいるのは確かだ。死者が絶賛続出中だよ」

「援軍は出さなかったのか？」

「出さなかつたんじゃないやなくて出せなかつたんだよ」

そうか。

なにか策を考えなければマズいな。

「報告！！ Dクラスがどうやら数学の船越先生を呼び出している模様！」

「おいおい、この状況で船越先生かよ……」

「戦線を拡大させる気だろう。バトルフィールドを拡大させるのは戦での基本だ」

狭ければ満足に動けんしな。

「ちっ、どうする?」

「いまからでは何をしても間に合わんだろっさ。素直に援軍を送った方が、ん?」

二人で頭を捻っている時に見えたのは、走ってくる須川だった。

「おい須川!!」

「ん、御門か。なんだ?」

「無断での敵前逃亡は銃殺刑だ」

「ちがうっ! 逃亡じゃないからソレを向けるな!!」

かなり怯えた表情でソレ、モデルガンを指差す。

仕方ないのでホルスターに差し込む。

「どうした? 戦線から抜け出すんだ。生半可な理由では額に風穴が開くと思え」

「そんな物騒な脅し方するなよ!!」

「いいから早く応えろ。蜂の巣にするぞ」

「吉井隊長から提案で、先生方に偽情報を流せと言われましたっ！」

ガクブルと震えながら敬礼をしてくれた。
しかし、なるほど良い案だ。
明久にしてはヤルじゃないか。

「内容は？」

「いや、それはまだ……」

「そうか。だったら、こういう内容でどうだ」

コソコソと須川に耳打ち。
なんとやっているのかは、私には聞こえなかった。

「あの、どんな情報を流すんですか？」

いままで黙っていた瑞希が、おずおずと聞いてくる。

「私にも聞こえなかったからわからん。しかし、雄二の案だ。問題ないだろう」

「本当に坂本君の事を信頼してるんですね」

「当然だ」

クスリと笑う瑞希に、唇を歪めて答える。

「親友なんだ。無条件で絶対の信頼を誓ってやるぞ」

眼の端に駆けて行く須川の姿が映った。

さて、内容を教えてもらうか。

「偽情報の内容とやらは、どんなものにしたんだ？」

「私も気になります」

「そうか、気になるか。待ってる、すぐにわかる」

見慣れた意地の悪い笑みを浮かべる雄二に、私と瑞希は眼を見合わせた。

どういふことかわかりますか？

いや、全く。とりあえず、コイツの言つとおり待つことにしよう

う。

雄二の時よりも明確で複雑なアイコンタクト。
幼馴染だからできる技で、瑞希の密かな自慢なんだとか。

ピンポンパンポン 《連絡いたします》

こんなのを自慢にしてどうするんだ、という思考に潜っていると、
スピーカーから聞き覚えのある声 flowed。

この声、須川だな。

どうやら、偽情報とやらは校内放送で流すらしい。

《船越先生、船越先生》

呼び出すのは、先程Dクラスが呼び出した船越教諭。
いったい、何を……？

《吉井明久君が体育館裏で待っています》

何故だろうか。

明久に対する哀れみで、心がいっぱいになった。

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

雄二、腹筋崩壊。

腹を抱えて、涙が出るほど笑っている。

瑞希も、始めは驚きで眼を見開いていたが、次第にクスクスと笑い始めた。

まあ、わからんでもない。

相手があのだ。ある意味正常な反応だと言ってもいい。

婚期を逃し、ついには単位を盾に生徒達に交際を迫るようになった、あのだ。船越教諭に。

恐らく、いや、確実に船越教諭は体育館裏に向かうだろう。

そして明久を待つのだ。

明久が行くまで、何時間でも待っている可能性が高い。

すまん、明久。あれは防ぎようがない。

心中で謝罪しておく。

もっとも、戦況には良い影響を与えたらしい。

『おい、聞いたか今の？』

『ついに吉井が本気になったぞ……』

『《観察処分者》の名は伊達じゃないってことか……』

『吉井が自分の体まで売ったんだ！俺達も行くぞ！』

『『『オオーーっ！！！！』』』

士気が急上昇。

我がクラスメイトはかなりヤル気が出た。

『須川あああああっっ！』

明久の叫び声が、聞こえた気がした。

骨は拾ってやる。安らかに眠れ、明久。

主に貞操的な意味合いで。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「飴舐めよ」

「突然だなおいっ！」

「あ、イチゴミルク味がありますよ。いりますか？」

「お前もか姫路！」

「いいッッコミだ。」

「ッッコミ要員は明久だけかと思っていたが。」

「イチゴミルク味の飴を受け取り、包装を剥いで銜える。
ん、甘い。」

「そんなことより、そろそろ援軍送った方がいいんじゃないか？」

「準備は出来てるからな。いつでもOKだ」

「ならば行け。任務は明久の部隊の援護。生存者は連れて帰れ」

「おう、了解」

「お前の剣であり銃　つまり従者である私が言うのはおかしいが、
お前に与える命令は二つだ」

「真剣な表情で、私の命令を聞こうとする雄二。」

「ああ、それでいい。戦争は、私のほうが経験値がある。」

「死ぬな。死にそうになったら逃げる。この二つだ」

「わかった。肝に銘じておく」

「そうか。じゃあ行ってこい、マスター主よ」

拳をぶつけ合わせ、再会を祈る。

「よし、行くぞー!」

『『『『』』』』』

雄二を先頭に、雄二の部隊が明久の部隊の救助に向かう。
彼等を見送った後、

「さて、やる事が無くなったな」

「皆行っちゃいましたからね」

「やれやれ。何か聞きたいことはあるか？」

「ええっと、そうですね。だったら、坂本君達について聞きたいです」

「了解した、姫君よ」
プリンセス

壁に体を預け、我が親友達についての話を始めた。

・
・
・
・
・
・

話を続けていると、ドタバタという音が響き渡った。

「戻ってきたぞ、漣！」

「おかえり、雄二。無事で何よりだ」

「おかえりなさいです」

部隊を引き連れて戻ってきた雄二を出迎える。
ゾロゾロと戻ってくるクラスメイトを眺めながら、雄二に尋ねた。

「どうだった？」

「ああ、援軍はギリギリ間に合ったってとこだ。俺達を見て相手は撤退。その後生存者を回収した。つっても大幅に減少してるが」

「大幅な減少ぐらい予想の範囲内だ、問題ない。追撃はどうだ？」

「そつちも指示通り。本隊が来たら面倒だしな」

肩を竦める雄二に、唇を歪めて告げる。

「さて、いよいよ最後の任務だ」
ラスト・ミッション

「わかってるっての」

生存するクラスメイトを呼び集め、作戦会議だ。

「さて、諸君！これからDクラスに総攻撃を始める！」

「それで、内容は？」

今回の任務について、島田から質問だ。

「いいか、よく聞け。今回は下校中の生徒に紛れて目標に接近、取り囲んで討ち取れ」
ターゲット

「ふむ、それは些か姑息な作戦ではないじゃろつか？」

秀吉、そんなことを言っていると、戦争には勝てんぞ。

「確かに、そう思っかしのれない。だがこれは戦争、殺し合いだ。そんなことで躊躇っていると」

「死ぬぞ」

雄二からのアイコンタクトを受け取り、後を引き継ぐついでに極微量の殺気を出す。

これだけで、真剣な表情になり背筋を伸ばしてくれる。素直なのはいいことだ。

「説明を続ける」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

囲んで多対一の状況を作るんだ！」

戦場に響き渡るのは雄二の声。

「そっちから回り込め！ 俺はコイツに数学勝負を申し込む！」

「なら、俺は古典勝負を」

「日本史で」

我がクラスの皆が、相手を取り囲んでいる姿がそこら中に見える。

どうやら、しっかり作戦に従ってくれているようだ。

『Dクラス塚本、討ち取つたり！』

一際、大きな声。

どうやら、塚本とやらを巧く討ち取つたようだ。

各クラスのHRも終わり、教師陣を捕まえやすさを向上させるのも、この作戦の狙いだ。

「雄二、どこだ！」

ふと声がした方を見ると、明久が生徒の間を縫うように疾走しているのが視界に入る。

雄二の居場所を教えるため、声をかけようとした時。

「救援に来たぞ！ もう大丈夫だ！ 皆、落ち着いて取り囲まれなように周囲を見て動け！」

Dクラス代表、平賀源二が出てきた。
奴が来たということは、

『Dクラスの本隊だ！ ついに動き出したぞ！』

我がクラスの誰かの声が聞こえる。
このタイミングで敵本隊が来るか……。

「本隊の半分はFクラス代表坂本雄二を獲りに行け！ 他のメンバーは囲まれている奴を助けるんだ！」

『おおー！』

平賀の号令の下、あっという間に雄二の周りがDクラスメンバーで囲まれる。

雄二の周りにも本隊がいるため、時間はそれなりに稼げるはず。ならば私のすべきことは……。

「Fクラスは全員一度撤退しろ！ 人ごみに紛れて攪乱するんだ！」

相変わらず、よく響く雄二の声。

あの状況から、その選択はベストだ。

一時退かねば殺^{ヤラ}される。

「逃がすな！ 個人同士の戦いになれば負けない！ 追いつめて討ち取るんだ！」

個人個人の實力に勝るDクラスだから取れる作戦。

本隊の人間も分散して、追討にかかっているようだ。

その分、平賀の防御は薄くなっているが、平賀はDクラスの代表。つまり、Dクラス中で最も戦力の高い人物。

普通のFクラスが相手ならば、取り囲まれない限り負けはありえない。

戦力が分散した状況でこの判断は、恐ろしいまでに的確。

人目を避けながら移動している私の視界に平賀の姿が入る。

手を横に突き出し、瑞希を止め、私も停止。

近くに近衛部隊が潜んでいるはず。

少し状況を窺ってから出たほうがいい。

「チャンスっ！」

そう叫ぶのは、先程見かけた明久。
平賀の下へと駆け出している。

「向井先生、Fクラス吉井が」

「Dクラス玉野美紀、試獣召喚^{サモン}」

「なっ、近衛部隊!？」

平賀に勝負を挑もうとした明久の前にDクラスの子が現れた。
近衛部隊だ。

「残念だったな、船越先生の彼氏クン？」

「ち、違う! アレは雄二が勝手に」

「そんなに照れなくてもいいじゃないか。さ、玉野さん。彼に祝福を」

「わかりました」

「ちくしょう! あと一歩でDクラスを僕の手で落とせたのに……」

「何を言っているんだ彼氏君。いくら防御が薄くみえても、さすがにFクラスの人間が近づいたら近衛部隊が来るに決まっているだろう？ ま、近衛部隊がいなくてもお前じゃ無理だろうけどな」

明久を一瞥する平賀。

ほう、我が親友にそんな態度を取って、無事ですむと思つのか？

「そうだね。僕じゃ無理かもしれないけど」

明久が、平賀の後ろに回り込んだ私と瑞希に眼を向けた。

「姫路さん、漣、後はよろしくね」

「あれ？ 姫路さんと御門、どうしたの？ Aクラスはこの廊下は通らなかつたはずだけど……」

今回、私と瑞希が違うルートを通った理由と、ここまで戦に出なかつた理由は極単純。

点数の消費を抑えること。

そして、もう一つ。

私と瑞希がFクラス所属だと思う奴は、かなりの変わり者だ。

ソレを利用した。

私達がFクラス所属であることを秘匿するため。

この総力戦でも私達だけ他の者とは違う行動を取り、敵の代表に後ろから奇襲をかける。

私達以外のFクラスを、全て囮にして。

「いえ、そうじゃなくて……」

もじもじと身体を小さくする瑞希。
やはり一々小動物を彷彿させる。

「Fクラスの姫路瑞希です。えっと、よろしくお願いします」

「Fクラス所属、御門澪だ。よろしく」

「あ、こちらこそ」

「その……Dクラス代表の平賀君に現代国語勝負を申し込みます」

「……はあ。どうも」

「では、私はDクラス近衛部隊の玉野美紀に現代国語勝負を申し込み
む」

「え、あ、はい？」

未だに状況が飲み込めていない二人。
だが、戦場で混乱すると、

死ぬぞ。

「さて、瑞希。やるか」

「はい。えっと、では」

「「^{サモン}試獣召喚」」

『Fクラス 姫路瑞希&御門漣 VS Dクラス 平賀源

二&玉野美紀

現代国語 339点&357点 VS 129点&11

3点 『

「え？ あ、あれ？」

「え？ ええ？」

戸惑いながら、平賀と玉野は召喚獣を構えさせ、相對する。
だが、相手にならない。

瑞希の召喚獣は、外見からして強そうだ。
背丈の倍はある大きな剣を軽々と構えている。
もつとも、見てくれは瑞希をそのまま小さくしたようなものだが。

そして、私の相棒。

通称、ジャック。

私をそのまま小さくし、黒のロングコートを羽織らせたらこんな感じになるのだろう。

左腰に刀を一本吊るし、右太股と後ろ腰に銃を取り付けている。

ちなみに、右太股の銃は口径の大きなリボルバー。

後ろ腰の銃は口径の小さな自動小銃。

なんで武器の選択がこんななのかは知らない。

まあ、そんなことよりも。

ガリッ！ と銜を噛み砕き、宣言する。

「さあ、処刑の時間だ」

「い、ごめんなさいっ」

重たそうな剣を持っているくせに、素早い動きで相手に肉薄する瑞希の召喚獣。

そしてそれをフォローするかのようになり、ジャックの拳銃が火を噴く。

両手に銃を持ち、相手の武器に向かって弾丸を射出。

狙い通り、武器に弾丸がブチ当たり、火花が散る。

その反動で、相手二人の召喚獣は大きく仰け反った。

そして、そんな無防備な召喚獣の目前にはあの大きな剣を振りかぶった瑞希の相棒。

ブンツ！ と横一閃に剣を振るい、二人を一度に殲滅した。

反撃なんて許さない。

一瞬で討ち取り、対Dクラスの戦争は私達の勝利で幕を閉じた。

試召戦争編 第四問（後書き）

召喚獣同士の戦闘シーン（？）の描写はよくわかりません。

一応頑張っていますが、これで伝わるかどうか……。

戦闘シーン（？）だけじゃなく、全体を通して滅茶苦茶な気がします。

特に、最初の方で暴走させてみた洩君とか……。

というか、姫路さんの補充試験が終わったタイミングって、あの時でいいのでしょうか？

あ、そういえば。

各話の間に挟んで執筆していたバカテストですが、

ネタを考えるのが恐ろしく難しいため、

railgun様のアドバイスのに従い、3話に1話挟むかどうかにすることにしました。

楽しみにしてくださいました方……がいるのかどうか疑問ですが、この場を借りて謝罪いたします。

試召戦争編 第五問（前書き）

よ、ようやく完成。

長かった……。

ちよっとしたスランプとネタの無さが招いた更新日の遅れですハイ。
いや、待たせてしまって申し訳ないです。

試召戦争編 第五問

Dクラス代表 平賀源二 討死

『うおおーっ!』

その報せを聞いたFクラスの勝鬨とDクラスの悲鳴が混ざり、耳をつんざくような大音量が校舎内を駆け巡る。

『凄えよ! 本当にDクラスに勝てるなんて!』

『これで置や卓袱台ともおさらばだな!』

『ああ。アレはDクラスの連中の物になるからな』

『坂本雄二さまさまだな!』

『やっぱりアイツは凄い奴だったんだな!』

『坂本万歳!』

『オイ、御門の射撃見たか? 凄かったな!』

『姫路さん愛しています!』

雄二を褒め称える声が聞こえる。

そして、最後に発言した奴。いい加減出て来い。

瑞希にふさわしくないような男ならば排除せねばならん。

雄二は、がっくりうなだれているDクラスの生徒たちの奥でFクラスの皆に囲まれているようだ。

「あー、まあ。そう手放して褒められると、なんつーか」

「坂本！ 握手してくれ！」

「俺も！」

やれやれ、英雄扱いだな。

どれだけアノ教室に不満を持っていたのかが理解できる。

「坂本君の扱いが凄いです」

「当然だ。Fクラスである自分達がDクラスを打ち破ると言う結果は、アイツがいなければ達成できなかったのだからな」

いや、Dクラスに挑もうという機会すらなかったかもしれん。隣にいる瑞希の呟きに、そう返してやった。

「私達も英雄に会いに行こうか、瑞希」

「あ、はい」

瑞希を従え、生徒達の間を縫って雄二に近づく。
と、奇妙な光景が広がっていた。

明久の手首を捻っている雄二

雄二に手首を捻られている明久

足元に落ちている包丁

意味不明だ

瑞希も首を傾げている。

「奇妙な行動をしているな、お前達」

「おお、遷、ちょうど良かった。ペンチ持ってないか？」

「いや、ないな。刃物ならば腐るほど持っているが」

「じゃあ、それでいい。大きめの刃物を四本貸してくれ」

「ああ、構わんぞ」

「！？ す、ストップ！ 僕が悪かった！」

「……チッ」

後に聞いたことだが、何故大きめの刃物四本だったかというところ、四肢を貫いて磔にするつもりだったらしい。

雄二、私が言うのもどうか思うが……

おまえ、実は悪魔だろうか？

「まさか姫路さんと御門がFクラスだなんて……信じられん」

背中から誰かの声。

振り向くとそこにはヨタヨタとこちらに歩み寄る平賀の姿があった。

「あ、その、さっきはすいません……」

従者のごとく、私の斜め後ろにいた瑞希が謝りだす。

「いや、謝ることはない。全てはFクラスを甘く見ていた俺達が悪いんだ」

規模や方向性は違うが、これは戦争^{「しあせう」}。

今回は騙し討ちが中心になったが、瑞希が謝る必要性は皆無だ。

「ルールに則ってクラスを明け渡そう。ただ、今日はこんな時間だから、作業は明日でいいか？」

代表は大変だな。

勝てば英雄、負ければ戦犯。

こういったところも、戦争に類似している。

「もちろん明日でいいよね、雄二に遷？」

私に聞く必要はないだろう。代表は雄二だ。

いつの間にか私が代表補佐サブリーダーになってはいるが……。

「いや、その必要はない」

「え？　なんで？」

「Dクラスを奪う必要がないからだ」

キョトンとした明久に雄二がそれが当然のことのように告げる。

「えっ、それはどういうこと？　折角普通の設備を手に入れることができたのに」

「やれやれ。明久、忘れたか？ 私達の目的は、Aクラスを打破^{こぼ}することだろう？」

打倒Aクラス。それこそが我々の最終目標にして到達点。

「でもそれなら、なんで標的をAクラスにしないのさ。おかしいじゃないか」

「少しは自分で考えろ。そんなんだから、近所の中学生に『馬鹿なお兄ちゃん』なんて愛称をつけられるんだ」

雄二。実は中学生ではないのだ……

「なっ！ そんな半端にリアルな嘘をつかないでよ！」

「雄二。明久は確かに『馬鹿なお兄ちゃん』と呼ばれていたぞ。あー、小学生に」

「……人違いです」

「よ、吉田君……」

「まさか……本当に言われたことがあるのか……」

スツと目を逸らす明久に、衝撃の事実^{じじつ}に目を開く瑞希と雄二。

「とにかく、だ。私達はDクラスの設備に手を出すつもりはない……」

「それは俺達にはありがたいが……。それでいいのか？」

「無論、条件付きだがね」

このまま解放など、ありえるわけがないだろう？

「一応聞かせてもらおうか」

「なに、そんなに大したことじゃない。俺が指示を出したら、窓の外にあるアレを動かなくしてもらいたい。それだけだ」

「Bクラスの室外機か」

「設備を壊すんだから、当然教師にある程度睨まれる可能性もあるとは思うが、そう悪い取引じゃないだろう？」

悪い取引だと思つのは、真正の馬鹿だけだろう。うまく事故に見せかければ厳重注意のみで済み、それだけで三ヶ月間の教室で過ごすという状態から逃れられる。

「それはこちらとしては願ってもない提案だが、何故そんなことを

「？」

もつともな疑問だ、Dクラス代表。

だが、こちらとしては対Bクラスの作戦に使うとしか言うわけにはいかん。

情報が漏れるのは喜ばしくないからな。

「次のBクラス戦の作戦に必要なんでな」

「……そうか。ではこちらはありがたくその提案を吞ませて貰おう」

「タイミングについては、後日我々の方から連絡をする」

「ああ、ありがとう。お前らがAクラスに勝てるよう願っているよ」

「ハッ、ご冗談を。そんなこと、お前が思っているはずがないだろう」

「それはそうだ。AクラスにFクラスが勝てるわけがない。ま、社交辞令だな」

じゃあ、と手を挙げてDクラス代表の平賀は去っていった。

しかし、平賀よ。知っているか？ この世に『絶対』なんて存在しない。

『もしかしたら』という可能性が0・1%でもあれば、それはもはや『絶対』ではないのだから。

お前のその考え、私達が粉碎^{こぼ}してやる

「さて、皆！ 今日のご苦勞だった！ 明日は消費した点数の補給を行うから、今日のところは帰ってゆっくりと休んでくれ！ 解散！」

雄二の号令に従い、我がクラスメイトは自分のクラスへと向かい始めた。

「雄二、漣。僕らも帰ろうか」

「そうだな」

「ああ、そうするか」

私はあまり動いていないから疲労は無い。
しかし、体が弱い瑞希が心配だ。送った方がいいだろうか？
そんなことを考えていると、

「あ、あのっ、坂本君っ」

「ん？」

瑞希が雄二を呼び止めた。

「お、姫路。どうした？」

「実は、坂本君に聞きたいことがあるんです」

胸に手を当て、少々興奮気味に話す瑞希。
ふむ、私と明久は席を外した方がいいかもしれん。

「さて、明久。私達は席を外そうか。なにやら重要な話になりそう
だ」

「うん、そうだね」

「雄二、荷物は持って行く。直接玄関に來い」

「おう、たのむ」

瑞希と雄二に背を向け、教室へと向かう。

……前に、秀吉に声を掛けられた。

「漣、伝言を頼まれてくれんか？」

「相手と内容による」

「姉上にじゃよ。少し遅れると伝えておいてほしいのじゃが」

「理由を聞かれたら？」

「演劇部に用ができてしまったのう。少し時間がかかってしまうのじゃよ」

「了解した、我が妖精よ」

「……漣、その妖精や女神という名前を付けるのは止めたほうが良いと思うのじゃが」

「文句があるのならば私の父に言うんだな。これはアノ人の血のせいだ」

呆れたように言う秀吉だが、コレばかりはどうしようもない。特殊な名前を付けるという行為は血であるうえに、もはや癖なのだから。

「まあ、伝言の件は心配するな。しっかり伝えておく」

「うむ、たのむぞい」

用事を済ませに行ったのだろう、小走りで去る秀吉を見送り、明久の肩を叩く。

「というわけだ。私の荷物も頼む」

「うん、わかった。任せといて」

明久はFクラスの教室へ、私は優子が所属するAクラスの教室へと向かった。

・
・
・
・
・
・
・
・

「木下優子はいるか？」

Aクラスの教室へ入室し、そう発言する。

誰か個人に聞いたわけではなく、教室内に響き渡る程度の音量での発言だ。

突然だが、人間は気になる音に対して無意識に反応してしまう、ということをご存知だろうか？

例えば、どこかで小銭が落ちた音。例えば、授業中に教室のドアが開いた音。

この音を聞いたとき、無意識にその音の方へ顔を向けている、という経験が皆様にあるはずだ。

閑話休題

そんなわけで教室内にいた生徒達の視線をモロ浴びてしまう。自分で言うのはどうかと思うが、私の容姿は優れているらしい。あの二人の子なのだから容姿端麗でなければ逆におかしいとは思わが。

……男か女か判断できない容姿では、あまり嬉しくはないのだが。とにかく、そのおかげで視線をいうものには慣れている。慣れてはいるが、やはり心地が良いというモノではない。好奇の視線に少しばかり顔を顰めていると、優等生っぽい、大和撫子という呼び名が似合いそうな女生徒が近づいてきた。

「……あなた、誰？」

「人に名を聞くときは自分から、と返すのがテンプレートだが、どうでもいいか。Fクラス所属、御門澪だ。アンタは？」

「……Aクラスの代表、霧島翔子」

「ほう、アンタが主席の霧島か。よろしく、代表さん」

別に媚びを売る必要もないので、挨拶は軽い。さて、とっとと用件をすませるか。

「で、私は木下優子の……友人？　なのだが、彼女の弟君から伝言を預かっている。本人さんはどこにいる？」

「……今は教室にいない」

「どこにいるかわかるか？」

「……ちょっと待ってて」

そう言っただけで私から離れ、短髪のボーイッシュな女生徒の方へ向かった。

やる事もないので、とりあえず霧島の後ろに付いていく。

「……愛子、優子がどこにいるか知ってる？」

「ん？ ああ、優子ならお手洗いだよ」

「……呼んでくる？」

「ああ、頼む」

霧島は優子を呼びに教室から出た。

待つしか選択肢は無くなったようだ。

教室内で待つか、外で待つか。

さて、どちらにしようかと考えていると、愛子とやらが話しかけてきた。

「ボクとしては、優子より君に興味があるんだけど」

「単なる好奇心としての興味か、性的対象としての興味か。後者ならば失せてくれ。面倒だ」

「サラッと凄い事をいうね、君。ご心配無く、前者だよ」

少なくとも、今はね。と、クスクスと笑う。

今は、ときたか……。

私の行動が、この女を妙に刺激しなければいいのだが。

「あ、ボクの名前は工藤愛子だよ。よろしくね」

「御門漣。こんな容姿だが男だ、よろしく。縁があれば、の話だが」

「酷いなー。そんなにボクのこと、嫌い？」

「いや、嫌いというわけではない」

というか、なにもされていないのに嫌うとは思えん。

「じゃあ、なんでそんなに冷たいのかな？」

「面倒くさそうだからだ」

「ふうん、まあいいよ。好きになっちゃったら、本気で君の心を奪いに行くだけだから」

「……」

「ん、どうかした？」

「いや。この私を相手に、そんなことを言った者はお前が初めてだからな。驚いたただけだ」

男か女かわからない私に、面と向かって「心を奪う」なんて告げたのはコイツが初めてだ。

何と言うか、喜ばばいいのか悲しめばいいのか、そんな感慨に浸ってしまう。

少しばかり談笑していると、霧島が優子を連れて戻ってきた。

「遅かったな、女神^{ゴッテス}」

「その呼び方は止めなさい。誤解されるでしょ」

どう誤解されると？

お前が女神で私が天使とか？

この髪ならそんなことを言われても仕方ないかもしれん。

「そんなことはどうでもいいわ。秀吉から伝言があるんだって？」

「ああ、そうだった。今日は遅れるらしい。部の急用で呼び出されたとか」

「そつか。わかった、わざわざありがとね」

「友人の為だ。この程度のことは構わんよ」

さて、これで用は終わった。

明久達が待っているかもしれん。玄関に向かうか。

「そういえば、聞いたわよ。Dクラスに勝つたらしいわね？」

「ああ、殺してきた」

「物騒な言い方は止めなさい。で、訊きたいことがあるけど、いい？」

内容は予想できる。

コイツのことだ。私がFクラスに入った理由も知っているのだろうし。

「Fクラスの最終目標って、A^{ココ}クラス？」

「さあな。そうかもしれないし、Bクラス止まりかもしれない」

「教えるつもりはないってことね？」

「当然だ。情報を教えて、コチラに利益になることがない」

言葉を濁しながら、わかりやすい言の葉で情報を渡す。
私は優子に情報を隠す気は無いし、優子もコノ情報を広める気は無
いだらう。
ソレくらいの信頼はある。

「さて、女神^{ゴッテス}。そろそろ帰らせてもらっぞ

「だから、ソレはやめなさいってば

「あー、ねえ優子。女神^{ゴッテス}って、なに？」

今まで蚊帳の外だった工藤が優子に問いかける。
霧島も気になるのか、優子の答えを待っていた。

「コイツの趣味というか、癖なのよ。こつこつ変な……二つ名？
みたいなのを人に付けるの」

「むしろ血筋だ」

「血筋？」

「父が、ちよつとな

何故そんな癖がついたのかは知らんが。
職業がアレだったからだろうか？

ん？ アレは職業と言うのか？

「ちなみにさ、ボクや代表だったらどんな二つ名にする？」

「そうだな。まずお前は エルフ わんぱく小僧」

「あの、ボク女なんだけど……」

流石に抵抗があるのか、困ったような顔で文句を言う。
まあ安心しろ、冗談だ。

「冗談だ。そうだな、エンプレス 女帝、なんてどうだ？」

「女神の次は女帝なのね。理由は？」

「権力を使って男を困らせていそうだ」

私の発言に工藤は顔を引き攣らせ、優子と霧島は顔を見合わせる。
ボソボソと対談したあと、コチラに顔を向け、

「間違っではないわね」

「……むしろ納得」

「ちよっ！ 二人ともっ！？」

効果音があれば、『ガーンッ!』とでもあるだろうか？
それくらい工藤は驚いていた。

「なんで納得するの!？」

「いや、だって……ねえ？」

「……愛子、エロいから」

「うわっ!？ 代表にエロいって言われたっ!？」

トリオで漫才を繰り広げ始めた。
ボンヤリと眺めていると、一通りやり終えて満足したのか、コチラに顔を向けてきた。

「漫才は終わったか？」

「漫才じゃないわよ」

「いや、どう見ても漫才にしか見えんだろっ」

見る。私の発言に、一連のやりとりを見ていた連中が頷いてるぞ。

「う、うるさいわね！ そんなことはどうでもいいのよ…」

「なぜ私が怒られる……」

「ほら、早く代表に二つ名（？）を付けなさい」

「……理不尽だ」

そもそも二つ名（？）を付けられて嬉しいものなのだろうか？

自分で付けていてなんだが、さっぱり理解できん。

まあ、二つ名を付けると言うなら付ける。当人である代表さんも気になるのか、私を見ているようだし。

しかしなんだ。こっ、懐かしい気もするな。二つ名（？）を付けるのは久しぶりだ。

さて、どうするか。

「決まった？」

「リトル・マリア
小さな聖母」

「は？」

三人娘は目を丸くする。ああ、私も自分で驚いた。

「なんで『リトル』なのよ？」

「代表は言うほど小さくないよね」

「いや、私にも解らん。こっ、自然と出てきた」

「……………そう」

間が大きいな、代表さん。

だが、怒っているのでは無いようだ。

むしろ、驚愕と困惑……………希望？ なぜだ？

疑問が浮かぶが、理由がわからない。

ならば考えてもしかたないだろう。

というか、早く帰りたい。

「さて、私はそろそろ帰るぞ。家が恋しい」

「ホームシック？」

「ある意味な。具体的に言つと、ベットが恋しい」

「眠いだけなのね」

「そつだ。というわけで、もう帰るぞ」

じゃあねー、という陽気な声を背に受けながら、私は踵を返し教室を出た。

・
・
・
・
・

ハイ到着。

私のカバンを持った明久と雄二がいた。
どうやら待っていてくれたらしい。

「ようやく来たか」

「遅いよ、漣」

「うるさい。私とて用があったのだ。遅くなったぐらい許せ」

明久から荷物を受け取りつつ、文句に文句を返す。

「瑞希はどうした？」

「姫路は用があるらしくてな。先に行っただぞ」

ふむ。送って行くのかと思っていたのだが。

仕方ないか。
私達は帰りの方向が同じだ。そのため、こつして共に帰ることが多々ある。

「それにしてもさ」

眩くのは明久だ。

「どうした？」

「Dクラスとの勝負って本当に必要だったの？ 別にエアコンくらいなら他の方法でも壊せたと思うけど」

「ああ、そのことが」

なるほど。何もわからないコイツでは不思議な疑問か。

「理由は他にもある。クラスの皆を試召戦争に慣れさせる為だとか
な」

「ふーん。それじゃ、Dクラスの設備を手に入れなかったのは？」

「目的はAクラス。Dクラスに用はない。ここで褒美を与えれば、
一部の人間が満足して戦争に反対する輩が出る可能性も否めない

「そうだったら厄介だからな。不満によるモチベーションを維持する為でもある」

考えてはいるのだよ、色々とな。

安心しろ。戦時での人心掌握は得意分野だ。

「Aクラスに勝てるかな？」

「無論だ。俺達に任せておけ」

「問題ない。戦は私の独壇場だ」

「……ありがとう。僕のわがままの為に」

「気にするな。明久が言わなければ、その台詞は私か雄二の台詞だつただろうからな」

「そうだな。第一、試召戦争は俺がこの学校に来た目的そのものだからな」

「へえ……。澁はなんでこの学校に？」

「私か？ 瑞希がココに来たからに決まっているだろう」

私の答えを聞いて、雄二と明久は黙り込んだ。
何か考えているようだ。

「ねえ、雄二。漣ってさ……」

「いや、それはないな。コイツは興味ないからな、そういうの」

「なんだ。私がどうした？」

「いや、あー……漣ってさ」

明久が悩むように首を傾げ、微妙な顔をする。

雄二も奇妙な顔をしている。

「ありえん」と言いたげな表情と、「いや、もしかしたら」と言い
たげな表情が緋い交ぜだ。

「その……」

「なんだ？ さっきから微妙な顔をしゃがって」

「えーっと……。姫路さんのこと、好きなの？」

「……は？」

思わず足を止める。

眼が丸くなっているかもしれん。

ふむ。予想外の質問だな。

いや、ある意味当然の疑問か……？

「その問いの答えはYESだ」

ただし、

「女としてではなく、娘や妹のような感じでな」

「つまり、恋ではないと?」

「当然」

まあ、瑞希が最優先であることに変わりはないが。
そんな事を考えながら、なんとなくポケットに手を通り込む。
違和感。
あるはずの物が無かった。

「あー。落としたか」

「ん? どうしたの?」

「マガジンを一つ落としたらしい」

「ドジだな、お前」

「雄二、どっちがいい?」

「なにがだ？」

「刻まれるのと磔にされるの」

「すまんっ！ 許してくれ！！」

脅しつて、楽しいよね？

私だけか？ いや、そんなことないはずだ。
皆脅すのつて、大好きだろう？

「そういう訳で、取りに戻るぞ」

「あいよ。俺らは先に帰つとくぞ」

「また明日ね、漣」

・
・
・
・
・
・
・

何処に落したのかわからないため、来た道を辿って行くと、教室に付いてしまった。

どつやらコロに落したらしい。……多分。
無かったら暴れるかもしれん。

シパーンツ!!

思いつき扉を開けると、大きな音がする。

「ひゃあうっ!!」

音に驚いたらしく、声が出た。
声? 誰の?

「瑞希?」

「み、透君!」

そこにいたのは私が姫君と呼ぶ瑞希だった。
驚いた拍子に飛び上がったのか、髪が逆立っている。

「あ、ああのそのえっ!」

「OK、落ち着こうか瑞希。何が言いたいのかわからん」

「は、は」

すー、はー
と言つ呼吸音が聞こえる。
深呼吸をしているようだ。

「落ち着いたか？」

「い、一応は……」

「そうか。で、なぜココに？」

「そ、それはその……」

なぜかモゴモゴと口ごもる。
なにか言いづらいことでもしていたのだろうかね。

「み、透君は何故ココに？」

あ、誤魔化した。まあ、構わんがね。

「マガジンを一つ落したらしくくてな。道を遡っていたら、ココに着いた」

「そうなんですか」

「で、お前は？」

「あ……………うう……………」

余程言いづらいのかねえ。瑞希の視線が泳いでいる。

待っている間やることもないので、とりあえずその視線を追ってみた。

ん？ あれは……………。

瑞希の席に、便箋と封筒が置いてあった。随分と可愛いものだ。瑞希は私の視線に気付いたらしく、突然あわあわし始めた。

「じ、これはですねそのっ」

「??？」

「えっと ふあっ！」

コテン、と卓袱台に躓いて転倒する瑞希。

その拍子に隠そうとした手紙が私の前に飛んできて、その一文をしっかりと目撃した。

《あなたのことが好きです》

the・world

時が止まった。

「……………」

「……………」

空気が凍った。

現在進行形で……………。

「……………」

顔を真っ赤にして俯く瑞希。

あー、どうしたものか……………。

「ん、んー……………おめでとう?」

「ふえ!?!」

私の言葉に敏感に反応し、ビクッ! と体が跳ねる。

いやはや、どうしたものか。

まさか、こんな場面に遭遇とは思わなかった。

とりあえず、何故かポケットに入っていたキャラメルを瑞希の口に突っ込む。

眼を白黒させるが、大人しくキャラメルを舐め始めた。

「ハア……瑞希、これはやはり……」

「あ、はい。……その、ラブレター、です」

「相手は……いや、コレを聞くのは無粋か」

「あ、いえ、……そのう」

普段ならラブレターを渡す相手を見定めるが、彼女自身が決めたのならは文句はない。

しかし、やはりまあ気になるところ。つてなわけで、

「そいつのどんなところが好きなんだ？ やはり外見か？」

「あ、いえ。外見じゃなくて、あつ、もちろん外見も好きですけど
「！」

うらむ。瑞希には春が来たか。

私の春は何時来るのかねえ？

まあ、興味ないのだけれど。

「外見も、ということは内面もか？」

「ええ。いつも冷静で。とても厳しいのに、慰めて欲しいときには優しく。頼りがいもあって。……私の憧れなんです」

やれやれ。

「その手紙」

「は、はい」

本当に純粹で、綺麗な娘だ。

私なんかか隣にいることが、申し訳なくなる程に。

「良い返事がもらえるいいな。応援してる」

そう言って私は、自分の席の近くに落ちていたマガジンを取り、教室を出て行く。

偶然にも瑞希のラブレターを見てしまい、忘れようとは思ったが。あの娘は妹分だ。応援したくもなるものよ。

嬉しそうに笑う彼女に愛されて、相手は幸せなのだろうと思う。瑞希程の美少女だ。まず断られることはなかるう。

そのときは、私はもうお役御免かねえ。

なんとなく、感傷に浸ってしまっ
やれやれ、らしくない。

・
・
・
・
・
・

雄二 side

溜め息が出る。こんなに悩んでいるんだ、溜め息ぐらい許されるだ
ろっぞ。

ベットに身を投げながら俺は今日のことについて考える。
試召戦争のこともそうだが、今回は姫路の相談についてだ。

いや、予想はしていた。態度からして予想するのは難しくなかった
し。むしろ簡単だった。

しかし、まさか『男』としてとは思ってなかった。『兄』や『父』
に対するような好意だとばかり思っていたからな。

まあ、めでたいと言っておこう。羨ましいかと聞かれれば、当然の
様に羨ましいが。
やれやれ、

「やってくれるなあ、相棒」

お前の魅力は老若男女に有効だからな。

まあ、自覚している分だけマシか……。

もっとも、内面の魅力は無自覚のようだが。

好意といえば、今週末も『アイツ』に手伝わされるのだろうか？

……。手伝わされるんだろうなあ。

『ヤツ』が何者なのか、手がかりがあればいいのだが。

あるといえば、『ゴスロリ服（黒）』と『ロングコート（黒）』だけだしな。『ゼロ』って名乗ったが、明らかに偽名だし。

無理だろ、探すの。

や、俺も礼は言いたいから探すかね。

「澪の親父さん、なんか知ってるかもな」

あれだしな、元ヤクザ。

奥さんが元警官つてのはありえないと思う。

結婚のきっかけはバカバカしいと澪が言ってたっけな。

何度か会ったことがあるが、あの桃色空間は凄い。

将来、澪が結婚したらあんな状況が見れるのだろうか？

ククツ、ありえねえーな。

あいつはそんな柄じゃねーし。

ま、それはそれで面白そうだが……。

side out

・
・
・
・
・
・

登校には何も面白い事がなく、すんなりと教室前に到着。

つまらんとは思いますが、何時までも突っ立ってるのもどうかと思う。

面白い事があるように祈りながら、教室の戸を開けた。

ボロい畳と卓袱台。

衛生上に悪い。

早くどうにかせねばならん。瑞希は体が弱いのだし。

「おはよう、雄二」

「おう、澁か」

既に到着していた雄二に挨拶。

卓袱台の上には英語の教科書がある。テスト前の勉強だろう。

私もしょうか。英語はヤバイ。

「おはよう、御門」

「ああ、おはよう、島田」

島田から私に挨拶をしてきた。

少し邪険なオーラがある。機嫌が悪そうだ。

「機嫌悪いな。どうかしたのか？」

「実はね。アンタが待機してる時、吉井が消火器のいたずらをして窓を割って、さらにそれらの件をウチがやったことに仕立てあげたのよ……」

……。

わかっていたことなのだが、アイツはバカだ。マジでバカ。

私としてはどうでもいいのだが、島田の士気が下がっては困る。

何か罰を与えるか……。

考える私の横でグチグチ文句を言う島田に相槌を打ちながら考える。

ふむ……どうしたものか。

……

・
・
・
・

ガラリと開かれる扉。
明久が来たようだ。

「おはよう、明久」

「おう明久。時間ギリギリだな」

「ん、おはよう雄二に遷」

挨拶を終えて、明久が席につきこちらへと体を向けます。

「皆には何も言われなかったの？」

「ん？ 何がだ？」

「Dクラスの設備のこと」

「ああ。皆にも説明した。問題ない」

「ふーん」

素直に言うことを聞いたのは昨日の雄二の働きを評価してのことだろつ。

まだ上が狙える可能性があるならば、Dクラス程度の設備には興味はない、ということだろうか。
つと、コイツに罰を与えねばな。

「それより明久」

「どうしたの？」

「いや、お前はそのままでもいいのかと思ってな」

「え？ なにが？」

顔を見る限り、本当にわからないらしい。
思わず溜め息がでる。

「なんで溜め息なんか」

「吉井っ！」

「しゅぶあつー」

明久の台詞が島田の拳に遮られた。
まあ、その程度なら許容範囲か。

「し、島田さん、おはよう……」

「おはようじゃないわよっ！」

パンチが綺麗に決まった。悶えている明久。

「アンタ、昨日はウチを見捨てただけじゃ飽き足らず、消火器のいたずらと窓を割った件の犯人に仕立て上げたわね……！」

怒るのも当然だろうな。

「おかげで彼女にたくない女子ランキングが上がっちゃったじゃない！」

誰が作ってるんだよ、そんなランキング。

女に見える男ランキングとかありそうで怖いじゃないか。

ちなみにトップは秀吉。次が私。

ここで仲裁に入る。

「まあ、落ち着け島田」

「なによ、ウチはまだ満足してないわよ？」

ナイスサディスティック。
しかし、まあ待て。

「罰なら私が考えてある」

「甘っちょろいもんじゃないでしょうね」

「当然。罪には罰だからな」

そうして、明久に向き直る。

「さて、大丈夫か明久」

「ううん。さつきから鼻血が止まらないんだ」

「そうかい。だが一つ忠告しておこう」

「何？ あまり重要なものじゃなかったら、鼻血が止まってからにしてほしいんだけど」

「いやいや、かなり重要だぞ。お前にとって」

一時間目のテストな。

「監督、船越女史らしいぞ」

それを聞いた瞬間、明久は扉を開けて逃亡を開始した。

「ま、コレでいいだろう」

「ええ。ちよつとスッキリしたわ」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

秀吉 side

ようやく四教科のテストが終わり、ワシは席から立ち、皆が集まりやすい溲の席へ向かう。

「ハア……」

最後が英語だったからじゃろう、漣が顔を顰めて溜め息をついた。明久は机に伏せている。船越先生とひと悶着あったらしい。ワシにはどうも自業自得だと思っただけじゃが。

「疲れたのう」

「……………（コクコク）」

「同感だ。英語はどうも……ハア」

すぐ傍にいるムツツリーニの頷きとワシの言葉で、漣が愚痴る。しかし、奇妙なものじゃな。他は完璧じゃというのに、英語だけダメじゃなんて。

「よし、昼飯食いに行くぞ！ 今日にはラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな」

勢いよく立ちあがる雄二からは全然疲れを感じさせぬ。テストの後だというのにどういふ体の構造をしておるんじゃ。昼食のメニューも含めて。

「全部高カロリー。しかもメインの物ばかりじゃないか」

そんな雄二の昼食のメニューに突っ込むのは漣。
毎日カロ ーメイトだけのお主が言うセリフかのう。
アレはアレで問題があると思うのじゃが……。

「ん？ 吉井達は食堂に行くの？ だったら一緒にいい？」

「ああ、島田か。別に構わないぞ」

「それじゃ、混ぜてもらおうね」

「……………（コクコク）」

ムツリニ、お主は島田に下心を抱いておるのじゃろう。
そこまで己の心情を貫くを逆に清々しく思えるのう。
姫路にやったら、漣に潰されるのがオチじゃろうが。

「吉井、なんかウチの悪口考えてない？」

「滅相もございません」

明久も全く。

まあ、とりあえずは昼食じゃ。今日は何を食べようかの。

「じゃ、僕も今日は贅沢にソルトウォーターあたりを」

「明久。一体そのどこが贅沢なのじゃ……」

「明久。お前は泥水で十分だろう？」

「うわ、溲ひどっ！ さすがにそれはないでしょう!？」

溲が明久を虐めておる。珍しいのう。

明久が文句を言っている間に、溲はカバンから弁当箱を取り出した。

「溲。まさかと思うのじゃが、その中身は全てカローメイトか？」

「お前は、私をカローメイト信者かなにかだと思っているのか？
普通に弁当だ」

ワシの問いに、ジト目で答える。

その言葉に、ムツッリーニの眼が輝いた気がした。

「……溲の、弁当（ジュルリ）」

唾液を啜るのもわかる気がするのう。

溲の作る料理は美味じゃから。

期待の眼差しに気が付いたのか、溲は苦笑する。

「安心しろ、分けてやる」

「それはありがたい」

「……感謝」

さて、食堂に行くとするか。

「あ、あの。皆さん……」

全員が立ち上がり、食堂に行こうとしたところで声をかけられる。

「うん？ あ、姫路さん。一緒に学食に行く？」

「あ、いえ。え、えっと……、お、お昼なんですけど、その、昨日の約束の……」

姫路はもじもじしながらワシらの方を見てくる。

そう言えば、昨日姫路にお弁当を作ってもらった約束があったような。

「おお、もしかお弁当かの？」

「は、はいっ。迷惑じゃなかったらどうぞっ」

と、身体の後ろに隠しておったバッグを出してきた。

「迷惑なもんか！ ね、雄二！」

「ああ。ありがたい」

「そうですか？ 良かったあ〜」

嬉しそうに笑う姫路。皆に御馳走するのが嬉しいのじゃろっな。

「むー……っ。瑞希って、意外と積極的なのね……」

むくれて睨むのは島田。何が気に入らないんじやろっか、ワシにはわからぬ。

澁ならわかるかもしれんが……。
ん？

「澁？ 大丈夫か？ 顔が青ざめておるぞ」

「……顔面蒼白」

しかも、こころなしに震えているような気もするが。
む、なにかブツブツ呟いておる。

「ああそうだった何故私はこんな命に関わるような重大な問題を忘れていたのだそうかあれかイヤなことは記憶から消し去る本能のせいかまあ今更どうしようもないがイヤしかし瑞希の厚意を無碍にするわけにはいかんしどうしようかヤバイヤバイヤバイヤバイッ！」

「み、溲？ なにをそんなに怯えておるのじゃ？」

「……余程重大な問題」

あの溲がココまで怯えるなど。尋常ではない問題なのじゃろつな。

「秀吉、康太」

いや、救いを求めるような眼で見られても困るのじゃが。

「後で、説明する」

ガタガタ震えながら言われても……。
そんなやりとりをしている間に、屋上へ移動する事が決まったらしい。

「お前らは先に行つててくれ」

「ん？ 雄二はどこか行くの？」

「飲み物でも買つてくる。昨日頑張つてくれた礼も兼ねてな」

「あ、それならウチも行く！ 一人じゃ持ち切れないでしょ？」

「悪いな。それじゃ頼む」

「おっけ！」

ふむ、明久なら警戒心しか出さんのじゃろつな。確信できる。

「きちんと俺達の分をとっておけよ」

「大丈夫だつてば。あまり遅いとわからないけどね」

「そう遅くはないはずだ。じゃ、行つてくる」

雄二と島田が財布を持って出て行った。

一階の売店に行つたんじゃろつ。

「僕らも行こうか」

「そうですね」

明久が姫路のバッグを受け取ると、全員で屋上まで歩いて行った。相変わらずカタカタと震える澗の隣を歩く。

「澗、お主一体どうしたのじゃ？　らしくないぞ」

「ああ、秀吉」

恐ろしく弱りきっておるの。とりあえず、話題を作るか。

「しかし、澗が弁当を作ってくるとはもう。珍しいこともあるものじゃ」

「まあ、瑞希が作ってくるのだからな。私が作らないわけにはいきまい」

なるほど。澗ならばそれだけで十分な理由になる。しかし、なんとというか。

「おもしろくないのう」

「ん？　なんか言ったか？」

「いや、何も言っておらんぞ」

さて、もうすぐ屋上じゃ。

屋上に出ると、澄み渡るような青空があった。

「天気が良くてなによりじゃ」

「そうですね！」

「今日は風も気持ちいいからな」

青い顔のまま気丈にフェンスの方まで行った溲がいつもと変わらぬ調子で言う。

「あ、シートもあるんですよ」

そう言い、姫路がバッグからビニールシートを取り出してきて、皆で準備を始める。

うむ、準備も万端じゃな。

幸い屋上には他に人がいなくてワシらの貸し切り状態じゃった。ビニールシートの上に足を投げ出す。

「あの、あんまり自信はないんですけど……」

姫路が重箱の蓋を取る。

『おおっ！』

ワシらは一斉に歓声をあげた。漣以外は。

漣ならば一番に歓声をあげそうなものじゃがな。

姫路の料理じゃし。

……。

自分で考えておいてなんじゃが、やはりおもしろくないのう。

いや、今はどうでもいいことじゃが。

美味しそうじゃのう。

から揚げやエビフライにおにぎりやアスパラ巻きなど、定番のメニューが重箱の中に詰まっておった。

「それじゃ、雄二には悪いけど、先に」

「……………(トヨイ)」

「あっ、ずる」

「っ！ よせ、康太っ！」

動きの素早いムツツリーニがエビフライをつまみ取りおった。
その動きを見て漣が声を張り上げる。

しかし、ムツツリーニは流れるように口に運び

「……………（パク）」

ボタン　ガタガタガタガタ

豪快に顔面から倒れ、小刻みに震えだした。

「……………」

「……………」

「……………」

沈黙が続く。

ワシと明久は顔面蒼白な漣の顔を見る。

「わわっ、土屋君」

姫路が途端に慌てて、配ろつとしていた割り箸を取り落とす。

「……………（ムクリ）」

ムツリーニは起き上がり、

「……………（グッ）」

そして、姫路に向け親指を立てる。

『美味しいぞ』と伝えたいのじやろうと思う。

「あ、お口に合いましたか？ 良かったですっ」

ムツリーニが言いたいことが伝わったのか、姫路が喜ぶ。

しかしムツリーニ。なぜ足が未だにガクガクしておるのかワシらに教えて欲しい。

それほどまで美味しくて歓喜しておるのか、それとも

「良かったらどんどん食べてくださいね」

姫路が笑顔で勧めてくる。

お弁当を勧めてくれるのは素直に嬉しいのじゃが、ワシにはどうも目を虚ろにして身体を震わせるムツツリーニが忘れられぬ。恐ろしく不安な予感がするのじゃが……。

(……秀吉。あれ、どう思っ?)

明久が姫路には聞こえないくらい小さな声でワシに聞いてきた。

(……どう考えても演技には見えん)

それは、ワシの目から見た感想。

アレが演技ならば、ムツツリーニは役者として活躍して、しかも生
活していける。

そこで澁に眼を向ける。

(スマン。あれが瑞希の料理だ……っ！)

うつすらとじゃが、冷や汗が見えておる。

(明久、澁。お主らは体は頑丈か?)

(正直胃袋には自信がないよ。食事の回数が少なすぎて退化してる
から)

(冗談じゃない。私の父ですら二日間寝込んだのだぞっ！ 私が耐えられるわけがない)

ワシらの表情は笑顔のままじゃ。下手に姫路を不安がらせる訳にもいかん。

姫路が泣いたりすれば、即地獄行きじゃしろう。漣の手によって。

あの父上殿でもか耐えられなかったのか。しかし、食わないわけにもいかんしろう。

(ならば、ここはワシに任せてもらおう)

ありったけの勇気を振り絞って、囁く。

(そんな、危ないよ！)

(よせ秀吉！ お前では無理だ！)

(大丈夫じゃ。ワシは存外頑丈な胃袋をしていてな。ジャガイモの芽程度なら食ってもびくともせんのだ)

因みにジャガイモの芽は毒じゃ。

皆は食べてはいかんぞ

コホンツ。電波が入ったらしい。

気を取り直して覚悟を決めたとき、

「おう、待たせたな！　へー、こりゃ旨そうじゃないか。どれどれ」

雄二が現れた。

「あつ、雄二」

と、明久が止める間もなく素手で卵焼きを口に放り込み、

パク　バタン　ガシャガシャン、ガタガタガタガタ

ジュースの缶をぶちまけて倒れた。

「さ、坂本！？　どうしたの！？」

遅れてやってきた島田が雄二に駆け寄る。

コイツは、本物じゃ……っ！！

倒れたまま激しく震える雄二を見る。

すると、雄二は倒れたまま明久の方をじっと見て、アイコンタクトを始めた。

お前、盛ったな？

盛ってないよ。……僕は。

漣、お前か？

スマン。コレが瑞希の料理だ。

こういう時はすごく便利じゃな、アイコンタクト。

「あ、足が……攣ってな……」

姫路を傷つけまいとウソをつく雄二。かなり顔が真っ青じゃったが。

「あはは、ダッシュで階段の昇り降りしたからじゃないかな」

「うむ、そうじゃな」

「そうなの？ 坂本ってこれ以上ないくらい鍛えられていると思うけど」

「最近身体を動かしてないんじゃないか？ ランニングでもしておくといい」

事情のわかっておらぬ島田が不思議そうな顔をする。

「ところで島田さん。その手のついてるあたりさ」

明久がビニールシートに腰を下ろしておる島田の手を指差す。

「ん？ 何？」

「さっきまで虫の死骸があったよ」

「ええっ！？ 早く言ってよ！」

慌てて手をよける島田。

「ごめんごめん。とにかく手を洗ってきた方がよいよ」

「そうね。ちょっと行ってくる」

席を立つ島田。なるほど下手なことを言われぬよう退場させたわけじゃな。

「島田はなかなか食事にありつけずにおるのう」

「虫の死骸とは、何と不運な」

「全くだね」

はっはっは、と男四人で朗らかに笑う。
その裏では必死のやりとりがあった。

（明久、今度はお前がいけ！）

（む、無理だよ！ 僕だったらきつと死んじゃう！ 漣は？）

（無茶を言うな。秀吉、お前はどうか？）

（流石にワシもさっきの姿を見ては決心が鈍る）

（漣がいけ！ 姫路は漣に食べてもらいたいはずだ）

（そうじゃのう。確かにそう見えるし）

（私を贄にするつもりか！？ 明久、やれ！）

(了解!!)

「あつ！ 姫路さん、アレは何!?」

「えっ？ なんですか？」

突然明久が明後日の方向を指差し、それを姫路が見る。

(おらあつ!!)

(もごああつ!?)

その際に明久が雄二の口の中一杯に弁当を押し込んだ。
そのまま目を白黒させておる雄二の顎を溲が掴み、強制的に咀嚼させている。

溲……。唇が歪んで顔が愉悦に染まっておるぞ。

「ふう、これでよし」

「任務完了。犠牲者は最小限に抑えられた」

ふう、と汗を拭う仕草をする二人。

「……お主ら、鬼畜じゃな」

そんな二人に戦慄する。

まだ倒れておる雄二の震えがさらに酷くなってきておった。

「何かの見間違えだろう。鳥でも見たのではないか？」

「そうかも。ごめんね、姫路さん」

「あ、そうだったんですか」

「お弁当美味しかったよ。」ご馳走様

「ああ。美味だった」

「うむ、大変良い腕じゃ」

雄二の大活躍により料理は無事始末を完了。ダークマター

ワシらの気持ちはこの青空のように晴れやかじゃった。

うむ。清々しい。

「あ、早いですね。もう食べちゃったんですか？」

「うん。雄二なんか『美味しい美味しい』って凄い勢いで食べてた

」が

視界の隅で倒れておる雄二がフルフルと力なく首を振る。
なかなかヤラしているようじゃな。

「そうですかー。嬉しいですっ」

「いやいや、こちらこそありがとう。ね、雄二？」

明久が倒れておる雄二に問いかける。
その隅では、姫路にバレないように澪が刃物を雄二に押し付けていた。

「う……う……。あ、ありがとうな、姫路……」

ヤバイ。雄二の目が虚ろじゃ。

というか澪。姫路の事になると容赦ないな。

「そういえば、美味しいと言えば駅前に新しい喫茶店が」

上手いぞ、明久。

ここで『それじゃ、また作ってきますね』なんて言われたら
危険すぎるっ！！

「ああ、あの店じゃな。確かに評判が良いな」

「ケーキが美味いと聞いたな。私はショートケーキが好みだが」

「え？ そんなお店があるんですか？」

「ああ。今度皆で行こうか。代金は明久持ちで」

「い、いや。雄二がおごってくれるってさ」

「てめ、勝手なこと言うなっの」

ようやく平和が訪れた。

「あ、そうでした」

姫路がポン、と手を打った。

「ん？ どうしたの？」

「実はですね」

「ごそごそ、と靴を探る。」

「デザートもあるんです」

ワシ、泣いてもいいじゃろうか？

遷はさらに血の気が引く。

(覚悟しておけお前等。瑞希の料理は、オードブル前菜やメインディッシュ主食よりデザートの方が凶悪だ……)

((何っ! ?))

あのカオスな状況を作り出す物よりも凶悪なのか! ?
さ、さすがにヤバイすぎじゃろう……。
恐るべし、姫路の料理っ!!

「ああっ! 姫路さんアレはなんだ! ?」

「明久! 次は俺でもきつと死ぬ!」

雄二が命がけて明久の作戦を止めにかかる。

(明久、俺を殺す気か)

(仕方がないんだよ！　こんな任務は雄二にしかできない！　ここは任せたぜっ)

(馬鹿を言うな！　そんな少年漫画みたいな笑顔で言われてもできんもんはできん！)

(この意気地なしっ！)

(そこまで言うならお前にやらせてやる！)

(なっ！　その構えは何！？　僕をどうする気！？)

(拳をキサマの鳩尾に打ち込んで後で存分に詰め込んでくれる！　歯を食いしばれ！)

(いやあー！　殺人鬼　！)

ここまでのおうじやな……。
よし、覚悟を決めよう。

(……ワシがいこう)

(秀吉！？　無茶だよ、死んじやうよ！)

(俺のことは率先して犠牲にしたよな！？)

(大丈夫じゃ。ワシの胃袋はかなりの強度誇る。せいぜい消化不良程度じゃろっ)

「どうかしましたか？」

「あ、いや！ なんでもない！」

「あ、もしかして……」

マズイ！ もしや、バレたか！？

このまま『姫路が泣く 遷による断罪』パターンか！？

「ごめんなさいっ。スプーンを教室に忘れちゃいましたっ。取ってきますね」

そう言い残し、階下へと消えてった姫路。

「焦ったな」

「ああ。で、どうする」

「うむ。ワシが」

「いや、待て」

ワシの決死の覚悟を遮るのは漣じゃった。

「秀吉に危険な任務を任せるわけにはいかん」

「でも、だったら誰が……」

「当然」

沈黙。

ゴクリと喉を鳴らしたのは誰じゃろうか？

そして澁の答えは。

「私だ」

「あ、おい澁！」

雄二の制止の声を聴かず、デザートを取り上げて一気に口に入れた。そして、

ドサリ

「澁っ！？」

その顔は真っ青で、身体はガタガタと震えおる。

その後、急に目をクワツと見開き、カフツと息を吐いてガクリと崩れ落ちた。

「……………」

「……………」

「……………」

勇敢な戦士が散っていった瞬間だった。

ワシらは気絶した溼を見て、姫路に料理を頼むのは止めようと思っ
た。

s i d e o u t

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

私の父すら気絶に追い込んだ強烈な食物兵器を食して倒れた私は、髪を撫でられる感触で眼を覚ました。

どうやら、瑞希に膝枕をされているらしい。

柔らかな太股と滑らかな手の感触が心地いい。

しかし、あんなにレベルの高い兵器だとは思わなかった。

父が二日も寝込むのがわかる。

デザート マジ ヤバイ。

瑞希に礼を言い、体を起こして周りを見る。皆してのんびりお茶を啜っていやがった。

刻むぞ貴様等。

「おお、起きたか。まさかあんなところで貧血を起こすとはのう）感謝するぞ、溇（

「いや、良かった。ここで溇が抜けたらヤバイからな（後でなにか奢ろう）」

「少しヒヤヒヤしたね（溇、お疲れ様）」

「……お茶（……貧血で倒れたことになっている）」

なるほどな。

「心配かけたな（今度飲み物でも頼む）」

「そういえば坂本、次の目標だけど」

「ん？ 試召戦争のか？」

「うん」

康太からお茶を大量にもらって飲み干す。
少しでも誤魔化したいのだ、うん。

「相手はBクラスなの？」

「ああ。そつだ」

「どうしてBクラスなの？ 目標はAクラスなんでしょう？」

もつともな疑問。

目標はAクラス。なぜ通過点に過ぎないBクラスを相手にするのか。
理由がわからないのだろう。

「正直に言おう」

雄二が真剣な表情を浮かべる。

「どんな作戦でも、ウチの戦力じゃAクラスには勝てやしない」

シミュレーションしたのだ。何度も何度も。だというのに。
どう考えても無理だった。

いくら作戦を変えても、ポジションを変えても。

まあ仕方が無い。

ココはAからFの六クラスが成り立つ。

そして、FとAでは格が違いすぎたのだ。

特にあの代表。

霧島翔子

彼女の能力は恐ろしく厄介だった。

奇襲であろうとFクラスで彼女一人を取り囲んだ多対一であろうと。
ことごとく弾き返される。

「それじゃ、ウチらの最終目標はBクラスに変更ってこと？」

「いや、そんなことはない。Aクラスをやる」

「雄二、さっきと言っていることが違うじゃないか」

明久が台詞を遮るように間に入る。

「クラス単位では無理だ。どんな作戦も兵の質でAクラスが勝る」

「間違いないの、それ？」

「ああ、溇のお墨付きだぜ、「コレ」

「そんなお墨付きは勘弁してほしいものじゃな」

秀吉が首を振る。

こういう状況での私のお墨付きがどれだけ信用できるか、わかっているのだ。

「だがな、明久。クラスでだめなら、一騎打ちならどうだ？」

「一騎討ちに？ どうやって？」

「Bクラスを使う」

その問いに、私が答える。

「試召戦争で下位クラスが負けた場合の設備はどうなるか知っているな？」

「え？ も、もちろん！」

明久……知らんのだな。

(吉井君、下位クラスは負けたら設備のランクを一つ落とされるんですよ)

「設備のランクが落とされるんだよ」

「……まあ、いいだろう。つまりだ、BならCの設備に落とれる」

「そうだね。常識だね」

「ならば、上位クラスが負けた場合は？」

「悔しい」

「雄二、私のカバンに入ってる物を出してくれ」

「ああ、コレだな。うおっ！ これ実銃!？」

「ちよっ！ ダメ、それは死ぬから!！」

悔しいってなんだよ。

間違っではないだろうか。

「相手クラスと設備が入れ替えられちゃうんですよ」

「正解だ、瑞希」

「つまり、うちに負けたクラスは最低の設備と入れ替えられるわけだね」

「ようやく理解したか馬鹿者」

「で、だ。俺達はそのシステムを利用して、交渉する」

「交渉、ですか？」

「Bクラスをやったら、設備を入れ替えない代わりにAクラスへと攻め込むよう交渉する。設備を入れ替えたらFクラスだが、Aクラスに負けるだけならCクラス設備で済むからな。まずうまくいくだろう」

「ふんふん。それで？」

「それをネタにAクラスと交渉する。『Bクラスとの勝負直後に攻め込むぞ』といった具合にな」

「なるほどねー」

Aクラスといえど学年で二番手のクラスと戦った後に休む暇もなく戦争。

これはきつい。

なにより精神的に。

Fクラスも連戦になるが、幸いコチラには原動力がある。

だが、Aクラスはそうではないはずだ。
勝ってもメリットはない。Fクラス相手に時間を潰されるのも気に
食わないだろう。
要はモチベーションの差だ。

「じゃが、それでも問題はあろう。体力としては辛いし面倒
じゃが、Aクラスとしては一騎打ちよりも試召戦争の方が確実であ
るのは確かじゃからな。それに」

「それに？」

「そもそも一騎打ちで勝てるのじゃろうか？ こちらには姫路と漣
がいるということは既に知られているのじゃろう？」

FがDに勝ったとなると、勝ち方に注目が集まるものだ。

瑞希と私の存在はもはや周知の事実。

となると、私と瑞希への対策が練られているはずだ。

私には英語一本で絞れば、問題ないだろうしな。

「そのへんに関しては考えがある。心配するな」

皆の不安とは対照的に自信満々な雄二。

「とにかくBクラスをやるぞ。細かいことはその後で教えてやる」

「ふーん。ま、考えがあるならいいけど」

「で、明久」

「ん？」

「今日のテストが終わったら、Bクラスに行つて宣戦布告をして来い」

「断る。雄二が行けばいいじゃないか」

明久は宣戦布告を拒否する。

あんな痛い目にあつたから行きたくはないだろうな。普通に考えて。

「やれやれ。それならジャンケンで決めないか」

「ジャンケン？ ……OK。乗った」

「よし。負けた方が行く、で良いな？」

明久は雄二からの提案に乗り、頷く。

「ただのジャンケンでもつまらないし、心理戦ありでいい」

雄二からの提案。

「わかった。それなら、僕はグーを出すよ」

ジャンケンの構えを取りながら雄二に告げる明久。

「そうか。それなら俺は」

さて、雄二はどうするのか。

「お前がグーを出さなかったらブチ殺す」

理不尽すぎる要求だった。
悪魔がいるぜ。

「行くぞ、ジャンケン」

「わあぁっ!」

パー（雄二） グー（明久）

「決まりだ。行って来い」

「絶対に嫌だ！」

負けた明久がぐずる。
すると雄二から追撃が入った。

「明久、Dクラスの時みたいに殴られるのを心配しているのか？」

「それもある！」

「それなら今度こそ大丈夫だ。賭けてもいい」

私も賭けよう。

殴られる、に1000円。

「Bクラスには美少年好きが多いらしい」

「そっか。それなら確かに大丈夫だねっ」

アホがいる。

悪魔の隣にアホがいる。

「でも、お前不細工だしな……」

雄二が溜息混じりに呟いた。

「失礼な！ 365度どこからどう見ても美少年じゃないか！」

「5度多いぞ」

「実質5度じゃな」

「ドンマイ、美少年（笑）」

「三人なんて嫌いだっ」

一年間の日数と間違えるなんて。
小学生でもそんな間違い方しないと思うのだが。

「あ、でもさ。だったら遷が行けばいいじゃん」

「明久、お前なあ」

バカバカしい提案に溜め息が出た。

「え？　なんで溜め息つかれるの？」

「当然だ、馬鹿者」

頭を振りながら、膝立ちで秀吉の隣に移動した。
そして、秀吉の肩に顎を乗せて問う。

「どうだ、明久。コレでも私に行けと言うのか？」

「うん、ゴメン。僕が間違ってた」

私と秀吉は異分子なのだ。

片や、男にも女にも見える、外見では性別判断不能の男。
片や、美少女に見える男。

異分子過ぎる。

「そういつわけで、お前が行け」

「うん、わかった」

「頼んだぞー」

昼食はお開きになった。

秀吉が顔を赤くして硬直していたのが気になったが。

あ、私の弁当は瑞希と島田と秀吉が食べたらしい。

口直しさせて欲しかった。

・
・
・
・
・
・

「……言い訳を聞こうか」

あー、午後のテストも終了して、放課後。

明久はBクラス生徒の暴行で干切れかけた袖を手で押さえながら雄二に詰め寄っている。

「予想通りだ」

「くきいー！ 殺す！ 殺し切るーっ！」

「落ち着け」

「ぐふあっ!」

雄二が明久の鳩尾に一発与えて黙らせます。
今のは痛いな、うん。いいところ入った。

「先に帰ってるぞ。明日も午前中はテストなんだから、あんまり寝てるんじゃないぞ」

「やれやれ。行くぞ、明久」

「うう……。ありがとう、漣」

さすがにそのままにしておくのもどうかと思い、明久の荷物を持って本人を担ぎ上げる。

ん？

瑞希がまだ教室に残っている。

彼女は鞆を抱え込んでキョロキョロとあたりを見回しているのだが、かなり挙動不審だ。

何かを警戒している小動物のようだな。

……ああ、そういえば昨日手紙を書いていた。それをどこに置くか迷っているのかもしれない。

がんばれよ、プリンセス姫君。

彼女の邪魔にならないように、足早に教室を去る事にした。

ん？

ということは、瑞希の好きな男は（頭が）Fクラスなのか？

こ、これは……。

瑞希おじいの父親が不満を持たなければいいが……。

い、いや。うん。

で、出来る限りは援護射撃するからな、瑞希。

うん。出来る限り……。

試召戦争編 第五問（後書き）

恋愛的な要素ですが、とりあえずハーレム方向で決定。

確定したメンバーは

- ・ 姫路さん
 - ・ 木下姉弟
 - ・ 玲さん
- の四名。

悩んでいるのは、

- ・ 霧島さん
 - ・ 工藤さん
- のお二人

まあどちらでも対応できるように、無理矢理伏線ねじ込んだんですが……。

明久君は美波さんとくっついてもらおうし。
雄二君は独り身にするかどうか悩みます。

試召戦争編 第六問（前書き）

最近は寒くなりました。

朝は布団に包まって朝食を食べてます。

早く炬燵が欲しいです。

あんまりオリジナル性を出せないのが不満です。

とは言っても、僕の実力だと弄ったら大変なことになりますし、弄りすぎて後のストーリーと繋がらなくなるのが怖いです。

試召戦争編 第六問

さて、今日から、と言うか今から『対Bクラス戦』が始まるわけだが。

その前に、よくあるリーダーからの激励というか演説というか。

まあそんなものをやっている。

壇上に立つのはもちろん雄二。

そして、その隣に何故か私。

……。

もう完全に副代表だな、これ。

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

つとまあ、こんな感じで。

あとは、「殺^ヤる気は充分か？」だとか「負けるわけにはいかない」とか。

ありきたりな、しかし確実に士気を上昇させる言の葉を紡ぐ。

「前線部隊は姫路瑞希に指揮を取ってもらおう。御門漣はその補佐だ。野郎共、きつちり死んで来い！」

「か、頑張ります」

「お前達の活躍に期待させてもらおう」

男のノリについていけないらしい瑞希は若干引いているが。士気は十二分。いまのところ、不安要素はない。

今回の戦争は廊下で行う。

ここで負けてしまうと話にならないため、Fクラス50人中40人を戦力として注ぎ込む。

さらに上乗せで私と瑞希という兵器を搭載。

瑞希は校内3位の成績を持つ優等生であり、私も伊達に『戦神』なんて呼ばれていない。

しかし、心配事もある。

Bクラスの代表は根元 恭二。所謂『卑怯な野郎』だ。

どんな手を使ってくるか、わかったもんじゃない。

充分に警戒しておくべきだろう。

キーンコーンカーンコーン

根元について考えているとチャイムが鳴る。

それはつまり、

「よし、行って来い！ 目指すはシステムデスクだ！」

『サー、イエッサー』

戦闘開始の銅鑼でもあるわけだ。

今回の作戦では勢いが重要視される。

事前に説明してあるので、全員がほぼ全力で廊下を駆け出してくれた。

ただ、身体能力的に劣る瑞希は少し遅れているので私はそれに付き添う。

「いたぞ、Bクラスだ！」

「高橋先生を連れているぞ！」

どうやら戦闘が始まったようだ。

「生かして帰すな！」と、何とも物騒な台詞とともにBクラス戦闘始。

『Bクラス 野中長男 VS Fクラス 近藤吉宗

総合 1943点 VS 764点

』

どれだけの実力差があるのか、遠目で見ただけでも理解できる。正しく桁が違う。

圧倒的戦力差で第一陣がことごとく粉碎されている。危険な状態になる前に、なんとか瑞希が追い付くことができた。

「すまん、遅れた！」

息を切らせている瑞希の背中を撫でながら味方に到着を知らせる。今更だが、抱えて走った方が速かったな。いや、その方法はもう行すべきではないか。

なんせ瑞希には、好きな人がいるのだからな。

密着するのは避けた方がよからう。

つと、こんな思考はどうでもいい。問題は眼の前の敵軍だな。

「おい、『阿吽の夫婦』が来たぞ！」

「誰が夫婦だゴラァー!!」

「グハアツ！」

はっ、思わず瞬殺してしまった。しかし仕方が無いことだと思っ。今までは特に気にしなかったが、今は状況が違うのだ。

瑞希の想い人に、『夫婦』なんて呼ばれているのを聞かれたら。その場合、告白がうまくいかないかもしれんのだ。

よって、私のしたことは正しいこと。異論は認めない。

ちなみに『阿吽の夫婦』、『阿吽の呼吸の夫婦』の略称らしい。どうでもいいかそうか。

とにかく、私と瑞希の登場でBクラスの目つきが変わった。やはり私達を警戒しているのだろう。

「漣、姫路さん。来たばかりで悪いんだけど……」

「は、はい。行って、きます」

「ああ、任せる」

明久の頼みに頷き、敵軍に近づく。
さっそく、女生徒が飛び出して瑞希に勝負を仕掛けた。

「長谷川先生、Bクラス岩下律子です。Fクラス姫路瑞希さんに数学勝負を申し込めます！」

「あ、長谷川先生。姫路瑞希です。よろしくお願いします」

「律子、私も手伝う！」

さらに1人追加で瑞希の相手が増える。

苦戦するようならば援護に出なければならんが。
どうだろうか……。

「「「^{サモン}試獣召喚！！」」

3人の声が重なる。

魔方陣が展開し、おなじみに試験召喚獣が姿を現した。
瑞希の召喚獣を目撃した瞬間。

私は瑞希の援護をするという選択肢を

破棄した。

代わりに今にも殺^{ヤラ}されそうな仲間を援護する。

とりあえず、瑞希が集中できる状況を創りあげることにしたのだ。

「あれ？ 姫路さんの召喚獣ってアクセサリーなんてしてるんだね？」

なんていう明久の疑問が聞こえた。

まあ、なんだ。私が瑞希の援護をしなかった理由はコレだ。
召喚獣の腕輪。アクセサリー
それはつまり、

特殊能力を持っていることを意味する。

「じゃ、いきますね」

「ちょっと待ってよ！」

「律子！ とにかく避けないと！」

キュボツ！

瑞希の召喚獣の腕輪から光がほとばしり、相手の1体を火だるまにした。

『 Fクラス 姫路瑞希 VS Bクラス 岩下律子&菊入真由美
数学 412点 VS 189点&151点
』

召喚獣の腕輪というのは、一定の得点を超えた者の召喚獣に装備される。

瑞希にもあれば、当然。

私にもあるワケだよ、諸君。

「長谷川教諭。Fクラス御門漣、姫路瑞希と同時進行でBクラス敵に数学勝負を申し込みます」

残党といっても、捕らえられなかった人数の方が多い。相手は3人。瑞希より1人多いが、問題ない。

『Fクラス 御門漣 VS Bクラス 3名
数学 547点 VS 122点&143点&117点』

さて、点差は充分。

焦る事はない。

私は、だがな。

「な、コイツも腕輪があるぞっ！」

「なんだと!？」

「クツ、勝てねえ……」

馬鹿な奴等だ。

勝敗を決めるのは点数トクではないことを、コイツ等は理解していないらしい。

点数が高ければ有利なことは違いないが。

「さて、瑞希が能力を披露したのだし。私も一つ、お見せしようか」

シンクロ
一心同体 スタートアップ
始動

視点が、正確には左眼の視点が低くなる。

私ではない、なにか別の者に『私』が入り込む感覚。

そしてその別の者が、『私』が入り込んだことを喜んでいる感覚。

そう、私は。

私の召喚獣、通称ジャックと同化したのだ。

とは言っても、精神だけだが。

この能力のおかげで、ジャックの感覚をダイレクトに理解できる。

つまり、より精密な操作が行えるわけだ。

「欠点は、感覚がダイレクトに伝わるが故に痛みもフィードバックしてくるところだがね」

しかも明久より酷い。

ポツリと呟くように情報を漏らしながら、『私ジャック』の体を動かす。

狙いは首。丁度良く、というか。馬鹿なことに一直線に並んでいるため、一気に片付けることにした。

刀に手を掛け、一閃。

振り上げられた武器を弾く。

そしてもう一閃。

3つの首が、ゴトリと落ちた。

こう表現すると、なんか殺人を犯してるみたいだな……。

そんな前科は持ってません。

「な、3人が一瞬で……」

「しかも的確に急所を突いてるぞ、あいつ!」

危険な表現について少々悩んでいると、3人が驚愕の声を挙げた。

「い、岩下と菊入が戦死したぞ!」

「こっちは3人が瞬殺だ!」

「なっ! そんな馬鹿な!」

「御門漣と姫路瑞希、噂以上に危険な相手だ!」

私と瑞希の實力に怯えるBクラス。

ちなみに、瑞希の戦闘と私の戦闘にはほとんどタイムラグはない。描写ではわかりにくいので、一応。

コレってメタ発言？

メタ発言って言うてる時点でメタ発言とか、聴こえない聴こえない。

「瑞希、一旦退くぞ」

「あ、はい。皆さん、頑張ってください！」

およそ指揮官らしくない指示。

しかし、瑞希のような美少女であるが故に効果は絶大だ。

「やったるでえーっ！」

「姫路さんサイコーッ！」

「御門の強さに惚れたっ！」

「兄貴と呼ばせてくださいっ！」

「いやむしろ姐御と呼ばせてっ！」

信者急増中。

瑞希どころか私の信者まで。

まあ兄貴だろうが姐御だろうが、好きに呼ぶといい。

私は男にも女にも見えるこの容姿にコンプレックスは持っていない。

父と母から授かったこの肉体。嫌になるはずもない。

だから、姐御と呼ばれても。

というか、女扱いされても別に気にならないわけである。

まあ昔は着せ替え人形になるのだけは嫌だったが……。

昔は、な。昔は。

男としての尊厳はどこへ行ったのだろうか？

もとからないのかそうかむかしはいやだったんだけどないまはまったくいていこうがないんだぜふえっふえっふえ。

「中堅部隊と入れ替わりながら後退！ 戦死だけはするな！」

っというBクラスの叫びで正気に戻った。

ありがとう、何処の誰とも知れない人よ。

思わずダークサイドに墮ちるところだった。

「明久、ワシらは教室に戻るぞ」

「ん？ なんで？」

Bクラスの誰かに感謝していると、秀吉の声が聞こえた。

教室に戻る、か。ふむ。

警戒しているのか？

「Bクラスの代表じゃが……」

「うん」

「あの根元らしい」

やはり警戒しているようだ。当たり前か。

なんせアノ男、目的の為なら手段は選ばない、と評判が悪い。

『喧嘩に刃物は基本装備』だとか『球技大会で相手チームに一服盛った』だとか。

真偽はわからんが、警戒しておくのが当然。つというわけで。

「とつとと行け、2人とも」

「わかった。漣はどうするの？」

「瑞希はこの部隊の指揮官。そして私はその補佐だ。抜けるわけにはいかんだろう」

「まあ、当然じゃな。漣、ここは任せてよいかの？」

「無論、任せておけ」

何人かを連れてFクラスの教室を目指す2人。

その背中を見送り、Bクラスに眼を向ける。

瑞希に指揮を任せて、私は大暴れすることに集中した。

.....

・
・
・
・

「……ここはどこ？」

つと云うのは明久だ。私ではない。

あの後、一応任務も終了して教室に戻ってみると。

「お前、なんで生きてるんだよ」と言いたくなるような傷を負った明久が居た。

何でも島田にやられたのだとか。

詳細はわからんが、人質にされた島田を、明久は偽者だとして全力無視。

そのまま攻めたらしい。

無視した理由は島田が明久を心配していた事。

「あの島田さんにそんな優しさがあるわけがない！」
とは明久の弁。

まあ、普段が普段だからな。仕方がない。

ツンデレはデレるタイミングを間違えると、悲しいことになるんだよな。

瑞希に心配されている明久に、秀吉と共に近づく。

「まさかお前自身が怪我をするとは思ってもいなかったぞ、明久」

「いくら試召『戦争』じゃからといって、本当に怪我をする必要な

ないんじゃないぞ？」

聞くところによると、あれはもはや『戦争』ではなく、『一方的な虐殺』だったらしい。
どんまい明久。

「ちょっと色々あってね。それで試召戦争はどうなったの？」

「今は協定どおり休戦じゃ。続きは明日になる」

「戦況は？」

「一応計画通り教室前に攻め込んだ。もっとも、こちらの被害も少なくはないがな」

雄二にこちらの被害が書かれたメモを渡された。
まあ想定内だが、被害が大きいのは痛いな。
後の戦力に不安が残る。

「……………（クイクイ）」

メモに眼を通していると、裾を引かれた。
振り向いてみると案の定、やや小柄の男子、康太がいる。

「ん、康太。どうかしたか？」

「……Cクラスに何らかの動きがある」

「動き？ ……漁夫の利でも狙う気か？」

「……そこまではわからない。しかし」

「ああ、警戒するには充分な要素だ」

疲弊している軍を狙うのは定石だ。
なんせ潰しやすいのだから。

精神面でも体力面でも、かなりキツイ。
とりあえず、雄二に報告しておく。

「Cクラス、か。漁夫の利を狙うとは、いやらしい連中だな」

「そうでもあるまい。あまりにも筋の通った、常識的な手段だ。お前とて立場が逆なら、そうしていただろう？」

「まあな。だが、それをやられるとたまったもんじゃない」

邪魔されるわけだしな。

チラリと時間を確認する。

まだ遅い時間ではない。

「協定を持ちかけてみるか？」

「そうだな。Dクラスを使って攻め込ませるぞ、とか言って脅してやればどうにかなるか」

「僕らが勝つなんて思ってもいないだろうしね」

FクラスがBクラスにばんとてに勝負しかけているのだからな。
勝てるなんて、そうそう思わないだろう。
いや、正しくは思えない、だろうか。

「よし。それじゃ今から行ってくるか」

「そうだね」

よしよ、と明久が立ち上がる。

体の調子でも確かめているのだろうか、腕を動かしたり屈伸したり。あれだけ動けるのならば、一先ず安心か。
しかし、何かが引つ掛かる。

Cクラス、Bクラス。

この二つが関係した何かであることは間違いないのだが。

……。
だめだ、わからん。

「秀吉は念の為ここに残ってくれ」

「ん？ なんじゃ？ ワシは行かなくて良いのか？」

「お前の顔を見せると、万が一の場合にやろうとしている作戦に支障があるんでな」

「よくわからんが、雄二がそう言うのであれば従おう」

秀吉を使った作戦、か。

1番単純なのは、秀吉を優子として暗躍させることであるが。実際はどうなのだろうか？

途中で須川と島田（明久の返り血を洗い流したらしい）を集団に引き入れる。

人数は多いほうが良い、うん。

しかし、思い出せないな。

Cクラス、Bクラス。

代表？

代表が、なんだ？

何だったかな……。

悩んでいる間にCクラスの教室に到着。

何故だろう。ここで思い出しておかなければ、とても痛手を負おう気がする。

なんらかの危機感があるが、思い出せないが故に扉に手を掛ける雄二を止めることができない。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。このクラスの代表は？」

「私だけど、何か用かしら？」

推測通り、Cクラスにはまだそれなりの人数が残っていた。その人垣を掻き分け、代表が出てくる。たしか、バレー部のホープ。名前は小山だったはず。

「Fクラス代表としてクラス間交渉に来た。時間はあるか？」

「クラス間交渉？ ふうん……」

妙に警戒心を高ぶらせてくる笑みを浮かべる小山。眼を細め、警戒心を限界まで引き絞る。つと、その時。

「あ、思い出した」

「え？ なにをですか？」

「ちよつとな……」

瑞希の疑問に少し言葉を濁らせ、教室に視線を走らせる。可能性はある。奴の性格、行動パターンから読み取れば、居ないほうがおかしいのだから。

「ああ。不可侵条約を結びたい」

「不可侵条約ねえ……」

その僅かな間に、雄二は小山との会話を進めていたらしい。慌てて、雄二に叫んだ。

「雄二！ 今すぐ撤退だっ！」

「あ？ 何だつて？」

振り返り、疑問の視線を投げ掛けてくる。そんなことをしている場合ではない。とつと逃げなければ、危ないのだから。

「どうしようかしらね、根元くん？」

「当然却下。だって、必要ないだろ？」

「なっ！？ 根元君！ Bクラスの君がどうしてこんなところに！」

遅かったか……。

奥から取り巻きを引き連れて現れたのは、Bクラス代表の根元恭二だった。

思い出すのが遅すぎた。

これは私のミスだ……。

「酷いじゃないかFクラスの皆さん。協定を破るなんて。試召戦争に関する行為を一切禁止したよな？」

「根元、貴様」

「先に協定破ったのはソツチだからな？　これはお互い様、だよな！」

根元の言葉と同時に、取り巻きが動き出す。
その背後には、小柄な長谷川教諭が隠れていた。

「長谷川先生！　Bクラス芳野が召喚を」

「させるか！　Fクラス須川が受けて立つ！」

「援護する！　Fクラス御門漣！」

「「試召^{サモン}召喚！」」

いま須川という戦力を失うわけにはいかない。
須川を1人で戦闘に出すには不安がある。
突っ込んでいく須川の相棒を二丁銃で援護。
そうしながら雄二に指示を出した。

「雄二、全員退避させる！」

「わかってる！ 全員退避だ！ 教室に戻るぞ！」

「漣！ 僕たちは協定違反なんてしてない！ 話してみれば」

「無駄な行為はやめろ明久！ 条文には『試召戦争に関する一切の行為を禁ずる』とある！ 奴はそれを盾にしらを切るつもりだ！」

「ま、そゆこと」

「屁理屈だ！」

「屁理屈も立派な理屈の内ってな」

「明久、早く行け！」

「くそっ！」

明久が悔しげに退避するのがわかる。

早くこの戦闘を済ませて、追い駆けなければならない。
だからこそ、腕輪を使う。

「とつとと沈めっ！」

シンクロ
スタートアップ
一心同体 始動

『Bクラス 芳野孝之 VS Fクラス 須川亮&御門濤
数学 161点 VS 41点&540点
』

「こ、コイツ！ 腕輪が！？」

「須川！」

「了解！」

二丁銃で動きを止め、接近。

刀で相手の武器を叩き落とし、須川と2人掛りでとどめを刺す。

須川に頼らなくても問題なかったのだが、万が一ということもある。被害を最小限に抑える手段は悩むでもなく行うべきだ。

1人を戦死に追い込み、すぐさま撤退。

今は戦う時ではない。

「逃がすな！ 坂本を討ち取れ！」

背後から根元の指示と複数の足音が聞こえる。

正直に言おう。かなりまずい状況だ。

Fクラスである須川や島田では、Bクラスの集団に勝てない。

ということは必然的に、私と瑞希が相手をしなければならないのだが。

私と瑞希は点数の消費を抑えなければならない。

さらに言うと、あの人数を相手にして生還するのは難しい。

特に、瑞希を守りながらでは。打開策を考えながら走っていると、瑞希が遅れているのがわかった。

「はあ、ふう……」

「姫路、大丈夫か？」

遅れる瑞希に雄二が声を掛けている。

やはり体力的に劣る瑞希には、この全力疾走がキツイらしい。このままではマズイ。

……。

1つ、瑞希の遅れを取り戻す方法がある。

しかしそれは、あまり褒められたやり方ではない。

瑞希には想い人がいるのだから、あまりこの方法はない。だが、仕方がない。

今は生き残ることが最優先事項。

瑞希を戦死させるわけにはいかない。

「瑞希、先に謝っておく。すまん」

「え？ なん……ですか？」

息を切らせる瑞希から投げ掛けられた疑問は無視。

その場で一步、バックステップ。

他の者は走っているため、急激に前後の順番が変わる。

あっという間に最後尾になった。

計画を実行するために重要なのは、両腕の位置と私の体の傾き。目測で微調整し、固定。その体勢のまま、脚に力を込めて走る。

「ひゃっ！」

可愛らしい悲鳴と共に、瑞希の体が私の腕の中に納まる。

横抱き、俗称お姫様抱っこと呼ばれる体勢だ。

瑞希を追い抜くように走り、掬い上げるように抱え上げた結果だった。

瑞希が走るよりも私が抱えて走った方が速いと判断した行動だ。

そしてその判断は正しかった。

赤面し、硬直した瑞希を抱えたまま雄二に並ぶ。

「お前、意外と大胆な行動するんだな」

「そんなことはどうでもよからう。それより雄二、後ろの集団はどうする気だ？」

「どうもこうもねえよ。このままじゃ、全滅するのが眼に見える」

だろうな。

どうするべきか。

悩んでいると瑞希を落しそうになったため、慌てて抱えなおす。

このままでは危ないので首に手を回すように指示。

指示に従い、おずおずと手を回してくれた。

瑞希の体が安定し、走りやすくなる。
落す危険性がなくなったため、打開策を考えるのに集中できた。
さて、どうする……？

「雄二！」

「なんだ明久！」

「ここは僕が引き受ける！ 雄二は皆を連れて逃げてくれ！」

先行していた明久が足を止め、振り向く。

思考 明久に任せて大丈夫だろうか？

結論 問題なし。

明久は点数を観点から外せば、私に近い性質を持っている。
だからこそ、任せても問題ないだろう。

「……わかった。ここはお前に任せる」

「無茶だけはするなよ、明久。必ず帰って来い」

「もちろんさ。僕も補習室は嫌だからね」

擦れ違いざまに明久にエールを送る。

大丈夫だとは思うが、やはり不安はあるのだから。

「……………（ピタッ）」

「いや、ムツツリーニも逃げて欲しい。多分明日はムツツリーニが戦争の鍵を握るから」

明久なりに考えているのだろう。

心配したらしい康太が立ち止まると、首を振って断った。そのタイミングで、島田が立ち止まった。

「んじゃ、ウチは残ってもいいのかしら。隊長どの？」

「……………頼めるかな？」

「はいはい。お任せあれっと」

島田は笑いながら、追っ手が来る方へ体を向けた。

それを見た康太は戻るべきと判断したらしく、グッと明久に親指を立てて私達の後に続く。

とりあえず、これで後ろの集団は問題ないだろう。

無事に教室に到着できる。

あとは明久と島田が生き残れるかどうか。

あの2人は部隊長と副隊長なのだ。

戦死してしまえば、部隊の士気が低下する。なんとしても生き残ってまらわなければ。

『こいつ馬鹿だぁーっ!』

おお、なんか大合唱が聞こえる。

「やれやれ、明久がなんかやらかしたんだな」

「個人的にはなにをしたのかが気になるんだがね」

「アイツのことだ。どうせ協定のことを持ち出して」

「それでもダメだったから、『万事尽きたか』なんて言ったんだろ
うな?」

「そうだな。絶対そんな感じだ」

後ろからの大合唱に、思わず苦笑しながら雄二と推理する。
なに、あながち間違いではないだろう。
そういう奴だ、明久は。

「あの、漣君」

「ん、どうした?」

「吉井君と島田さんは大丈夫なんですか?」

当然の疑問だろう。

Fクラス2人が、Bクラスの集団に勝てるとは思えない。
だが、明久と島田なら心配なかった。

腕の中で赤面したままの問い掛けに、私は微笑してやった。

「心配するな。他のバカならともかく、あの2人ならば問題ない」

「ですが……」

「瑞希、これは戦争だ。点数で全てが決まるわけではない。明久にも島田にも、学力が低いという短所と共に、長所がある」

「そ、それって……?」

「明久は《観察処分者》であり、島田は明久関連のことなら数倍の力を発揮できる」

だから、なにも問題ないさ。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

教室で明久と島田の帰りを待っている。

私は雄二と今後のことを話し、秀吉と康太は談笑しているが。

やはり不安が拭えないのか、瑞希は落ち着きなく教室の扉に視線を移していた。

小動物のようにキョロキョロする瑞希をみて、私達は苦笑する。

「そう心配すんな、姫路。アイツらは絶対に帰ってくる」

「不安なのはわかるが、あの2人じゃからのう。苦戦はしても、敗北はないじゃろう」

「……お茶でも飲んで落ち着くべき」

「そ、それはわかっているんですけど。やっぱり気になってしまっ
て」

3人の励ましで少し落ち着きを取り戻したのか、康太から渡されたお茶をゆっくりと口に含む。

感謝を込めて3人に会釈しておいた。

今度は瑞希も含め、5人で談笑。

いつの間にか人数分用意されたお茶を飲みながら。

康太、いつの間に用意したんだ？

というか、どこからお茶を出した？

そんな疑問を抱えてもしょうがないので思考の片隅にポイすると、足音が聞こえた。

音が重なっていることから、1人ではないことがわかる数人

数は多くない。むしろ少ないようだ。1、2。2人か。ということとは、

「帰ってきたぞ、あの2人」

「あー、疲れたー」

まるで図つたかのように扉が開く。
言葉通り疲労した明久と、何故か機嫌が良さそうな島田が姿を現した。

「2人とも！ 無事だったんですね！」

1番心配していた瑞希が駆け寄る。
もちろん、お茶を卓袱台に置いて。
明久の視線が瑞希の胸に行っているのがわかるが、まあ許そう。
今回の褒美だ。

「うん。このくらいなんともいであっ！」

「容赦ねえな、島田」

足先を踏み抜かれる明久と踏み抜く島田を見て、雄二が嬉しそうに
呟いた。

明久の不幸を見るのが楽しくて仕方ないのだろう。
……コイツら、なんで友達やってるんだろうか？
そんなことより、アチラでは（痴話）喧嘩が始まっていた。

「し、島田さん。僕がなにか悪いことでも」

「（キッ！）」

「あ。い、いや。美波」

怒気を通り越して僅かながら殺気を感じる視線に、明久は眼を逸らした。

いや、そんなことはどうでもいい。
明久は今、何と言った？

「明久、島田の名前を呼ばなかったかのう？」

「呼んだな。俺も確かに聞いた」

「……驚きの進展」

「相手が島田だからな。今回はタイミング良くデレたのかもしれん」

4人で円を作り、コソコソと密談。

うむ、私の聞き間違いではなかったらしい。

しかし、あの島田が、ねえ。

「随分2人とも仲良くなったんですね？」

「え？ コレで？」

ニコニコと嬉しそうな瑞希に、滅茶苦茶不思議そうに返す明久。
あの鈍感バカには自覚できていないらしい。

……。

「普段の態度がアレだから、仕方ない、のか？」

「どうじゃろう？ 明久以外にはわかりやすいと思うのじゃが」

「姫路も一発で気付いたしな。やっぱり明久が鈍感^{バカ}なだけだろ」

「……ツンデレは正義」

密談継続中。

明久の発言でさらに拍車が掛かった。

あの2人がくっつくには、まだまだ課題が多いようだ。

あと康太。よくわからん発言はやめなさい。

さて、とりあえず。

生還を喜ぶことにしようかね。

「戻ったか。お疲れさん」

「無事じゃったようじゃな」

「ん。ただいま」

「敵も追い駆けて来なかったし、随分と頑張ってくれたようだな」

「まあね。あそこで抜かれたら、雄二が負けるかもしれないからね」

「お前、そんなに俺のことを心配して……」

「違う！ 戦争に負けるのが嫌だったんだよ！ だから顔を赤らめるな！」

瞬時に赤面してみせる雄二は役者になれると思う。食っていけるかどうかはわからないが。

今度演劇部にでも誘ってみることにした。

主に女性キャラを演じる役で。

見物だな、コレ。

「さて、お前ら」

真面目な表情になった。

相変わらず切り替えが早いな。

「こうなった以上、Cクラスも敵だ。同盟戦がない以上は連戦とい

う形になるだろうが、正直Bクラス戦の直後にCクラス戦はきつい」

正直じゃなくてもキツイ。

まあ、向こうはその気で来るのだろうからな。
さらに厄介だ。

「それならどうしようか？ このままじゃ勝ってもCクラスの餌食だよ？」

「そうじゃな……」

「心配するな」

頭を捻る明久達に、雄二は野性感たっぷりの活き活きした顔を向けた。
凄く楽しそうだ。
なんかエグイことでもやるのかもしれない。

「向こうがそう来るなら、こっちにだって考えがある」

「考え？」

「ああ。明日の朝に実行する。目には目を、だ」

思いつ切り企んでいた。

視線が少し秀吉に移ったのがわかるから、おそらく彼を使うのだから。
うが。

この日はコレで解散。
続きは翌日だ。

試召戦争編 第六問（後書き）

召喚獣のことがよくわかりません。
原作、井上さんの描写では

腕や足を刺された程度なら点数が減るくらいで済む、首や心臓をや
られたら即死　つまり補習室行きだ　一巻P73

とあるんですが。

即死とかあるんですかね？

それとも島田さんと清水さんの点数差があつたから、この描写にな
つたんでしょうか？

あと1つ。

一呼吸置いて、工藤さんの召喚獣が全身から血を噴き出して倒れた

一巻P257

井上さんの描写ではこう書かれているんですが、P259の葉賀さ
んの挿絵では出血なんてないんです。

鼻血はセーフだけど刃傷沙汰の血はアウト、みたいなのがあって
しょうかね？

やっぱり井上さんの描写を重視するべきでしょうか……。

そうすると、今回の澁君の首狩り。

大変なことになりますね。

霧島さん、どうするかな？。

一応伏線は（無理矢理）捻じ込んでますので、フラグも立てることはできませんが。

原作バカテスでは、雄二君や明久君が

「ギヤアアアアアアッ！」

とか言ってますけど、澁に言わせるとなんか変じゃありません？

うちの子の性格だと、あの制裁を素で受け流しそうで怖い。

試召戦争編 第七問（前書き）

今回は少しオリジナル性を多めにしてみました。

ですので、見苦しいところがあるかもしれません。

覚悟して御覧ください。

試召戦争編 第七問

「秀吉にコイツを着てもらおう」

そう言つて雄二が取り出すのは、我が学園の制服だ。

言葉通り、秀吉にコレを着てもらつてCクラスへの使者をしてもらうのだらう。

ところで雄二。私はそんなことよりも聞きたい事がある。

「お前、そんな物どうやって手に入れたんだ？」

雄二が取り出した制服は女子用の物だ。

男である雄二が、まともな方法で手に入れることができる代物ではない。

まさか盗難なんてものに手を出したわけではあるまいな？

だとすれば、もう瑞希に近づけるわけにはいかんのだが……。

「寡黙なる性識者から貸してもらつた」

「そうかい」

納得だ。

康太ならば持つていてもおかしくはない。

しかし、康太はどうやって手に入れているのだらうか？

自分で注文して？ それとも別の方法で？
どうでもいいか。

「別に構わんが、ワシが女装してどうするんじゃ？」

「秀吉には木下優子として、Aクラスの使者を装ってもらおう」

秀吉と優子は一卵性双生児であつてもおかしくないほど似ている。
本人達を並べてわかる違いといえば性格と話し方の二つぐらいだろ
うか。

だからこそ、秀吉が優子の格好をして使者を務めれば、Aクラスか
らの使者だと思ひ込むのが道理だ。

今回はそれを利用した、捻くれた作戦だった。

雄二らしさが滲み出ている。

ところで秀吉よ。

私が言うのもなんだが、女装することには大いに構っておけ。男と
して。

「と、いうわけで秀吉。用意をしてくれ」

「う、うむ……」

「……っ！！（パシャパシャパシャパシャッ！）」

秀吉が着替えるために服に手を掛ける。

雄二はただ普通に眺めているだけだが……。

康太はフライング気味にシャッターを押しまくって撮影を開始。
明久は凝視。

きつとこれは秀吉の外見が女である故の宿命、仕方ないのだろう。

……多分。

だが、同じような境遇に立つ者として見逃すわけにはいかない。

秀吉の手首を掴み、脱衣を止めた。

「漣、どうしたんじゃ？」

「いや、ここで着替えるのはマズイのでね。場所を変えよう」

「ん？ マズイとはどういう意味じゃ？」

「そのままの意味だよ。さて、隣の空き教室に行こう。雄二、構わ
んだろう？」

「心配性だな、お前。構わんぞ。だが、着替えるところを目撃され
ないようにしろよ」

「わかってる」

私の行動の理由がわかっているのだろう。雄二は苦笑しながら許可
を出した。

恨めしげな視線を送ってくる康太の頭を撫で、意味がわかっていな
い秀吉の背中を押して教室を出る。

明久の嘆きが聞こえた気がするが全く問題ない。全力で無視させて
もらおう。

隣にある空き教室に秀吉を押し込み、私は扉の前で待機することに

した。

他人の着替えを見る趣味はないし、ココで見張っていれば目撃される前に私が気付く。

この教室を覗くような人物は居ないと思うが、念のためだ。

「着替え終わったぞい」

「ん、そうか」

着替え終了とのことなので扉を開ける。

そこに立っているのは、紛れも無い美少女だった。

まあ優子が美少女なのだし、女装した秀吉が美少女なのは当然だろうか？

それにしても相変わらず。

「似合ってるな、秀吉」

「そ、そうじゃろっか？」

「ああ、似合ってる」

「う……あ、ありがとう」

モゴモゴと、顔を赤らめて礼を言われた。

はて？ 礼を言われるようなことを言った覚えはないが……。少しばかり悩みながら秀吉の制服（男子用）を受け取る。

Fクラスに顔を覗かせ、準備が終わったことを報告した。というわけで、私達はCクラスへ向かっている。

「目撃はされなかっただろうな？」

「私がそんなへマをすと思うかね？」

「思わねえ。しかし違和感ねえな、秀吉」

「だよね〜。もうそのまま女の子として生活していけばいいと思う」
「よ」

「……全面的に賛成」

「いや、ワシは男なのじゃが……」

「こういうやりとりは女顔の宿命だと思うんだ。」

「ところで、澪は女装しないの？」

「バカかお前。いや、実際バカだったな。すまん」

「よし雄二、面貸せや」

「はっ、テメエに貸してやる面なんてねえよ」

なんとという低レベルの喧嘩。
つつこむのもバカらしい。
とりあえず、説明しておくことにした。

「明久、コスプレでもいい。お前が一番いいと思う女物の服を想像してみろ」

「え、あ、うん」

「……よし、思い浮かべたな？ それをそのまま、私が着用したところを想像しろ」

「……………」

「どうだ？」

「……………漣だった」

まあ、なんだ。

私は恐ろしいほどに中性的な容姿を持っている。

そのせいなのだろう。

男物の服でも女物の服でも、どんな服であろうと『違和感なく』着こなすことができるのだ。

しかも『御門漣』という確固とした存在を保ったままで。
つまりだ。

女装したとしても、こいつは御門漣だ、ということが瞬時にバレてしまうわけである。

しかも全く違和感を感じさせることなく……………。

私にとっては、女装なんて全くもって無意味だということだ。そんなことを適当に説明していると、Cクラス前に到着した。

「さて、ここからは済まないが1人で頼むぞ、秀吉」

Aクラスからの使者を装う以上、Fクラスの人間が顔を出すのはマズイ。

よって、我々は少し離れた場所から見守るしかない。

「気が進まんのう……」

あまり乗り気ではないらしい。

姉のフリをして騙す行為が気に入らないのか。

それとも、優子からの仕打ちが怖いのか。

いったいどちらで悩んでいるのだろうかね？

まあ、どちらであろうとやってもらわなければ困るのだが。

「そこを何とか頼む」

「むう……。仕方ないのう……」

「悪いな。とにかくあいつらを挑発して、Aクラスに敵意を抱くように仕向けてくれ。お前ならできるはずだ」

逆に言うと、秀吉にしかできない。

Aクラスの人間に化けることができ、尚且つしっかりとした演技を行える者は彼（彼女？）しかないのだから。

演技自体は私にもできるが、Aクラスの人間に化けることはできない。

「はあ……。あまり期待はせんでくれよ……」

「秀吉なら問題あるまいよ。胸を張って堂々とやってくるといい」

「薄に言われると悪い気がしないのは確かじゃが……。そうじゃな、成功したら頭を撫でてくれるかの？」

そんなもの要求してどうする。

私は……。何と言ったかな？ 康太と明久が何か言っていたのだが。

な、な……。ナデポ？ とかいう体質は持っていない。

「成功したら、な」

「うむ、全力を尽くしてくるのじゃ」

決定だ。この作戦は成功する。

「秀吉、大丈夫かな？ 念のために別の作戦を考えておいた方がいいと思うんだけど。2人は考えてるの？」

「「考えてない。というか必要ない」」

雄二と声を揃えて断言した。

私は元から秀吉を信じているが、雄二も断言できるほど信頼していることに喜びを感じる。

団結力が強くなっているというのは、それだけで喜ばしいものだ。父と母からそう学んだ。

「2人が言うならそうなんだろうけど、やっぱり心配だなあ……………」

「シツ。秀吉が教室に入るぞ」

心配そうな視線を向ける明久に「静かにしろ」と合図を送る。

この距離なら私達の声が聞かれる可能性は限りなく低いが、念の為にということだ。

ガラガラガラ、と秀吉がCクラスの扉を開け、一言。

『静かになさい、この薄汚い豚ども!』

「……………うわあ」

……………。

秀吉。

その挑発の仕方は、死亡フラグだと思うんだ。

主に優子からの制裁的な意味で。
見る、あの明久が慄いてるぞ。
それだけインパクトが大きいんだ。
絶対に優子の耳に届く。

「流石だな、秀吉」

「うん。これ以上はない挑発だね……。って、淺。なんで深く溜め息なんてついてるのさ?」

「ん、ちょっとな。気にするな」

後々、秀吉が悲惨な目に遭いそうで恐ろしいだけだから。

『な、何よアンタ!』

この声はCクラス代表の小山だろうな。
声だけでも激怒しているのがわかる。

『話しかけないで! 豚臭いわ!』

秀吉、絶対に潰されるな。
骨が残っているといいんだが。

『アンタ、Aクラスの木下ね？　ちょっと点数が良いからっていい気になってるんじゃないわよ！　何の用よ！』

当然の返答だ。

良い感じに興奮しているらしい。

このままどんどん興奮して、もっと判断力が落ちてくれるとありがたい。

『私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！　貴女達なんて豚小屋で充分だわ！』

『なっ！　言うに事欠いて私達にはFクラスがお似合いですって！』

Fクラスの教室は確かに最悪だが、豚小屋ではないぞ、小山。もう少し言葉を選ぶべきだ。

『手が穢れてしまうから本当は嫌だけど、特別に今回は貴方達を相応しい教室に送ってあげようかと思うの』

演劇部怖い。

そう思ったのは私だけではないはず。

雄二は顔が少し引き攣っているし、明久はブツブツと何かを呟いている。

康太はいつもどおり。

ん？ 録音機なんて何故持っている？ しかも電源が入っているじゃないか。

まさか、秀吉のこの演技を録音しているのか？

そんなの売るんだろうか、この子は。

いや、「DMに売れる」とか言われても困る。

『ちょうど試召戦争の準備もしているようだし、覚悟しておきなさい。近いうちに私達が薄汚い貴女たちを始末してあげるから！』

その言葉を最後に、秀吉は教室から出てきた。何故だろうか、やたらとスツキリした顔だ。

「これで良かったかのう？」

「ああ。素晴らしい仕事だった」

『Fクラスなんて相手にしてられないわ！ Aクラス戦の準備を始めろるわよ！』

小山のヒステリック気味な叫び声が聴こえる。

秀吉の任務が見事成功したことを物語っていた。

「作戦もうまくいったことだし、俺達もBクラス戦の準備を始めるぞ」

「あ、うん」

「……了解」

クルリと向きを変えて歩きだした雄二に、明久、康太と続く。
私は少し下がって、秀吉と並んだ。

「流石だな、秀吉。完璧だったよ」

「姉上の本性をワシなりに推測した結果じゃよ。褒められる程ではない」

成功したため、報酬として秀吉が要求した『頭ナデナデ』を実行。
なにが嬉しいのか、ニコニコとしている。

「そうか。で、秀吉、一ついいか？」

「ん、なんじゃ？」

「このことが優子の耳に入ったら、秀吉。お前、死ぬんじゃないか？」

「……」

「……」

「…………（ガタガタブルブル）」

「…………ファイト、秀吉」

「う、後生じゃ！一緒に弁解してくれ！頼むのじゃ溲！」

涙眼で必死にしがみ付いてくる秀吉の頼みを苦笑しながら受諾した。減刑くらいなら、できると思うんだがね。

・
・
・
・
・
・

「ドアと壁を上手く使うんじゃ！戦線を拡大させるでないぞ！」

2人で優子に電話で謝罪した後、戦闘開始。

午前9時にBクラス戦が始まり、昨日中断されたBクラス前という位置から進軍を開始した。

今回の作戦は敵対勢力を教室内に閉じ込めること。

勝てなくても閉じ込めるだけでいいため、そこまで苦戦するような内容ではないのだが。

どうも瑞希の様子がおかしい。

彼女はこの軍の総司令部。つまり指示を出すのが役割だ。

だが、全く指示が飛んでこない。

そもそも何もしていないように思える。

顔色が悪いのもかなり気になる。

体調が悪いのだろうか？

「勝負は極力単教科で挑むのじゃ！ 補給も念入りに行え！」

「一対一という状況を作るな！ 常に三人一組スリーマンセルを組め！ 多対一で挑むことを心掛ける！」

瑞希が指示を出さないのならば、別の誰かが指示を出さなければならぬ。

現在指揮を執っているのは、副司令である秀吉と総司令官補佐である私。

とりあえずは雄二の作戦通りに進めている。

「左側出入り口、押し戻されています！」

「古典の戦力が足りない！ 援軍を頼む！」

流石、文型の多いBクラス。そう言っておこうか。

まいったな。

私はこちらの援護で手一杯だ。

腕輪を使えば簡単なだろうが、点の消費やフィードバックがある

から易々と使うわけにはいかん。
つまり、ここは瑞希に行ってもらわなければならないということだ。
雄二の作戦では彼女が最重要になってくるため、あまり彼女の頼るわけにはいかんのだが。
仕方あるまい。

「瑞希、向こうの援護を頼む！」

「あ、そ、そのっ……！」

やはり、おかしい。

泣きそうな顔でオロオロしている瑞希を見ると、そう思わざるを得なかった。

体調が悪いわけではなさそうだが、
ならば、なぜ？

「漣！ 左側が突破される！」

「そこまで押されているのか！？ 竹中教諭を何とかしろ、明久！
あのネタの使用を許可する！」

「わかった！ 任せといて！」

ネタというのはツラなことだ。

竹中教諭に駆け寄った明久が何かを呟くと、竹中教諭は頭を押さえ
て何処かへ走り去った。

明久と秀吉が指示を飛ばす隙に、瑞希に事情を聞く事に。

「瑞希、一体どうした？ 様子がおかしいぞ」

「そ、その、なんでもないですっ」

首をフルフルと振る瑞希。

その動きに合わせ、長く柔らかな髪がハラハラと舞う。

その大きすぎる動作が、余計になにかあったのだと確信させた。

「そっちは思えんな。話すだけでもいい。何があった？」

「ほ、本当になんでもないんです！」

眼に涙を溜めて言われても説得力の欠片もない。
何かがあったのだ。

この娘をこの状態にする程の、何かが。

「右側入り口、教科が現国に変更されました！」

「数学教師はどうした！」

「Bクラス内に拉致された模様！」

周りからの叫び声で、現在の戦況を確認する。
左側に続き、右側も文型で固めるつもりなのかもしれない。
だとすれば、かなり危険だ。

「私が行きますっ！」

すぐに瑞希が駆けつけようとするが……。

「あ……」

なにかを見て立ち止まり、顔が泣きそうに歪む。

なんだ？ なに見て立ち止まった？

彼女の視線を辿っていくと、窓際で腕を組んで我々を見下している
根元がいた。

そして、その手には……。

「根元、貴様……」

3日前の放課後。私が偶然見掛けてしまった、瑞希のラブレター恋文。

あの根元が対等な協定を結ぶ事を了承した時点で、疑うべきだった。
要はあの時点で姫路瑞希というカードを無力化する手段が整っていたのだ。

私を相手にする場合は、英語で挑めばいい。

しかし、万能型の瑞希には突破口が少なすぎる。
だからこそ、Fクラスみんぎの切り札の行動を制限する手段が必要だった
のだろう。
そこまで考え、私は行動を開始した。

「瑞希、こっちにおいで」

「はい」

俯く瑞希の手を引き、根元の視線し入らない場所へ移動する。

「今は、あの時の？」

「……（コクリ）」

黙ったまま、俯いたままで頷く。それだけの動作で十二分。
泣きそうな顔を両手で包み、上を向かせる。
できるだけ柔らかく微笑んで、涙に濡れた瑞希の瞳をみつめた。

「少し、戦線から下がっていなさい。特に、根元の視界に入るよう
な場所には行かないこと。いいね？」

「……はい」

「よし、いい子だ」

ゆっくりと、そっと抱きしめる。
腕を少し強く締め、頭を撫で付けた。
安心してくれるように、精一杯心を込めて。

「心配するな。アレは私がなんとかさせてみせる。大丈夫だ」

「……み、お……くん」

背中に手を回して、私の胸に顔を埋める。

震えていること、胸元に冷たさを感じることから、泣いているのだと理解した。

もう一度強く、ぎゅっと抱きしめてから離れる。

最後に髪を梳くようにして頭を撫でて、疾走を開始した。

向かうのは雄二の下。

今から私取る行動は、彼の作戦の一部を狂わせる。

たとえどんな理由であろうとも、無関係の集団を巻き込むやりかたは良くない。

だからこそ、許可が必要だった。

「漣、根本君が姫路さんに見せ付けてたのって……」

いつの間にか私と並走していた明久が、私に問いかける。
見ていたらしい。

その間にもしっかりと指示を出していた事も知っているし。

明久はバカだが、能力そのものはかなり高いのだ。

「気が付いていたのか？ 奴は瑞希に脅しを掛けているらしい。アレは、瑞希の大切な物だ」

「そうなんだ。ということは、今頃は根本君の制服の中にあるんだね？ よし、僕も手伝うよ」

「感謝する」

深い追求はせず、手伝いを申し出てくれた友人に感謝する。
バカだがしっかりと思いやりのある親友を従え、私は殺意という名の刃を研いでいた。

さあ、根元。

愉快に華麗に、

「殺してやるよ」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「雄二」

「うん？ 遷と明久か。逃走か？ チョキでしばくぞ」

適当に言っている様から、本気でそう思っているわけではないことがわかる。

実際、肩を竦めてこっ続けた。

「ま、遷がいるならそれはありえないな」

「え？ 僕だけだったらありえるの？」

「当たり前だろうが」

「なんでさ？」

「バカだから」

「よし、表出る。っていつもなら言っただけだね。雄二、ちょっと聞いて欲しいことがあるんだ」

黙り込んでいる私の代わりに、明久が言う。

真剣さが伝わったのだろうか？ 雄二は顔を引き締めた。

「……とりあえず、聞こうか」

「根本君の着ている制服が欲しいんだ」

「……お前に何があったのか、聞いていいか？」

雄二は思わず顔を引き攣らせている。

当然の反応だと思う。

恐らく面と向かって言われると、私も硬直する。

「明久、言い方を考える」

「うう、なんか変な誤解が……」

当然だバカ。

「雄二、正確には制服の中にある物が欲しい」

「制服の中にある物、ね。なんだ、それは？」

「すまん、それは言えない」

言えるわけがない。

アレは瑞希が隠していた恋文。
知られるだけでも恥ずかしいだろう。
説得力の無い頼みになってしまいが、どうしようもない。

「……よくわからんが、勝利の暁にはそれくらいなんとかしよう」
「感謝する」

「で、それだけ、なわけないよな？ それだけならBクラスに勝利した直後に言えば事足りる」

「ああ。もう一つ、頼みがある」

「なんだ？ 言ってみる」

「今回の戦闘、姫路さんを外してくれないかな？」

「理由は？」

「すまん」

「それも、言えないか」

この要求が受諾される可能性は低い。
理由は言えない。目的の物も言えない。
不安定要素が多いのだ。むしろ不安定要素しかない。
雄二も溜め息を付いている。
拒否されたら、私は。

試召戦争を投げ出して、直接アイツを　。

「頼む、雄二！」

徐々に危ない方向へ向かう思考を遮ったのは、頭を下げる明久だった。

「僕も漕が欲しがっている物が何なのか、よくわからない。でも、やっぱり親友が困ってるなら、助けたいんだ」

「明久……」

「僕は今まで何度も漕に助けられてる。だから　」

「よし、わかった」

頷き、雄二は許可を出す。

『ハイリスク・ローリターン』どころじゃない。
こんな『ハイリスク・ノーリターン』な願いを、雄二は聞き入れてくれた。

「姫路の方はなんとかしよう。制服の中のモンだっけてくれてやる。
だがな」

頭を掻きながら、首を横に振った。
わかつている。

この頼みに、大きすぎる不安があることは。

「お前達もわかつてるだろうが、姫路を戦線離脱させちまったら戦
カダウンどころの話じゃねえ。切り札不在になるうえに、士気が下
がる」

眼を細め、私と明久を見据えて言い放った。

「条件を付ける」

「条件？」

「姫路が担う予定だった役割を、お前達で果たせ。手段は選ばなく
ていい。必ず成功させる」

「問題ない。明久がいる」

「大丈夫だよ。澁がいるからね」

「相変わらず頼もしい団結力だな」

苦笑して固い雰囲気崩す。

その団結力の中に自分が入っていることは自覚しているのだろうか？
一度緩んだ空気を、再び真剣な表情にすることで引き締める。

「それで、僕達は何をしたらいい？」

「タイミングを見計らって根元に攻撃をしかける。科目は何でもいい」

「他の者のフォローは？」

「ない。しかも、Bクラス教室の出入り口は今の状態のままだ」

「……難しいことを言ってくれね」

あれほど密集しているのだ。

召喚獣の操作に慣れている明久でも、戦闘に慣れている私でも。

あの集団を突破して、さらに根元に攻撃をしかけるとなると。

……相当難しい。

「もし、失敗したら」

「失敗するな。必ず成功させる」

いつになく強い口調。

まだこの作戦の全貌を知っているわけではないが、失敗は敗北に繋がると見て間違いないな。

模索する。

今回の作戦は時間稼ぎが重要になる。

瑞希ですらその一角を担っていたのだから、最重要と言ってもいいだろう。

「それじゃ、うまくやれよ」

「え？ どこか行くの？」

「Dクラスに指示を出してくる。例の件でな」

例の件。

室外機のことだろう。

アレを止めて……。

なるほど。1つ仮説が思い浮かんだ。

ならば、どうそれに繋げるか。

勝てなくてもいい。

時間を稼げば、コチラの勝ち。

問題は時間を稼ぐ方法。

どうする？

「明久」

教室を出る直前、雄二は振り向くことなく明久にこう言った。

「確かに点数は低いけど、秀吉やムツリーニのように、あるいは遷

のように、お前にも秀でていいる部分がある。だから俺はお前を信頼している。問題ない、お前なら突破口を開ける」

「雄二……」

「うまくやれ。計画に変更はない」

そう言い残し、雄二は去っていった。

明久は雄二の助言を受け、考え込んでいる。

おそらく、突破口を開く方法を。

ならば私のすることは、時間稼ぎの模索。

突破口は、明久に任せる。

「……痛そうだよなあ」

突然、ポツリと呟いた。

思わず明久に視線を向けると、自分の手を凝視している。

「よっしゃ！ あの外道に目に物見せてやる！」

「明久？」

「遷、行こう。できるよ。僕ならできる。根本君は遷任せになっちゃうかもしれないけど、突破口は僕に任せて」

自信満々に、明久は言い放った。
親友が言うのだ。疑う必要は無い。
私は素直に頷き、明久に付いて行くことにした。

「美波！ 武藤君と君島君も、協力してくれ！」

教室内で補給テストを受けていた三人を巻き込み、私達はDクラスに向かった。

・
・
・
・
・
・
・

「二人とも、本当にやるんですか？」

もう同じ質問を何度もしているのは、立会人として呼び出した英語担当の遠藤教諭。

心配そうに、二人に眼を向けていた。

「はい。もちろんです」

「このバカとは一度決着をつけなきゃいけなかったんです」

向き合うのは明久と島田。

「でも、それならDクラスでやらなくても良いんじゃないですか？」

「仕方ないんです。このバカは《観察処分者》ですから。オンボロのFクラスで召喚したら、召喚獣の戦いの勢いで教室が崩れちゃうんで」

「もう一度考え直しては」

「いえ。やります。彼女には日頃の礼をしないと気が済みません」

ここまでやっているのになおも心配そうにする遠藤教諭は、やはり良い教師だと思う。

助けを求めるかのように向けられた視線に、私は首を振る。少し良心が痛むが、仕方が無い。

もう一度、二人に視線を向け、一つ溜め息を付いた。

「わかりました。お互いを知る為に喧嘩をするというのも、教育としては重要かもしれませんがね」

そう言い、遠藤教諭は明久と島田から距離を取る。

そして、一言。

「召喚を許可します！」

「「サモン試獣召喚！」」

掛け声と共に現れるのは二体の召喚獣。

両者とも、本人をデフォルメ化させたような姿だ。

島田は軍服姿でサーベル装備。

明久は改造制服で木刀装備だった。

「行けっ！」

明久の声に答えるように、明久の相棒は島田の相棒目掛けて駆け出す。

壁を背にした島田の召喚獣に、無駄に大きなモーションを付けて殴りつけた。

ドンッ

「ぐ　　うっ！」

大きすぎるモーションを付けた攻撃は、当たり前のように避けられる。

壁を殴りつけた相棒の痛みによるフィードバックで、明久の顔が歪む。

「んのおっ！」

再び振られる拳は、先程よりも力がこもっている。当然回避され、壁を打つ。

「つう……っ！」

見ていることしか出来ない不甲斐なさに、唇を噛んだ。親友がアレだけ痛がっているのに。今は我慢するしかない。私の仕事は、この後なのだから。

「アキ、時間がないわよ」

島田による時報。

リミットまで、後4分。

『お前らいい加減諦めるよな。昨日から出入口に人が集まりやがって。暑苦しいことこの上ないっての』

『どうした？ 軟弱なBクラス代表サマはそろそろギブアップか？』

聞き慣れた声と、ターゲット標的のやりとりが聞こえる。

瑞希が戦闘に参加できない分、本隊が補っているのだろう。

明久はそんなことを気にせず、壁を睨みつけてまた殴りかかる。

「らあっ！」

「アキ、急いで」

『はア？ ギブアップするのはそっちだろ？』

『無用な心配だな』

『そうか？ 頼みの綱の姫路さんも調子悪そうだぜ？ 御門もいな
いみたいだしな』

『……お前ら相手じゃ役不足だからな。二人とも休んでもらってる
な』

『けっ！ 口だけは達者だな。負け組代表さんよお』

『負け組？ それがFクラスのことなら、もうすぐお前が負け組代
表だな』

「はああっ！」

フィードバックのしすぎだろう。
明久の拳から、かなりの出血がある。
床に、血溜まりができるほどに。
見ていることしか出来ないのが悔しい。
左手で、指がめり込むほど右腕を掴む。

『……さつきからドンドンと、壁がつるせえな。何かやってるのか？』

『さあな。人望のないお前に対しての嫌がらせじゃないのか？』

『けっ。言ってる。どうせもつすぐ決着だ。お前ら、一気に押し出せ！』

『……態勢を立て直す！ 一旦下がるぞ！』

『どうした、散々ふかしておきながら逃げるのか！』

「アキ、そろそろよ」

「うん。わかってる。遷、準備は」

「既に出来てる。いつでも構わんぞ」

ココに集まったメンバーが、一箇所に集合する。

全員、用意は出来ている。

「吉井君、島田さん。二人とも何をしようとしているのですか？」

さすがにおかしいと気付いたらしい。

遠藤教諭が声を掛けようとするが、
私が止めた。

「すみません、教諭。後で謝罪はします。ですが、今は見逃して欲しい」

「御門君？ 一体何を」

「おおおおおっ！」

遠藤教諭の声が、明久の叫びに遮られた。
5 発目の拳。

これでダメなら、明久の拳が持たない。

「だああーっしやあーっ！」

魂を震わせるような雄叫び。

顔は痛みで歪み、拳からは血が流れている。
そんな、明久の全力を叩き込まれた壁は、

ドゴオッ！！

豪快な音を立て、崩壊した。

Bクラスに続くトンネルと化したそこは、コンクリートを壊した砂埃で視界が最悪だ。

これなら少し、明久に礼を言う時間がある。
手を押さえ、蹲っている明久に近づいた。

「うう……」

「明久、よくやった」

「い、痛い」

「ああ、そうだろうな。そうだな、感謝の印として、一ヶ月ほど私が料理を作ってやろう」

「本当？」

「もちろん。だから、ゆっくり休んでいろ」

ここから先は、私の仕事だ。

時間のズレで、30秒だけ残ってしまった。

ならば、私はその30秒を稼いでやる。

飴を取り出して口に啜え込み、今だに舞う砂埃の中に足を進めた。

・
・
・
・
・

雄二 side

『だぁぁーっしゅぁぁーっ！！』

ドゴオツ！！

明久の雄叫びと共に、壁が崩れ去った。

「ンなっ！？」

アホ臭い顔でビビッている根元を尻目に、俺は微かに舌打ちをした。
作戦開始まで30秒早いのだ。

30秒もあれば、この混乱は沈静化するだろう。
混乱しているなかで行うから、あの作戦は成功するのだ。
何か策を。

「いや、お前がいるから問題ねえーよな、漣」

コツリ、コツリ。

砂埃の中を突っ切って、確実に一歩ずつ接近してくる影。

いつもは首に巻いている長い髪が、今は解かれています。

歩を進める度にフワリと舞い上がる長髪の影は、見方によれば翼に見える。

「標的、Bクラス。試験^{サモン}召喚」

『 Fクラス	御門漣	V S	Bクラス	4人
英語	84点	V S	合計	1003点
				』

表示された点数は英語。

ということは、向こうには遠藤先生がいるんだろう。

「よりによって英語かよ」

「御門は大丈夫なのか？」

後ろの連中が心配している。

なぜ、漣の苦手科目である英語の担当教師を選ばなければならなかったのか。

簡単だ。

寛大だから。

多少のことは大目に見てくれるあの教師でないと、壁をぶち壊すなんて見逃してくれなかったに違いない。いや、どうせあとで説教なんだろうが。

「は、は！ 何だよビビらせやがって。そんな点数じゃ、俺達に勝てるわけがないだろうが！」

「勝てなくても構わんのだよ」

「なに？」

「遊んでやるから、掛かって来い」

相手を舐めきった答えだった。

その答えで頭に血が上った根元は、近衛部隊に突撃と命じる。もう晴れてきたとはいえ、砂埃はまだ下の方には残っている。つまり、背の低い召喚獣の姿は確認しづらい状況だ。

視界と足場。

戦闘で重要視される二つの要素が、最悪の状態。

そんな状況で、あの御門濤に勝負を仕掛けるなど。

馬鹿馬鹿しいにも程がある。

「終わったな」

俺の呟きは誰にも拾えなかっただろう。それほど小さな呟く。

だってそうだろ？

溥の挑発には、絶対にこんな本音がある。

さあ、処刑の時間だ

これは戦争。

点数で有利不利は決まっても、勝敗は決まらない。

点数つてのは、ゲームで言うレベルであると考えている。

だから点数が^{レベル}高いと、基本能力も^{ステータス}高い。

だが、それだけだ。

結局、重要なのは^{プレイヤー}召喚者の腕。

いくらレベルが高くても、馬鹿なことばかりやっていけば雑魚にだって負けちまう。

いくらレベルが低くても、最善の行動ばかりとっていれば強敵にだって勝てちまう。

戦争なんてとくにそうだ。

ド素人にマシンガン持たせるより、プロにハンドガン持たせるほうがいい。

明久なんていい例ではないだろうか？

あいつは点こそ低いが、Bクラス相手にまともによりあえる。

明久は点の低さを、召喚獣を人一倍動かした事があるという経験で補っている。

溥にも、同等なことができるのだ。

漣は点の低さを、戦闘に対する経験と技術、あの両親から受け継いだセンスで補うことができる。

普段、点数が高くあまり目立たない特徴だが、今回のような場面では、これが恐ろしく役に立つのだ。

『Fクラス	御門漣	V S	Bクラス	4人
英語	80点	V S	合計	962点
				』

そら、ドンドン点数が削れてる。

戦闘の天才相手に、あんな視界も足場も悪い場所に突っ込ませるのが悪いんだよ。

「な、なんで勝てないんだよ！ なにやってんだ、とっとと終わらせろ！ 相手は1人だろ！？」

「相手が悪すぎたんだよ、バーカ」

あ、あと。

もう終わりな、この戦争。

ダン、ダンッ！

室外機をぶっ壊してエアコンが壊れたおかげで、室内は暑い。つてなわけで、窓は全開だ。

その全開の窓から侵入してきたのは、小柄なムツリニとゴツツ

イ保険体育教師。

それと同時に、召喚獣同士の争いソツチのけでフラリと姿を現す溇。その溇を見て、俺は震えた。

キれていることがわかるのに一切殺気を感じない。だというのに、瞳は殺意で染まっている。

『殺気を表に出す奴は素人。殺気は出すものではなく、内側に溜めて原動力にするもの』

以前、溇が言っていた言葉だ。

聞いた時はなるほどと思った。

殺気を出してしまえば、感じ取られて自分の場所や感情がばれる。内側に溜めれば感じ取られることはない。

溇からすれば、内側に溜めて原動力にすることでより激しく動くことができる、らしいが。

俺にはそこまでわからなかった。

で、問題は眼だ。

『思考を殺意で埋め尽くせ。敵に遠慮などする必要も、慈悲を与える必要もない』

言葉のまんまを再現してんじゃねえかってぐらい、瞳が殺意に染まっている。

しかも見られて怯えてしまうような、わかりやすい殺意ではなく。

鋭く細く、錬成された殺意だった。

正しく刃。

その視線で根元を捉えたまま、一言言い放った。

「消せ」

ムッツリーニはコクリと頷いた後、召喚の準備を始める。

「……Fクラス土屋康太」

「き、キサマ……！」

「……Bクラス根本恭二に保健体育勝負を申し込む」

「ムッツリーニイーツ！」

「サモン試獣召喚」

『Fクラス 土屋康太 VS Bクラス 根本恭二
保健体育 441点 VS 208点』

澁と明久の役割は時間稼ぎ。

戦死しないかぎり、勝てなくてもいいわけだ。

で、もう30秒経ってんだよね、これが。

そんなわけで、保健体育勝負でムッツリーニに勝てるわけがなく、Bクラス戦は呆気なく幕を閉じた。

s
i
d
e

o
u
t

試召戦争編 第七問（後書き）

漣君ブチ切れの回。

とは言っても、そんなに怖くないという罫。

うちの子の特徴は、『殺気立たない』ことと『殺意に染まり切った瞳』。

相手は殺気でビビることはないし、眼光でビビることもない。

徹底的に、キレた事を秘匿する技ですね。

最後の辺り、なんと言う厨二病。

点数レベルは完全な自論ですので、あまり気にしないでください。

設定上、問題が出てくることが判明しましたので、漣君の点数を修正。

試召戦争編バカテスト 第五問

以下の問いに答えなさい。

『女性は()を迎えることで第二次性徴期になり、特有の体つきになり始める』

姫路瑞希の答え

『初潮』

教師のコメント
正解です。

吉井明久の答え

『明日』

教師のコメント
随分と急な話ですね。

土屋康太の答え

『初潮と呼ばれる生まれて初めての生理。医学用語では、生理のこ

とを月経、初潮のことを初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が1.5kgに達するころに初潮をみるものが多い為、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均12歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境、栄養状態などに影響される』

教師のコメント

詳し過ぎです。

御門漣の答え

『幼い頃は私にも関係があるものだと思っていた』

教師のコメント

コメントしづらい答えですね。

大丈夫です、と言いたいところですが。

御門君の幼少期は今よりは女性的な容姿だったと、姫路さんから聞いています。

木下秀吉の答え

『漣に「お前も私と同じ経験がありそうだな」と言われたのじゃが。どういう意味じゃろうか?』

教師のコメント

聞かないでください。

試召戦争編バカテスト 第五問（後書き）

久しぶりのバカテストです。

やっぱりネタを考えるのは難しいですね。

試召戦争編 第八問（前書き）

今回は少し短めです。

オリジナル性も高い、と言いたいですが、特にそうでもないです。

書き忘れていましたが、漣君は「Not鈍感」です。主人公にあるまじきスキルです。

一目惚れ云々のあたりは、リア充の友人がポツリと語ってくれたことを参考にしていきます。

試召戦争編 第八問

「明久、随分と思いついた行動に出たのう」

「うう……。痛いよう、痛いよう……」

手を押さえたまま蹲る明久に心配した声がかかる。

普通ならば私も行くべきなのだろうが、今はそれどころではない。ただじつと、根元に視線を固定している。

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組代表？」

「……」

座り込んだまま黙り込んでいる根元。

だが、だからといって容赦するつもりはない。

コイツは、よりもよって瑞希の恋を邪魔するような手段をとりやがったのだ。

赦せるはずがない。

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素敵な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」

雄二の発言にFとB、両クラスの生徒が騒ぎ出す。
歓喜を嘆きではなく、困惑で。

「落ち着け、皆。前にも言ったが、俺達の目標はAクラスだ。ここがゴールじゃない」

「うむ。確かに」

「ここはあくまでも通過点だ。だから、Bクラスが条件を呑めば解放してやるうかと思う」

その言葉でFクラスの連中は、どこか安心したように納得する。
Dクラス戦でも同じような事を言ったからな。
おそらく、雄二の性格ややり方を理解してきたのだろう。

「……条件は何だ」

「条件？ それはお前だよ、負け組代表さん」

「俺、だと？」

「ああ。お前には散々好き勝手やってもらったし、正直去年から目障りだったんだよな」

確かに、コイツの悪行は去年から噂になっていたな。
否定する材料はなく、否定する気もない。

私達Fクラスどころか、Bクラス内でも否定の声が聞こえない。それほど人望が失われるようなことを、コイツはやってきたのだから。

「そこで、お前らBクラスに特別チャンスだ」

特別チャンスなどどうでもいい。

本当ならば今すぐ斬り掛かりたいところであるが、雄二が視線で抑えてくる。

しかも秀吉が裾を掴んでいるうえに、康太と明久が私の後ろに控えている。

私が根元に手出しするのを完全に抑えているようだ。

それが正解だと、私自身も思う。

今の私が出れば流血沙汰は逃れないだろう。

じれったいが、感謝しておこう。

「Aクラスに行って、試召戦争の準備ができていると宣言して来い。そうすれば今回は設備については見逃してやってもいい。ただし、宣戦布告はするな。すると戦争は避けられないからな。あくまでも戦争の意思と準備があるだけで伝えるんだ」

「……………それだけでいいのか？」

根元が疑うような視線を向ける。

安心しろ。

その程度のことです、赦すはずがない。

「それだけで、よかつたんだよな。お前が妙な真似をしなかったら」
「どつという意味だ？」

「そのままの意味だよ。テメエのせいで俺の剣がキレてんだ。Aクラスに宣言するだけ済むわけねえだろうが」

チラリと、黙り込んでいる私に視線を向けながら根元に言い放つ。
そう、本来ならばそれだけで済んでいたのだがね。

「Bクラス代表がコレを着て言った通りに行動してくれたら見逃すことにしようと思う」

雄二が取り出す物は、秀吉が着ていた女子用の制服。
私が要求したのは根元の制服の中身であり、根元の制服そのものではないのだが。

中身だけをここで取り出してしまえば周りの人間にバレてしまう。
だからこそ、制服そのものを手に入れる必要があった。

まあ、雄二の個人的感情も混じっているのだろうか。

「ば、馬鹿なことを言うな！ この俺がそんなふざけたことを……」

当然の様に根元は拒否する。

私や秀吉のような反応の方が珍しいのだから、当然過ぎる反応だった。

だが、Bクラスの面々はそうでもないらしい。

『Bクラス生徒全員で必ず実行させよう!』

『任せて! 必ずやらせるから!』

『それだけで教室を守れるなら、やらない手はないな!』

人望の差、とでも言うのだろうか?

もしこれがFクラスだった場合、必ず躊躇ったはずだ。

この反応だけで根元に対するBクラス諸君の評価が窺える。

文句はない。寧ろ好都合。

抵抗する者がいたとしても捻じ伏せるだけだが、いないならいなくて手間が省ける。

「んじゃ、決定だな」

「くっ! よ、寄るな! 変態ぐふうっ!」

「とりあえず黙らせました」

「お、おう。ありがとう」

腹部をぶん殴って根元を黙らせたのは、驚くことにBクラスの男子生徒だった。

恐らく瞬時に見捨てたのだと思われる。

「なんと変わり身の早い……根元の人望の無さが窺える光景じゃのう」

「スツゴイ早さで見限ってたもんね」

「……ある意味哀れ」

呆れの視線が三つ、グツタリしている根元に突き刺さる。

もちろん、秀吉、明久、康太の視線だ。

いつも弄られている側の明久にもこんな視線を向けられるのだから、相当なものではないだろうか？

「では、着付けに移るとするか。明久、任せたぞ」

「了解っ」

倒れ伏している根元に明久が近寄り、制服を脱がしにかかる。

顔を歪めている辺り、男の服を脱がす感覚が嫌なのかもしれない。

「うっ、うっ……」

根元がうめき声をあげる。

ふむ。もうそろそろ眼が覚めるのかもしれん。

……。

これくらいは、許してもらおうかね。

秀吉の手を引き剥がして根元に近づく。

慌てて付いてくる秀吉と康太との距離を開くように、大股で、そして、

「ふっ！」

「ぐはっ！」

襟を掴んで体を持ち上げ、鳩尾に膝蹴りを叩き込んでやった。完全に沈黙した根元を放り捨て、雄二に眼を向ける。

「これくらいは構わんだろう？」

「まあ、いいだろう。別に死んでるわけじゃないしな」

「……俺はかなり焦った」

「ワシもじゃ。血を見るかと思っただぞ」

「いくらキレた私であっても、人前で流血沙汰は起こさんよ」

「……それは嘘」「……」

息の合ったコンビネーションで否定された。
なんと失礼な。

というか、こつという無駄な場面でコンビネーションを披露しないでほしい。

「溼く、女子用の制服の着せ方がわからないんだけど。手伝ってくれない?」

「ソイツに触りたくないから拒否する」

「えく。じゃあどうしようか?」

「私がやってあげるよ」

明久が困って首を捻っていると、Bクラスの女子生徒が名乗り出た。

「そう? 悪いね。それじゃ、折角だし可愛くしてあげて」

「それは無理。土台が腐ってるから」

「否定材料がないな。溼やら秀吉ならともかく」

「そうね。彼らなら可愛くできる自信があるわ」

雄二の言葉に肩を竦めながら返す女生徒。

そこで私を出さなくてもいいと思う。

というか、女装しても違和感が無いのは私自身が一番理解している。他人に「可愛い」「綺麗」と言われてもあまり嬉しくない。

「なぜワシまで含まれているのじゃ……」

似合うからです。

しかし、その言い方だと私は含まれて当然と聞こえるのだが……。

「はい、澁。根本君の制服」

「ん、感謝する」

差し出された制服を受け取り、Bクラスの教室を出た。

無論、雄二には許可を得て。

Fクラスを指しながらポケットを探ると、指先に当たった何かがかサリと音を立てる。

それを引っ張り出すと案の定、瑞希の恋文だった。

目的の物を手に入れた以上、この制服は不要だ。

どうするべきだろうか？

利用法が無いので、とりあえず刻んでゴミ箱に入れておくことにした。

私としてはゴミなのだから問題ない。

制服を刻んでゴミ箱にぶち込み、一息付いた。

やれやれ。一応、問題解決なわけだが。

今度は瑞希の恋愛を応援しなければならぬ。
全く、世話の焼ける妹（っぽい存在）だ。

「澪君！」

「ん？」

とりあえずカバンに入れておけばいいだろうと思ひ、瑞希のカバンを手に取ると同時に後ろから呼びかけられる。
振り向くと、言うまでもなく瑞希がそこにいた。

「瑞希か。どうした？」

涙で潤んでいる眼で私を見つめる瑞希。
今日は泣き顔ばかり見ている気がする。
このままでは瑞希の父親（おや）に怒られるのではなかるつかと思ひ始めた時、瑞希が私に突進してきた。
いや、正確には抱きついてきた、と言つべきか。

「っつと」

瑞希に衝撃が加わらないように、柔らかく受け止める。
フワリと、私と瑞希の長髪が一瞬絡み合い、すぐに解けた。

「あ、ありがとう、ごぞいます……！ わ、私、ずっと、どうしていいか、わかんなくて……！」

泣きながら告げてくる瑞希を抱きしめ、頭を撫でる。髪を梳くように、柔らかく。

瑞希が泣いていた時は常にこうやって慰めていたものだ。しばらくすると泣き止んだのか、肩の振るえと胸に感じる冷たさが消えた。

「す、すみません。抱きついたりなんかして……」

「構わんよ。いつものことだろう？」

「う、事実ですが……。直接言われるとなんか悔しいです」

グシグシと眼を擦りながらムツと頬を膨らませる。その姿が愛らしくて、つい苦笑がこぼれた。

微笑ではないあたりが私らしいと思わないでもない。フニフニした頬を軽く摘み、膨らみを解いてやる。

「さて、恋文は手元に戻った。あとは告白を成功させるだけだな」

「えー!? あ、そ、そうですねっ！」

「どうした？ 何を焦っている？」

「あ、焦ってなんかないですよっ！」

いや、その嘘には無理があるだろう。

顔を真っ赤にしてパタパタどころかバタバタ手を振る瑞希を見て、大丈夫だろうかと不安になる。

だがまあ、焦っていないと言うのだから、とりあえず鵜呑みにしておくことにしよう。

「本番では焦るなよ？」

「だ、だから焦ってなんかないですっ！」

「はいはい。ほら、もう雄二達のとこに戻るぞ」

「……あの、漣君」

教室を出る為に扉に手を掛けると、後ろから裾を掴まれる。

「なんだ？」

「漣君は、その……手紙で告白されると直接告白されるの、どっちがいいですか？」

「は？」

唐突過ぎるその質問に眼を丸くする。
そんなことを私に聞いてどうするつもりだろうか？ 告白の参考？
だとしても私と想い人の感性にズレがあった場合のことを考慮して
ないのだろうか。
いや、一応聞いておこう、というところかもしれない。
とりあえず『男』としての意見が聞きたいのだろう。

「そう、だな」

考えたことがなかった。

告白されたこと自体は何度かある。

だが、『どんな告白のされかた』がいいのかということは考えた事
はない。

ただ情性的に受けてきただけだ。

ちなみに、告白は全て断っている。

理由？ 一目惚れしました、なんて告白されても困るだろう？

一目惚れとは文字通り、一目で惚れたということ。つまり、容姿で
決定した恋だ。

ということは、求められているのは内面ではなく外見。

「外見が良いから付き合っている」なんて、悲しすぎると思わない
か？

そんなことは置いといて。

今は“字”による告白がいいか“声”による告白がいいか、という
ことだったな。

「私は、直接告白される方が嬉しいかもしれん」

「そうなんですか？」

「声による告白の方が感情をしっかりと読み取ることができるからな」

字に感情が籠っていないのかと言われれば、そうではないと思う。しっかりと籠っているのだろうが、やはり声の方がわかりやすい。

「そうですね。直接告白された方が嬉しいんですね？」

「私はな」

「わかりました」

「なにが？」

「澪君、その言葉、ちゃんと覚えておいてくださいね」

「はあ、別に構わんが。覚えておいてどうする？」

「それは……その時のお楽しみ、です」

パチリとウィンクを一つ寄越し、瑞希は教室を出て行った。

……。今のやりとり、猛烈な違和感がある。

そしてその違和感を解いていくと辿り着く仮定。
……。

「馬鹿馬鹿しい」

頭を振り、その考えを振り払う。

なんとという自惚れ。

図々しいにも程がある仮定だ。

そんな考えに行き着いてしまったことに自己嫌悪しつつ、教室を出ることにした。

『こ、この服、ヤケにスカートが短いぞ！』

『いいからキリキリ歩け』

『さ、坂本め！ よくも俺にこんなことを』

『無駄口を叩くな！ これから撮影会もあるから時間がないんだぞ』
『！』

『き、聞いてないぞ！』

『やかましい！ 漣や秀吉ならこれくらい黙ってやるぞ！』

『あんな性別を無視したような奴等と一緒にするなっ！』

……。

やれやれ。

とりあえず、この自己嫌悪感をストレスに変換することにした。
そして、根元を脅す事で発散しようと思う。

別に悪いことでは、ないだろう？

試召戦争編 第八問（後書き）

最近の失敗談

最近、上手く執筆が進まないのが気分転換に「リリカルなのは」の二次小説をノートにサラサラっと適当に書いてみました。

主人公設定

- ・管理局が確認さえ取れていない世界から逃亡してきた
- ・ユニゾン型デバイス持ち
- ・魔力は測定不能（測定できない程高いのではなく、文字通り測定が不可能）
- ・超攻撃型。防御は薄い。

このへんは良いと思います。

そこまで変な設定ではないと思いますし。

問題は次なんですよね。

- ・主人公は「闇」の一族の末裔、「影」の一族
- ・デバイスの本質は闇。闇であるが故に固定された形を持たず、指輪にも剣にも銃にもなれる

はい、アウトです。

デバイスがチートです。

しかも主人公がよくわからんことになっています。とにかく次です。

- ・出身世界「レギオス」
- ・治安は最悪。常に戦争を行っている

- ・主人公は体を弄られた殺戮兵器
- ・右腕が義手（武器）

もうこの辺で馬鹿馬鹿しくなって、シャープンを放り捨てました。ハーレム前提ですのでアリシアさんは復活しますが、何故かA・Sの終わりまでカプセル入りのままでした。

需要があまりにもなさそうなので、ぐしゃぐしゃにしてポイしてやりましたよ。

試召戦争編 第九問（前書き）

さんざん引つ張つてきた霧島さんのフラグについてですが。

本家バカテスを読み直して、「あ、無理だな」って思いました。そもそも伏線があまりにも無理矢理だったし。

あんなんじゃない、なんというか。

霧島さんが安っぽい女に成り下がってしまいそうで……。

というか、ヤンデレ気質のある彼女を交えてハーレムって。かなり性格を変えないと無理なわけで。

悔しいことに、俺にはそんな実力はないんです。

むしろ、あの霧島さんだからこそ可愛いわけであって。俺が弄ったら可愛さなんてなくなっちゃうような気がして。

そんな訳で。

霧島さんフラグを期待していた方々。

本当にすみません！

霧島さんは原作通り、雄二くんとかくっ付けてもらいます！

澪は二人のアドバイザー的な立ち位置についてももらいますよ。

あ、一応伏線は回収します。

もっとも、伏線自体が無理矢理なので、回収も強引ですけど。

文才なくて申し訳ないです。

試召戦争編 第九問

あの後、壁を壊した件で明久が呼び出された。

私が頼み込んだ結果がコレなので明久1人に説教を受けさせるのは気が引ける。

というわけで、明久の隣で私も指導を受けた。

2人で心身ともに疲れ果てるまで酷使され、より友情が強まった気がする。

そして、点数補充のテストをしつかり受けた二日後の朝。

あとはAクラス戦を残すだけとなった我々は、もうじきお別れになる(予定) Fクラスで最後の作戦会議を行っていた。

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があったることだ。感謝している」

雄二が珍しく素直に礼を言った。

その光景に、明久を筆頭に全員が啞然としている。

明久が恐々こたこたと口を開いた。

「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ?」

「ああ。自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」

脳裏を掠めるのはこれまでの戦争。

成績最低のクラスがここまでのし上がって来たのだ。
たしかに、クラスメイト達に感謝せざるを得ないだろう。

「ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師どもに突きつけるんだ！」

『おおーっ！』

『そうだーっ！』

『勉強だけじゃねえんだーっ！』

最後の戦争を前に全員の心が一つになっている、と言えはいいのだろうか。

いい兆候だ。思わず口元が歪む。

「皆ありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは一騎打ちで決着をつけたいと考えている」

私は昼食時に聞いたのでそうでもないが、クラスの連中はそうとう驚いたようだ。

教室中にざわめきが広がる。

当然と言えば当然の反応だろう。

FクラスがAクラスに一騎打ち。

自殺行為にしか思えんよな。

『どづいうことだ？』

『誰と誰が一騎打ちをするんだ？』

『それで本当に勝てるのか？』

「落ち着いてくれ。それを今から説明する」

混乱を始めたクラスメイトを、雄二が机を叩いて静まらせる。

「やるのは当然、俺と翔子だ」

口元が、限界まで歪んだ。

本来ならば、雄二より勝率の高い私や瑞希が出るべきだと進言するべきなのだろう。

だが私はそれをしなかった。

Fクラス代表さかもとゆうじVS Aクラス代表きりしましゅうじ。

戦争を締めるには、これ以上似合う配役はあるまいよ。

しかし、疑問もある。

霧島は現在学年1位の成績を収める女だ。

つまり、瑞希より上位に君臨する聖女。

瑞希にも届かない成績の雄二が、どうやってその聖女に勝利するつもりなのだろうか。

「馬鹿の雄二が勝てるわけなあっ!？」

明久の叫びに反応した雄二がカッターを投げつける。

投げられたカッターは明久の頬をかすめ、壁に突き刺さった。

「次は耳だ」

相も変わらず過激なことをする奴だ。

いや、私は人の事を言えんか。

「まあ、明久の言うとおり確かに翔子は強い。まともにはやりあえば勝ち目はないかもしれぬ」

認めるのかよ。

だったらカッターを投げる必要なんてなかっただろうに。

ふと、ちよっとした違和感に気付く。

「ん？ 翔子？」

先程から雄二は霧島のことを名前で呼んでいる。

つまり、それなりの仲、ということなのだろうか？

「だが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだっただろう？　まともにやりあえば俺たちに勝ち目はなかった」

そこまで言って、首を捻っている私に眼を向けた。

「Bクラス戦で濶の戦闘を見た奴、忘れたとは言わせんぞ。戦い方一つ工夫するだけで、実力差なんて埋めることもできる」

『あの英語のときか？』

『まあたしかに凄かったが』

「見られていたのか……」

いや、ほとんどがあそこに集まっていたのだから見られない方がおかしいのだが。
なんと言つか、やりづらい。

「今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺たちの勝ち揺るがない」

今までの戦争の指揮を取っていた男の言葉。
普通に考えれば無茶な方法だが、このクラスに雄二の言葉を否定する者はいない。

坂本雄二を信頼しているから。

「俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる」

『『『おおおーっ！！』』』

雄二へ全てを託す覚悟を持った男達の叫び。

雄二に反対する者はおらず、士気は上々。

問題は一切無い。

しかし、気になるところが一つ。

「雄二、霧島とお前が一騎打ちするとは聞いたが。具体的にはどうするつもりなんだ？」

「ああ、それは言ってなかったか？ 一騎打ちではフィールドを限定するつもりだ」

「フィールド？ 何の教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ」

「日本史、ねえ……」

仮に、霧島が日本史を苦手としているとしよう。

だが、それでも勝率は薄い。

雄二が日本史を得意をしているという話は聞いたことがない、とい

うのも問題だが。

相手が霧島である時点でかなり危ういのだ。

どうするつもりだ、^{マスター}主よ？

「ただし、内容は限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あり、召喚獣ではなく純粋な点数勝負とする」

……。

つまり、満点を前提とした勝負、ということだろうか？

そうすると、いかに注意力を保ち続けられるかが勝敗の分かれ目となるわけだが。

正直に言おう。そんなことを考えているならば、霧島には勝てない。彼女は文句無しの人材だ。

小学生レベルの問題程度で、注意力が消耗されることはありえない。何を考えている？

「でも、同点だったら、きつと延長戦だよ？ そうなったら問題のレベルも上げられちゃうだろうし、ブランクのある雄二には厳しくない？」

「確かに明久の言うとおりじゃ」

明久の言うように、かなり厳しい勝負になるだろう。

雄二がそんな策をとるのはらしくない。

「私も同感だ。雄二、何を考えている？」

貫くような私の視線を受け、雄二は唇を歪める。

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？ いくらなんでも、そこまで運に頼り切ったやり方を作戦などと言うものか」

「なにか秘策があるのか？」

「霧島さんの集中力を乱す方法を知っているとか？」

「いいや。アイツなら集中なんてしていなくとも、小学生レベルのテスト程度なら何の問題もないだろう」

まあ、そうだろうな。

しかも教師の監督がある中での妨害だ。

あまり効くとは思えない。

しかし雄二。

先程から霧島と仲が良いことを示すような言葉が続いているのだが、突っ込まないほうがいいのか？

「それで？ 結局は何が言いたいんだ？」

「うむ、雄二。あまりもつたいぶるでない。そろそろタネを明かしても良いじゃろう？」

一番肝心なことを聞いてないない。
クラスの連中も気になるらしく、雄二に視線を向けていた。

「ああ、すまない。つい前置きが長くなった」

頭を振り、口を開く。

「俺がこのやり方を選った理由は一つ。ある問題が出れば、アイツは確実に間違えると知っているからだ」

ある問題？

それも気になるが。

その言い方、お前と霧島はかなり親しい仲だと言質は取れたぞ。

「その問題は 『大化の改新』」

「大化の改新？ 誰が何をしたのか説明しろ、とか？ そんなの小学生レベルの問題で出てくるかな？」

「『大化の改新』自体は出るだろうが、そこまで詳しい事となるとな。受験校でなければなかなか出ない筈だが」

「そんな掘り下げた問題じゃないさ。もっと単純な問いだ」

「単純というと 何年に起きた、とかかのう？」

「ビンゴだ秀吉。お前の言うとおり、その年号を問う問題が出たら、俺たちの勝ちだ」

大化の改新が起きた年号？

そんな基礎的な問題を、あの霧島が間違えるのだろうか……。

明久でさえわかるはずなのだ。

ちなみに答えは645年。

『無事故の改新』⁶⁴⁵というのが基本的な語呂合わせだ。
……。

「明久、大化の改新は645年だが。まさか間違っただけでないだろうか？」

「……」

「おい明久。お前、まさか本当に？」

「お願い、遷……僕を……見ないで」

「……ちなみに、何年だと思ったんだ？」

「『鳴くよウグイス、大化の改新』⁷⁹⁴」

「……ハア……」

「待って遷！ 溜め息つきながらナイフを研がないでっ！」

コイツ……。

なんてぶっ飛んだ間違い方をしているんだろうか。

どれだけバカなんだ。

やはり勉強させるべきだな、これは。

ああ、ちなみに『^{7,9,4}鳴くよウグイス』の後に続くのは『平安京』だからな。

よく覚えておけ。

「翔子は間違える。これは確実だ。そうしたら俺たちの勝ち。晴れてこの教室とおさらばって寸法だ」

なるほどね。

しかし、そこまで霧島のことを知っているとなると。

これはなかなか深い関係なのかもしれないな。

「あの、坂本君」

「ん？ なんだ姫路」

「霧島さんとは、その……仲が良いんですか？」

まあ、普通気が付くよな。

さつきから『アイツ』や『翔子』と呼んでいることから想像するのは簡単だ。

霧島と雄二の関係、なかなか好奇心が撥られることじゃないか。あまりに良い仲だとしたらFクラスが黙っていないだろうがね。

「ああ。アイツとは幼なじみだ」

「総員、狙ええっ！」

「なっ！？ なぜ明久の号令で皆が急に上履きを構える！？」

「普通はそうなるよな、飢えているコイツ達なら。愛飢え男だし」

「漣！ 上手いこと言ってる暇があったらコイツら止めろよっ！」

「黙れ、男の敵！ Aクラスの前にキサマを殺す！」

「俺が一体何をしたと！？ 漣、助けてくれ！」

「いや、そうなるのもわからんでもないからな。今回は引っ込んでおこっ」

「こんな時にお得意の捻くれた発想を披露すな！」

男子生徒の意見は言葉無くとも満場一致で『コイツ殺す』。このクラス、妙なところで団結力が高い。

「遺言はそれだけか？ ……待つんだ須川君。靴下はまだ早い。それは押さえつけた後で口に押し込むものだ」

「了解です隊長」

ああ、隊長は明久なのか。

コイツも頭脳以外では意外と高スペックだから。
変なカリスマ性とか持ち合わせていたりする。

「あの、澪君」

「ん？ 何だ、瑞希」

「さつき、『そうなるのもわからんでもない』って……」

「ああ、言ったな」

「霧島さんみたいな女の子が好みなんですか？」

「いや、好みと言うよりは……。アレだけの美少女だ。オマケに性格が良いとくれば、嫌う男のほうに珍しいだろうな」

「……澪？ ちょっとO H A N A S H Iがしたいのじゃが」

「痛いから抓るな秀吉。あとお話という単語が変だった気がするんだけど……」

「……」

「瑞希、お前は何を望んで攻撃態勢を取っているんだ？ 私に勝て

るでも思っているのか？」

「はい、思ってます」

瑞希の声を聴いて、クラスの騒ぎが納まった。

視線は全て瑞希に。

その視線が暗に語っているのは、ありえない、という一単語。

「お、おい姫路。漣に勝てるって、本当か？」

自分を囲んでいた集団を抜け出し、信じられないと質問をする雄二。そして瑞希は。

「はい。だって漣君は」

「ふん。戦闘経験がないお前に私が負けるなど、雄二が小学生に泣かされるくらいありえな」

「私に傷を付けることなんて出来ませんから」

「自らの肉体を人質に取るだ！？　なんて卑怯な！」

勝率が低いなんてもんじゃないつ。フルボッココース一直線。勝率が無いじゃないか！

私にどうしろとっ！？

「ほら皆、話が逸れてるわよ」

パンツ、と手を叩いて軌道修正を施したのは島田だった。
なぜだろうか？ 今この時ばかりは、お前が天使に見える。
いつも明久にエグイことをしている鬼なのに。

「そうだった。今は姫路さんが溼に勝てるかじゃなくて、雄二をどう始末するかが問題だったね」

『そうだったな。御門に1人ぐらい勝てない相手がいるなんて、何も問題ないからな』

『よし！ 全員、再び構えろっ！ 攻撃の準備だ！』

「ちよつと待てっ！ その軌道修正はおかしいぞお前ら！」

ああ、どんどん本題から逸れていく。

島田なんて額に手を当てて溜め息をついているじゃないか。

すまん島田。今度、何か奢るから。

いや、恋愛相談、なんていいかもしれん。

「まあまあ。落ち着くんじゃ皆の衆」

再び騒ぎ始めた集団を、秀吉がパンパンと手を叩いて落ち着かせる。うん、正しい行為だがね。さっきまではお前も落ち着けと言われる側の人間だったこと、忘れていないだろうな？

「む。秀吉は雄二が憎くないの？」

「冷静になって考えてみるが良い。相手はあの霧島翔子じゃぞ？男である雄二に興味があるとは思えんじやろうが」

……そういえば、霧島は同性愛者である、という説があったな。なんでも告白を全て断っているからだとか。

その法則だと私も同性愛者？

いや、そんなことはどうでもよくて。告白を断っているから同性愛者だと思われるらしい。しかし、さすがに軽率だと思うのだがね。疑問を解いていけば自ずと別の仮定に辿り着くはずなのだが。

怖いくらいに一途な女。

同性愛より、こちらの仮定のほうが可能性は高い……はず。

「むしろ、興味があるとすれば……」

「……そうだね」

考えている間にも進んだ会話で、Fクラスの視線は1人に集中した。私の隣、つまり瑞希である。

「な、なんですか？　もしかして私、何かしましたか？」

なにもしてないよ、瑞希。

コイツ等が馬鹿で、馬鹿な方向にぶっ飛んだ結論に辿り着いただけで。

「とにかく、俺と翔子は幼なじみで、小さい頃に間違えて嘘を教えていたんだ」

なかなか酷いことをするじゃないか。

「アイツは一度覚えたことは忘れない。だから今、学年トップの座にいる」

一度覚えたことは忘れないほど頭が良い。だが、たからこそ今回はそれが仇になる。

「俺はそれを利用してアイツに勝つ。そうしたら俺たちの机は」

『『システムデスクだ！』』』

・
・
・
・
・
・
・

「一騎打ち？」

「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎打ちを申し込む」

毎回恒例の宣戦布告。

今回は明久だけでなく、代表である雄二を筆頭に、私、瑞希、秀吉と明久、康太。

と、まあ首脳陣が集って布告に来ている。

毎回こうしてくれたら僕の制服は繕いだらけにならなかったのでは？
なんて明久の咳きは無視だ。

「うーん、何が狙いなのか？」

現在雄二と交渉のテーブルについているのは木下優子。
秀吉と瓜二つの容姿を持つ、秀吉の双子の姉だ。
隣で悶絶している明久の思考が読める。

「もちろん俺達Fクラスの勝利が狙いだ」

優子が訝しむのも無理はない。

最下層の成績の集団であるFクラスが、最上層の成績の集団、その
頂点である霧島に一騎打ちを挑むのだから。
なにかあると疑うのが普通だろう。

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることができるのはありがたい
けどね、だからと言ってわざわざリスクを冒す必要も無いかな」

「賢明だな」

Fクラスが勝てばAクラスの教室を強奪できるというメリットがあ
る。

しかし、Aクラスは勝ったとしても、得るものは何もない。
つまりAクラスにとってはデメリットしかないわけだ。こういう反
応は仕方ない。

が、私達はただ布告しに来ただけではない。交渉も兼ねているのだ。
ちらりと向けられた視線に応え、口を動かす。

「ところで優子、Cクラスはどうだった？」

「Cクラス？ 時間は取られたけど、それだけだったよ？ 何の問題もなし」

秀吉の挑発に乗り、昨日Aクラスに挑んだCクラス。

半日であっさりと捻じ伏せられ、今はDクラスと同等の設備で授業をしているらしい。

「そうかい。なら、Bクラスと戦争する気はあるか？」

「Bクラスって……、昨日来てたあの……」

優子の顔色が悪い。

心なし、少し震えているような気もする。

あんな地獄絵図を見せられたのだから当然か。

「ああ。アレが代表をやっているクラスだ。幸い宣戦布告はまだされていらないようだ、さてさて。どうなることやら」

「でも、BクラスはFクラスと戦争したから、三か月の準備期間を取らない限り試召戦争はできないはずだよね？」

戦争に敗北したクラスは三ヶ月の準備期間を経ない限り、自ら戦争を申し込むことは禁止されている。

これは敗北したクラスがすぐに再戦を申し込み、試召戦争が泥沼化

する可能性を防ぐ役目をもつ。

試召戦争のルールの一つだ。

だがね、優子。事実と虚実は、書き換えることもできるものだよ。

「知ってるだろ？ 実情はどうあれ、対外にはあの戦争は『和平交渉にて終結』ってなっているってことを。規約にはなんの問題もない。…… Bクラスだけじゃなくて、Dクラスもな」

設備を入れ替えなかったからこそ使用できる裏技とも言わべき方法。設備を犠牲に、Aクラスに勝つ可能性だけを引き摺り上げた。ある意味究極の禁じ手。

「漣、これって脅し？」

「いや、お願いだ。とでも言っただけなのかい？」

「ふん。その言い方、脅しって認めるんだ」

「当然だろう」

脅し以外の何に聞こえる。

「うーん……わかったよ。何を企んでいるか知らないけど、代表が負けるなんてありえないからね。その提案を受けるよ」

「ほう、いいのか？」

「だって、あんな格好した代表のいるクラスと戦争なんて嫌だもん……」

「……かなり引いただろ？」

「引いたなんてもんじゃないわ。軽くトラウマよ」

ブルツ、と身震いしながら言う。

顔が青褪めているあたり、かなりきつかったのだろう。
私ですら嫌悪感を抱いたからな。

「でも、こっちからも提案。代表同士の一騎打ちじゃなくて、そうだね、お互い五人ずつ選んで、一騎打ち五回で三回勝ったほうの勝ち、っていうのなら受けてもいいよ」

「う……」

うめくのは明久。

おそらく、能天気な女だと思っていたらバツチリ警戒されていたことに気が付いたのかもしれない。

「なるほど。こっちから姫路か漣が出てくる可能性を警戒しているんだな？」

「うん。多分大丈夫だと思うけど、代表が調子悪くて姫路さんか漣が絶好調だったら、問題次第では万が一があるかもしれないし」

瑞希や私を見下しているかのような物言い。

だが、優子の言うことも的外れというわけでもない。

それほどまでに、霧島は天才なのだ。

……。

私も、今のテストのやり方を変えたら霧島を追い越せるのだろうか
ね。

今でも目立っているのだから、これ以上目立つのは勘弁してほしい。

「安心してくれ。うちからは俺がでる」

「無理だよ。その言葉を鵜呑みにはできないよ」

そう、コレは戦争。

腹の探りあいから始まり、戦略、力、人数で捻じ伏せる。

単なる競争ではありえない、知的戦略が重要になる。

負ければ大損、勝てば千金。

究極の頭脳ゲームと言ってもいいのが、戦争だ。

「そうか。それなら、その条件をのんでもいい」

雄二？

その方法でいくと、我々の勝率はかなり下がるのだが……。

大丈夫なのか？

「ホント？ うれしいな」

「けど、勝負する内容はこちらで決めさせて貰う、そのくらいのハ
ンデはあってもいいはずだ」

ああ、なるほど。そういう方向で交渉を進める気が。

確かに、勝つためには科目の選択権が必須だ。

一騎打ちのうえ、さらに科目選択までさせる。

そんなに虫の良い話を受けてくれるはずがない。

だからこそその五人制。

選択権を奪取するためと、あくまでも一騎打ちをするための。

「え？ うーん……」

さすがに悩むか。

クラスを代表しての交渉。慎重になるのも無理はない。

「……………受けてもいい」

「うわっ！」

突然現れた霧島に驚いたのか、明久が叫び声を上げる。
私はそっこのほうに驚いた。
声がデカイ、バカ。

「……雄二の提案を受けてもいい」

静かな、そして凜とした声。

ここまで気配を殺せるとは思ってもしなかった。
康太クラスじゃないか？ 気配を消すの。

「あれ？ 代表。いいの？」

「……その代わりに、条件がある」

「条件？」

「……うん」

一つ頷き、じつくりと値踏みするかのように瑞希を観察する。
次いで私に一瞬視線を寄越し、雄二に戻す。
そして、そのまま言い放った。

「……負けた方は何でも一つ言うことを聞く」

「……っ！！（カチャカチャ）」

「ムツツリーニ、まだ撮影の準備は早いよ！　というか、負ける気満々じゃないか！」

あー。

勘違いバカ二人が霧島の発言で騒いでいる。
きつと瑞希と霧島がなんとかなってるだろうな、アイツ等の脳内は私には理解できない領域だが。
いや、だからといって嫌悪感はないけど。

「じゃ、ごうしよう？　勝負内容は五つの内三つそっちに決めさせてあげる。二つはうちで決めさせて？」

これ以上いけそうか？

無理だな、これが限界の妥協点だろう。深追いしないほうがいい。

雄二から送られたアイコンタクトに、同じくアイコンタクトで返す。
……無駄な能力付いたなあ。

「交渉成立だな」

「ゆ、雄二！　姫路さんが了承してないじゃないか！　勝手に決めて姫路さんに問題があったら澁が怒るってば！」

「心配すんな。絶対に姫路に迷惑はかけない」

やけに自身に満ち溢れた声。

余程勝利の自身があるのか。それとも要求されることを見抜いているのか。

どちらだろっねえ。

「……勝負はいつ？」

「そうだな。十時からでいいか？」

「……わかった」

霧島の雰囲気は掴めない。

話し方は康太に似ているのだが……。

ふむ、困ったな。

これでは人心掌握ができない。

「よし、交渉成立だ。一旦教室に戻るぞ」

「そうだね。皆にも報告しなくちゃいけないからね」

交渉を終了し、ゾロゾロとAクラスを後にする列に加わろうとしたとき。

「漣、ちょっといい？」

優子に呼び止められた。

振り向いて答える。

「どうした？」

「えっとさ。さっきの負けた方は何でも一つ言うことを聞くってやつ」

「ああ、あれがどうした？」

「漣にも有効だよな？」

さてさて、コイツは何を企んでいるのかね。
まあ『負けた方が』であり『負けた方の代表が』でない以上は私も有効のはずだ。

「有効だろうな。誰にっていう限定がなかったから」

「そう……」

「で、それが？」

「うっん、なんでもない。ありがとね」

優子は少し上機嫌に、私に手を振る。
とりあえず私は教室に戻る事にした。

負けたときが怖いな、と考えながら。

・
・
・
・
・
・
・

「では、両名とも準備はよいですか？」

今日のAクラス戦の立会人は、Aクラス担任兼学年主任の高橋教諭。
外見からして『この人、頭良い』というオーラを出している女性だ。
ここ数日の戦争で何度も世話になっている。

「ああ」

「……問題ない」

一騎打ちの会場となるのはAクラスの教室。
Fクラスの教室は畳が腐っているうえに狭いから。
決戦の場としては好ましくない。

「それでは一人目の方、どうぞ」

「アタシから行くよっ」

相手は秀吉の姉、木下優子。
対してコチラは、

「ワシが行こう」

弟、木下秀吉。

姉弟対決だ。

肉親であるが故に、お互いが苦手とするものや集中力の乱し方も知
っているはず。

雄二のように、相手の腹を探ることが大前提となる戦いだな。

「ところでさ、秀吉」

「なんじゃ？ 姉上」

「Cクラスの小山さんって知ってる？」

「はて、誰じゃ？」

おや？ 優子、その問題は謝って解決したのでは……。

「じゃーいいや。その代わりに、ちょっとこっちに来てくれる？」

「うん？ ワシを廊下に連れ出してどうするつもりじゃ姉上？」

秀吉は手招きする優子しんがみの後に続いていき、廊下に出た。
すまん、秀吉。

『姉上、勝負は どうしてワシの腕を掴む？』

『アンタ、Cクラスで何してくれたのかしら？』

『む、その件は遷と電話で謝ったじゃろ？』

『うん、聞いた。謝ってもらったよ。でもね、どうしてアタシがCクラスの人達を豚呼ばわりしていることになっているのかなあと思つて。聞いてないんだけど？』

『はっはっはっ。それはじゃな、姉上の本性をワシなりに推測して
あ、姉上っ！ ちがっ……！ その関節はそっちには曲がらな
っ……！』

ガラガラ

優子がハンカチで返り血を拭いながら帰ってきた。

「秀吉は急用ができたから帰るってさっ。代わりに人を出してくれ
る？」

「そ、そうだな……漣、いけるか？」

「無理。と言いたいところだが、まあ頑張ってみる」

「おう、頼む」

引き攣った笑顔を見せ合った会話。

優子の微笑が半端無く怖かったことが原因だ。

マジ怖い。

私がここまで怯えたのはいつ以来だろうか？ 秀吉の無事だろうか？

そんなことを適当に考えながら前にでると、高橋女史が少し不満げな顔でタイピングを終えたパソコンを見ていた。

興味が出たので、ちょっと覗いてみる。

『 Aクラス 木下優子 VS Fクラス 木下秀吉

生命活動 WIN

DEAD

』

意外と茶目っ気のある女性なのかもしれない……。

優子の微笑で引き曇った顔を、さらに引き曇らせながら彼女の前に移動した。

「澪が相手なのね」

「そういうことになるな。で、教科だが」

「英語よ」

「……だよな」

当然の要求に肩を竦める。

だが、これを受け入れると私が圧倒的に不利になってしまう。それは避けたい。

よって私が求める科目は英語以外となるわけだが。

勿論、優子がそれを呑んでくれるはずがない。

っというわけで。

「選択権をどちらが取るか。コイントスで決めようじゃないか」

「……わかったわ。どうせそうでもしないと決まらないし」

彼女が頷いたのを確認し、コインを一枚取り出す。

イカサマをしていないと証明するため、一度両の掌を優子に見せた。ピンツ、とコインを弾く。

上空に舞うコインを追うように、優子の視線も上に。

上昇の限界を向かえて一瞬停止し、落下を開始した。
片手の甲で止め、もう片方の手で隠して「裏か表か？」と聞くのが
普通だろう。

だが、御門家ではちよつと違う。
落下するコインを、腕をクロスさせて待ち受ける。
丁度良い地点に到達した瞬間。

「……っ！」

両腕を振るうようにして広げた。
そして両腕を前に突き出し、

「さあ、優子。left or right？」

右か左か。

これが御門家で使用するコイントスだ。
この方法は意外と使われないらしい。

御門以外でこのコイントスを利用している人物は1人しか知らない。

「そういうコイントスもあるんだ」

「御門ではこれが普通なんだがね。選べ、優子」

「……どうせ運任せ。悩んでも仕方ないもんね。じゃあ」

ピツと指を突きつけ、彼女が選んだのは。

「right！」
みぎ

「……当たりだ」

右手を開くとコインがあつた。

やれやれ。これで科目は英語で決定か。
満足気な表情で微笑する優子を見ながら、溜め息をついた。
仕方ない。

「じゃ、科目は英語で。いいよね？」

「ああ、了解した」

私の了承と共に展開されるフィールド。

「「試獣サモン召喚っ！！」」

紡ぐ言葉は相棒を呼び出す言霊。

□ Aクラス

木下優子

VS

Fクラス

御門漣

英語

397点

VS

78点

□

圧倒的な点数差。

しかも今回は『負けなければ良かった』Bクラスの時と違い、『勝たなければならぬ』。無理難題だ。

しかし。

そんな逆境に遭遇してこそ燃えるのが。

我等御門の子孫なり。

なんてな。

「さあ、処刑の時間だ」

「言ってなさい。全力で捻り潰してあげる」

瞬時に動き出す優子の召喚獣は正しく弾丸。

動きの鈍いジャックでは回避不可能だ。

だが、相手の行動を予測して既に動いていれば別の話。左足を後ろに引き、半身を開く。

打突の姿勢で突っ込んでいた優子の召喚獣はジャックと擦れ違つように通り過ぎた。

ホルスターからリボルバーを抜き、即時発砲。

ガウンッ ガウンッ

大口径特有の重い音を鳴らし、弾丸を射出する。優子の召喚獣はその場でしゃがみ、回避した。

「相変わらず、戦うのが上手いのねっ！」

「私とて負けるわけにはいかないのでね」

銃による攻撃を避けるためか、蛇行で突っ込んで来る優子の召喚獣を刀で向かい受ける。

重要なのは受け止めずに流すこと。

受け止めればこの刀は両断される。

相手の動きに合わせて刀を横に倒し、切っ先が自分の斜め後ろになるように構えた。

振り下ろされた武器は刀の上を滑るようにして体の外側に流れる。

直後、息をつく暇も与えずに放つのは裏拳。

「　　っ!？」

刀の柄を握っていた右手を、体の捻りを戻す力を上乘せして顔面に叩きつけてやった。

「さすが戦神ってどこかしら？」

「コレくらい出来なくてわね。御門では必須スキルだよ」

「そんな家族、絶対にヤダわ」

優子の暴言に肩を竦めてやる。

『うおーっ！ 御門すげえー！！』

『あの点数でAクラスに一撃入れやがった！？』

『そのままやつちまえ兄貴！』

「……随分と人気者なのね？」

「私の武に惚れこんだらしいぞ？」

「あつそ」

Fクラスの馬鹿達による声援に、二人して苦笑した。
チラリと、点を見る。

『 Aクラス	木下優子	VS	Fクラス	御門漣
英語	385点	VS	78点	

』

参ったな。

アレだけ綺麗に決まったのに12点しか減ってない。相手の防御力が高すぎるのも問題であり、ジャックの攻撃力が低すぎるのも問題だからだろうが。とりあえず、

「難儀なもんだ」

やはり、300点以上の点数差は技術で縮める以前の問題か。
ジャック
召喚獣の動きが鈍いから。Aクラス相手ではまともに相手できない。

「今度は決めるわよ」

「ハンデをくれたっていいとは思わんか？」

「嫌よ。教室がかかってるんですもの」

「そうかい」

至近距離から放たれる豪速の蹴り。

咄嗟に刀による防御行動を取るが、無意味だった。ベキリと刀は折れ、そのまま腹に足がめり込む。

その衝撃を物語るようにジャックの体はあっさりと吹き飛んだ。

□ Aクラス

木下優子

VS

Fクラス

御門漣

英語

385点

VS

0点

『

「私の勝ちよ、遷」

「そのようだな。まあ、Aクラス相手に一撃与えられたのだから良しとしようかね」

「自慢にしとく？」

「こんな無様な結果で自慢にしたら御門の名が泣く」

御門とはつまり……いや、この話はまた今度にしよう。

とは言っても、そんなに難しい話ではないのだが。

お互いの相棒が消滅したのを見届けた後、雄二の隣へ戻った。

「すまん、雄二。負けてしまった」

まずは謝罪。

当然の行動ではなからうか。

「いや、あの点数差であそこまで戦えたんだ。充分さ」

「そう言ってもらえるとありがたい」

雄二の激励（？）に苦笑しながら、私は次の試合を見守ることにした。

「では、次の方どうぞ」

「私が出ます」

Aクラスから佐藤美穂。

対するFクラスは、

「よし。頼んだぞ、明久」

「え！？ 僕！？」

明久か。

まあFクラス内では良い選択の一つなのだろうが。

「大丈夫だ。俺はお前を信じている」

「ふう……。やれやれ、僕に本気を出せってこと？」

「ああ。もう隠さなくてもいいだろう。この場にいる全員に、お前の本気を見せてやれ」

……こいつ等は何を言っているのだろうか？

『おい、吉井って実は凄いヤツなのか？』

『いや、そんな話は聞いたことないが』

『いつものジョークだろ？』

私もそう思う。

だってコイツは、多分

「吉井君、でしたか？ あなた、まさか……」

「あれ？ 気付いた？ ご名答。今までの僕は全然本気なんて出し
ちやあいない」

「それじゃ、あなたは……！」

「そうさ。君の想像通りだよ。今まで隠してきたことだけれど、実
は僕」

左手で書いたって言いたいただけだから。

「左利きなんだ」

『Aクラス 佐藤美穂 VS Fクラス 吉井明久
物理 389点 VS 62点』

バカだな、相変わらず。

「このバカ！ テストの点数に利き腕は関係ないでしょうが！」

「み、美波！ フィードバックで痛んでるのに、更に殴るのは勘弁してー！」

そして始まる痴話喧嘩。

いや、明久が島田の好意に気が付いてないから、本当のただの喧嘩か。

「よし。勝負はここからだ」

「ちょっと待った雄二！ アンタ僕を全然信頼してなかったでしょう！」

「信頼？ 何ソレ？ 食えんの？」

実際、点数では明久を信用できる要素がないからな。
擁護もできんよ。

学力以外では良い男なのに。

本当に、困った奴だ。

「では、三人目の方どうぞ」

「……（スック）」

高橋女史の指示で立ち上がるのは康太。

ということはつまり、科目は保健体育狙い。というかそれしか出来ない。

寡黙なる性識者と呼ばれる彼は、保健体育の成績は学年トップだ。

しかし、それ以外の科目だと明久と五分五分。もしかしたら康太の方が少し下かもしれん。

つまり、保健体育でしか戦力になりえない、というわけだ。

「じゃ、ボクが行こうかな」

対するAクラスはボーイツシュな女。

以前Aクラスに訪れた時に知り合った、工藤愛子だった。

「一年の終わりに転校してきた工藤愛子です。よろしくね」

ニコツと、よくある例えならば太陽のような笑顔。

それにしても、コイツ。転校生だったのか……。

割とどうでもいい情報だけだ。

「教科は何にしますか？」

高橋女史が康太に尋ねる。

「どうやって決めたのか知らないが、選択権はコチらしい。」

「……保健体育」

「選択するのは当然、唯一にしてマトモな点数で、尚且つ最強の武器。」

「土屋君だっけ？ 随分と保健体育が得意みたいだね」

工藤が微笑みながら康太に話しかける。

「なにやら余裕の表情っぽいが。」

「ふむ、転校生らしいし。」

「もしかしたら、康太の保健体育の実力を知らないのかもしれない。」

「でも、ボクだってかなり得意なんだよ？ ……キミとは違って、
実技で、ね」

「いろいろ問題ある発言じゃなからうか？」

「いや、私はどうということもないが。」

道徳的（？）に問題がありそうだ。
見る、明久なんて軽くパニック状態だぞ。

「そっちのキミ、吉井君だっけ？ 勉強苦手そうだし、保健体育で良かったらボクが教えてあげようか？ もちろん実技で」

明久はあっさり獲物にされた。

「フツ。望むところ」

「結構よ！ アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保険体育の勉強なんて要らないのよ！」

「……」

「島田。明久が死ぬほど哀しそうな顔をしているんだが」

「なんとという暴言だ。男には結構効くな」

雄というのは、子孫を残すことが根本的な存在意義であるわけだ。それを否定されるということは、つまり存在そのものを否定されていることに直結するはずであり。話し出すと長くなりそうだからここまでにしておこうか。

「それは残念。じゃ、御門君はどうか？ 自信あるんだけど」

そんな自信は要らん。

しかし、ここで真つ向から否定するのは面白くない。
乗ってみるのもまた一興、ってな。

「魅力的な提案だな、それは。ああ、実に魅力的な提案だ」

「え？」

「なにを驚いている。誘ったのはお前だろう？」

「そ、そうだけど」

工藤は、わたわたと慌てていた。

私の反応が想定外だったのかもしれない。
なかなかにおもしろい。

「雄とは子孫を残すことが役割だ。つまり子孫を残すための生殖行動というのは、雄にとって究極的に魅力を感じるものであって」

「漣君？ 冗談ですよね？」

「うん、もちろん冗談だとも。だから瑞希、そんな怖い顔をしないでくれ」

「漣、やはりお主はワシと O H A N A S H I をするべきだと

思っのじゃが」

「秀吉、お前はいつ戻って来た？ あと腕を持つな。関節技をされ
そつで怖いじゃないか」

「へー、ふーん。アンタ、そんなことを考えてたんだ？」

「いや、考えていたと言うよりは雄の役割から考えて当然のことを
言っただけで。優子、お前は何故こちらの陣営にいる？ そして腕
を持つな。お前が持つと割と冗談じゃない」

三途の川が眼の前にあると幻覚してしまうような、危機的状況。

具体的に言えば、間接を押し折られて首が飛びそうな感じ。

まさか楽しもうとしただけで命の危険に晒されるとは思わなかった。
それにしても、瑞希のこの反応。

……。

いや、この仮定に辿り着くにはまだ軽率。

……。

だよな？

「そろそろ召喚を開始してください」

「うう、まさかあんな返しが来るなんて……試獣召喚」

「……溲だから仕方ない。試獣召喚」

それはそれで酷い評価じゃないかね、康太？

なんて感想は思考の片隅に放り出す。

現れた召喚獣は、お決まりの召喚者のデフォルメ体。

康太の武装は二刀の小太刀。

対する工藤の武装は。

「なんだあの巨大な斧は!？」

誰かの叫びでわかると思うが。

その小さな体躯に似合わない武装は、破壊力という意味では頂点に君臨する、古来より伝わるそれ。

巨大な斧。

さらにプラスで腕輪。

かぎりなくパワフルな完全武装と言っても過言ではないだろう。

「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ」

工藤が艶っぽい笑みを浮かべると同時に、工藤の相棒の腕輪が輝く。斧に雷光を纏わせ、凄まじい速度で康太の相棒に接近した。

「それじゃ、バイバイ。ムッツリーニ君」

「ムッツリーニっ!」

なるほど、自信ありげな態度にも納得できる。明久の悲鳴も。

攻撃力に優れた武器。高得点獲得により発生する特殊能力のスイツチ、腕輪。
これだけあれば、大抵の者には勝てる。
事実、他の者では勝てなかっただろう。
そう、他の者では。

「……加速」

康太の呟きと共に、康太の相棒の姿がブレる。
そして再び形を整えた時、彼（？）は工藤の相棒の背後にいた。

「……え？」

「……加速、終了」

響くのは康太の声。
瞬間、工藤の召喚獣は全身から血を噴き出して倒れた。
直後に点数の表示がされる。

『 Aクラス	工藤愛子	VS	Fクラス	土屋康太
保険体育	446点	VS	572点	

』

さすが寡黙^{ムシツリーニ}なる性識者。
保健体育の点数だけで、明久の総合科目並みの点数だ。

「Bクラス戦の時は出来がイマイチだったらしいからな」

あの時でイマイチだったのか？

なんとという無駄な実力。ちしき

二つ名を与えられるだけのことはある。

「そ、そんな……！ この、ボクが……！」

なんか知らんが、相当シヨックだったらしい。

崩れ落ちる様に、床に膝をついていた。

「これで二対一ですね。次の方は？」

高橋女史は自分のクラスの負けが気になっていないのか、それとも絶対の信頼を寄せているのか。

特に気にした様子もなく、淡々と作業を進めている。

残る戦闘は二つ。

最後は雄二ということが決まっているため、出るのは当然

「あ、は、はいっ。私ですっ」

姫路瑞希。

Aクラスと対等に戦える、Fクラスの切り札の一枚だ。
対するAクラスは、

「それなら僕が相手しよう」

学年次席、久保利光。

「やはり来たか、学年次席」

久保利光。

霧島、御門、姫路に次ぐ学年四位の実力者。

この内、振り分け試験で御門と姫路が落ちた為、現在は学年次席の座にいる。

「ここが一番の心配どころだ」

「相手が久保なのは、当然の選択だと思うがね」

「そりゃそうだな。さて、姫路は上手く凌げるかね？」

「さあな」

わからんよ。

戦闘などいつも結果は不明なのさ。
実力、地形、運、その時の調子。
いろんなものが勝敗を左右する。
故に、一瞬の油断も許されない。

姫路と久保。

実力はほぼ互角のはず。

さて、どうする、瑞希？

「科目はどうしますか？」

今回の選択権は、どちらだ？

「総合科目でお願いします」

答えたのは久保。

勝手に事を進めた久保に、明久が反発する。

「ちょっと待った！ 何を勝手に」

「構いません」

「姫路さん？」

驚いた。

聴こえてきたのは、やたら自信の籠った声。

あの瑞希が、だ。

ハッ、成長したな、瑞希。

「それでは……」

高橋女史のコールで、フィールドが展開。

両者の召喚獣が呼び出され。

一瞬で決着がついた。

表示された点数に、口元が歪む。

そう、そうだ瑞希。

そうでなくては、面白くない。

『 Aクラス	久保利光	V S	Fクラス	姫路瑞希
総合科目	3997点	V S	4409点	

』

その点数差、400以上。

つい最近まで拮抗していた久保を、大きく引き離した。

『マ、マジカ!?!』

『いつの間にこんな実力を!?!』

『この点数、霧島翔子に匹敵するぞ……!』

至る所から驚愕の声があがる。

相手との点数差は400オーバー!

そして、霧島に到達しそうなほどの点数。
圧倒的な火力だった。

「ぐっ……! 姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ……?
」

久保が悔しそうに瑞希に尋ねた。

「……私、このクラスの皆が好きなんです。人の為に一生懸命な皆のいる、Fクラスが」

「Fクラスが好き?」

「はい。だから、頑張れるんです」

好きこそ物の上手なれ。

そんな諺ことわざがあるように、正の感情は自らを正の方向へ導く。
当然、挫折なんてものもあるが。
それでも、好きだからこそ頑張れる。
なんとも瑞希らしい答えじゃないか。

「これで二対二です」

高橋女史の表情に、若干の変化が見られる。
瑞希の急成長に驚いたのか、FクラスがAクラスと対等に戦えること
に戸惑っているのか。

「最後の一人、どうぞ」

「……はい」

Aクラスからは、事実上最強の敵、霧島翔子。
そして我々Fクラスからは、

「俺の出番だな」

Fクラスの長、坂本雄二だ。

「科目はどうしますか？」

Aクラスの中では、霧島の勝利は確定事項らしい。
騒ぎもせず、むしろゆったりとした雰囲気。

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

ざわ………！

雄二の宣言により、そんな効果音が付きそうなほどのざわめきがAクラスに生まれた。

『上限ありだつて？』

『しかも小学生レベル。満点確實じゃないか』

『注意力と集中力の勝負になるぞ………』

当然のごとく、Aクラスも我々と同じ結論に辿り着く。そして、実力ではなく注意力と集中力の勝負ならば。Aクラス打破の可能性が急上昇するのだ。それが理解できたからこそそのざわめきだった。

「わかりました。そうなると問題を用意しなくてはいけませんね。少しこのまま待っていてください」

ノートパソコンを閉じ、高橋女史は退室する。

彼女は教育熱心であることで有名だ。

おそらく、小学生レベルのテスト資料なんて持ってきたりするのだ

ろう。

彼女の背を見送り、私達は雄二の元を集った。

「雄二、あとは任せだよ」

「ああ。任された」

まずは明久。

手を握り、全てを雄二に託す。

「……………(ピッ)」

次いで康太。

無口な彼は、ピースサインを送ることで心情を表に出した。

「お前の力には随分助けられた。感謝している」

「……………(フッ)」

雄二の感謝の声に軽く微笑み、元の位置に戻った。

「期待しておるぞ、雄二」

「おう。必ず勝ってやるよ」

ゆったりとした秀吉の微笑みに、力強い笑みで返す。

「坂本君、頑張ってくださいね！」

「せっかくここまで来たんだから、みっともない結果だけはやめてよね」

「勿論だとも。お前達にも感謝してる」

瑞希と島田の激励に、手を上げて答え。
最後、私の前に歩み寄ってきた。

「……」

「……」

互いに無言。

周囲の者が困惑し始めた時。
同時に唇を歪めた。

「言っことはない」

「だろうな。お前ならそうだと思ってた」

「負けても構わん。だが、碎けるなら全力でぶち当たれ。手抜きは許さんよ」

「言われなくとも」

二人してクツクツと笑ってやった。

「では、最後の勝負、日本史を行います。参加者の霧島さんと坂本君は視聴覚室に向かって下さい」

戻ってきた高橋女史が両クラスの代表に声をかける。

「……はい」

霧島は短く返事をし、教室を出て行った。

「じゃ、行ってくるか」

「頑張れよ、主よ」
マスター

霧島の後を追うように移動する雄二の肩を軽く叩く。

雄二は苦笑し、軽く手を振って教室を出た。

これが最後の戦闘。

決戦。

名の通り、全てが決まる戦いだ。

勝っても負けても、な。

「皆さんはこのモニターで見てください」

高橋先生が機械を操作すると、壁のディスプレイに視聴覚室の様子が映し出された。

先に着席したのは霧島。次いで雄二。

『では、問題を配ります。制限時間は五十分。満点は100点です』

画面の向こうでは、日本史担当の飯田教諭が問題用紙を裏返しの状態で二人の机に置いた。

『不正行為等は失格となります。いいですね？』

『……はい』

『わかっているぞ』

『では、始めてください』

ああ、ようやくここまで辿り着いた。
ああ、ようやくここまで這い上がった。
ああ、ようやく

一発のデカイ花火を見ることが出来る。

小さく儂く散るか、

大きく派手に散るか。

もしくは、不発か。

どの結果でも受け入れるつもりだ。

さあさあ坂本雄二。

お前が自信を持って勝てると断言したこの戦争。
その締めを、お前がつけるのだ！
これ以上にふさわしい決戦はない！

「いよいよ、ですね」

「そうだな」

「これで、あの問題が出なかつたら坂本君は……」

「実力で劣る以上、雄二の負けが確定するな」

「でも、もし出ていたら」

出ていたら、我々の勝利の可能性が高い。

運命の女神は、どちらに味方するのだろうか……？

《次の（ ）に正しい年号を記入しなさい。》

() 年 平城京に遷都

() 年 平安京に遷都

わかりやすいな。

明久でも満点を狙えそうな程に。

これなら、もしかすると。

() 年 鎌倉幕府設立

() 年 大化の改新

「あ………！」

明久の、歓喜を含んだ声が漏れる。

「や、やった！ 出ましたよ澁君！」

「ああ、そうだな」

「これで私達っ……！」

「ああ、雄二を信じるなら。あの卓袱台が」

『『『システムデスクに！』』』

戦争を共に乗り越えた、戦友達の声が揃う。
拳を突き上げた明久が吼えた。

「最下層に位置した僕らの、歴史的な勝利だ！」

『『『うおおおおおっ！！』』』

教室を揺るがすほどの歓喜の叫び。

肩を組み、抱き合って喜びあうFクラス。

そんな状況の中で、ディスプレイに結果が表示された。

《日本史勝負 限定テスト 100点満点》

《Aクラス 霧島翔子 97点》

V S

《Fクラス 坂本雄二 53点》

卓袱台はみかん箱になりました、まる

試召戦争編 第九問（後書き）

二次小説仲間みたいなのが1人いるんですが。

今回、「とあるシリーズ」の二次小説を書いてみるぜ！って張り切ってます。

その時のやりとり。

友人（以下A）「今度さ、とあるの二次小説書こうと思うんだけど」

俺「え、あの大物に手を出すのか？」

A「お前もバカテスやってんじゃん」

俺「や、そうだけどね。で？」

A「うん。4人くらいのハーレムにしようと思ってね。お前が選んでよ」

俺「俺が？ いいけど。うん。姫神さんと風斬さんと神裂さん」

（適当に決定）

A「ちよつ、黒髪和風美人ばつかじゃねえかWWW」

俺「お、マジだ。俺、そんなんが趣味なんかね？」

A「知らんよ。で、後1人は？」

俺「え、え〜つと・・・滝壺さん」

A「・・・え？」

俺「え？ ダメ？」

A「いや、ダメって言うか。無理だろ、フツー」

滝壺さんはフツーに無理ですか？

試召戦争編 第十問（前書き）

ようやく一巻が終了しました。

伏線の拾い方とか終わらせ方とか、かなり無理矢理で乱雑ですが。

二巻からはもう少しオリジナル性を出したいかな、とか思ってます。

駄文ですみません。

試召戦争編 第十問

「三対二でAクラスの勝利です」

視聴覚室になだれこんだ私達に対する高橋女史の締め台詞。
言われなくてもわかっている。
なんというか、完膚なき大敗。
もういつそ清々しさを感ずるほどの負けっぷりだった。

「……雄二、私の勝ち」

床に膝をつく雄二に霧島が歩み寄る。

「……殺せ」

「良い覚悟だ、殺してやる！ 歯を食い縛れ！」

「吉井君、落ち着いてください！」

暴れそうな明久を瑞希が抱き止めると、瞬時に大人しくなった。
そんな状況では動きを止めざるを得なかったらしい。
明久は瑞希に任せるとして。
問題はコイツだ。

「53点か。0点ならば姓名無記入が考えられるが、この点数だと」

「いかにも俺の全力だ」

「この阿呆があーっ！」

「明久、ちよつと黙ってる」

「うぐぐっ……」

「良い子だ」

再び暴れ始めた明久の頭をポンツと叩く。
そのおかげなのかは知らんが、少し唸りながら大人しくなってくれた。

「雄二、もう一度聞くんが。あれがお前の全力かね？」

「もちろんだ」

「そうか。……ならばよし」

「……」

「何を意外そうな顔してんだ？」

「いや、お前のことだから銃を乱射して暴れるんじゃないかと」

「うん。貴様が私に対してどんなイメージを持っているのか、よくわかった。舌出せ、お望み通り蜂の巣にしてやる」

「舌をかつ!？」

「舌をだ」

失礼だな。私はそんな理不尽なキレ方はしない。友人が傷つけられる。これはキレるに値する。私の両親をバカにした。むしろ殺すに値する。だが。

全力で戦って、結果は敗北。

これの何処にキレる要素がある？

むしろ、称賛に値するのではないだろうか。

「ここまで来れたのもお前のおかげだ。褒めてやるよ、よくやった」

「やれやれ、あの戦神に褒められるとはな。自慢できるじゃないか」

「崇める」

「(血)祭り上げる」

「いま余計な字が入ったろ？」

「ん、いや。気のせいだろ」

クツクツと笑いながら、軽く拳を合わせた。

「……雄二、約束」

約束？

ああ、そういえば『負けたほうが言うことを聞く』ってあったっけな。

それを今やるのか。

「分かっている。何でも言え」

「……うん。でも、その前に」

今まで雄二と向かい合っていた霧島が、不意にコチラを向く。

「……御門。貴方は、ゼロって人を知ってる？」

ゼロ？

「おい、翔子。なんで漫に聞いてんだ？」

「……この人。私のことを小さな聖母リトル・マリアって呼んだの」

「何っ！？ マジか溻！？」

「あ、ああ。以前一度呼んだが。それがどうした？」

雄二のあまりの気迫に、ちよつと仰け反る。

「その呼び方、ずっと前に俺達を助けてくれたヤツが勝手に決めた名称なんだ」

「……突然呼ばれたから、驚いた」

「で、私がそれを口にしたから関係があるんじゃないかと。そう思ったのか？」

私の問いに、コクリと霧島は頷いた。

しかし、ゼロ。ゼロねえ……。

心当たりは、ないこともない。

だが確証があるわけでもない。

もう少し情報を集めるとしよう。

「そのゼロとやら。名前以外に覚えていることはないのか？」

「かなりあるぞ。一番印象に残ってるのは、黒いゴスロリを着てたことだな」

ん？

「……黒いロングコートも羽織っていた」

「ふむ……」

「後は、そうだな。結構愚痴を聞かされたのも覚えてる」

「……確か、『何度も何度も着せ替え人形にしゃがって。嫌ではないが、疲れることを考えて欲しい』なんて言われた」

「おー、そうだ。そんなことも言ってたな。良く覚えてたな、そんなの」

「……かなり独特の愚痴だったから、印象に残ってた」

「そうか。で、どうだ。なんかわかんねえーか？」

うん、なんと云うか。

その……。完全に。

「私だな」

「……は？」

そんな疑問顔をしなくてもいいだろう。

「いや、その。黒のゴスロリで黒いロングコートで、ゼロって名乗って。しかも着せ替え人形云々言ってたんだろ？ それ、私だ。うん」

「マジで？」

「マジで」

いやー、懐かしい。

確かあの時、着せ替えさせられ過ぎて疲労してたんだ。

それ以上やられるとかなりキツイから抜け出して。

それで、何かあって。

滅茶苦茶に愚痴を吐いて。

なんか絡んできた阿呆共を捻じ伏せて。

ゼロって名乗ったのは、あの時の一回だけだったりする。

「いや、でもあの人はかなり女っぽかったぞ？ お前みたいに男か女かわからん容姿じゃなかった」

「……声も女の子だった」

「私は中一までは、そりゃあもう完璧な女の子だったんだぞ？ 声だって女のそれだったしな。今の様に中性的なんかじゃなかった」

「そ、そうなのか……」

「うん、そうなんだ……」

沈黙。

なんとも微妙な空気が流れる。

「と、とにかくだ。俺達は礼が言いたかったんだ」

「礼？」

「ああ、あの時はフラツといなくなって言えなかったが」

雄二はキツチリと頭を下げ、

「助けてくれて、感謝する」

「……ありがとう」

礼を言われた。霧島も雄二に倣うようにして頭を下げる。

しかし、礼を言われても困る。

私はストレス発散の種を探していて偶然、二人の同年代っぽい子供を発見して愚痴を吐いただけ。

ついでに言えば、絡んできた阿呆を八つ当たり気味に捻じ伏せただ

け。

スッキリしたからそのまま帰った。

本当にそれだけ。

思いつ切り自分の為だったのだから、礼をされると後ろめたさが込み上がってくるというか……。

というわけで、私は強引に。そう、思いつ切り強引に話題を逸らすことにした。

所謂、「文の繋がり？ なにそれ？ おいしいの？」という感じで。

「そ、それよりだ。霧島、約束とやらはいいのかね？」

「……そうだった」

「おい溲テメエ！ 上手くいけば誤魔化せたのに！」

「貴様はそんなことに私を利用しようとしたのか！？ 一応恩人だろっ！」

取っ組み合い。

が、雄二が私に敵うはずもなく、私はあっさりと背後を取ることができた。

「首、捻じ切るよ？」

「すまん。マジですまん」

所詮ただのじゃれあい。

本当にやるうとしたわけではないので、すぐに解放する。
雄二は首を撫でながら霧島に向き直った。

「で、どんなお願いをしようってんだ？」

「……（カチャカチャカチャ！）」

「さ、流石ムツツリーニ！ 僕も早く準備しないと！」

うわぁ、康太と明久がなんかやってる。

写真を撮る準備だ。

何を撮るつもりなのだろうか。
というより、何を期待しているのだろうか。

「……それじゃ」

霧島は一度瑞希に視線をやり、雄二に戻す。
小さく息を吸って、言い放った。

「……雄二、私と付き合って」

ほほう。

これは、なかなか面白い。予想外の展開だ。

見てみる、明久が凄い間抜け面をしてやがる。

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか」

「……私は諦めない。ずっと、雄二の事が好き」

ずっと、と言うことは。

幼い頃（具体的な年齢は知らんが）から好きだった、ということだな。

それで告白を全て断っていたのか。

瑞希を気に掛けていたのは、雄二の近くにいる女だからだろう。

一途だな。怖いほどに。

「その話は何度も断っただろ？ 他の男と付き合う気はないのか？」

「……私には雄二しかいない。他のひとになんて、興味ない」

「遷なんてどうだ？ アイツも恩人だろ？」

「……確かに、ゼロも恩人。でも、私が付き合いたいのは彼じゃない。貴方」

おお、なんか格好良い。

怖いほど一途で、怖いほど素直。

良い女じゃないか。

雄二は何を思っただ断っているのかね？

「拒否権は？」

「……ない。約束だから。今からデートに行く」

「ぐあつ！ 離せ！ み、漣！ 助けてくれ！」

襟首を掴まれ、引き摺られながらも伸ばされる手に、私は応えてや
った。

「霧島、聞きたいことが」

「……翔子、と呼んで」

「は？」

「……貴方は私の恩人。だから、翔子と呼んで欲しい」

いや、恩人だから名前を呼べって、正直意味わからん。
呼べと言っのなら呼んでもかまわんが。

「なら翔子。一つ聞きたいことがある」

「……なに？」

「もし、もしもだ。仮定の話」

一つ、これだけは聞いておきたい質問があった。私の好奇心を満たすためだけの質問であり、雄二を助けるのには全く役に立たないが。

「雄二に好きな女ができた場合、お前はどつする？」

「……どうもしない」

即答された。

彼女の純粋な瞳が、私を射抜く。

「……もし雄二がその人と幸せになっただとしても、幼馴染として支えることくらいできるから」

「……」

「……何があるうとも、私は雄二を愛し続ける」

「なるほどね」

一切の淀みや迷いの無い答えに、私は苦笑した。
好い。

実に好い。

恐ろしいほど、身震いするほどに。

これほどまでに好い女は、相当いない。

よかったな、雄二。

お前は、果報者だよ。

思わず嫉妬してしまいそうだ。

しないけど。

「よし、雄二を好きに扱うことを許可しよう。何でもしても構わんよ」

「……………本当？」

「当然」

「……………ありがとう。やっぱりゼロは良い人」

「ちょっと待て溇！ 俺の意見とか意思とかが反映されてって引き摺るな翔子せめて溇に文句ぐらい言わせるおおおおお！…」

ドップラー効果で音の反響を残し、雄二と霧島、もとい翔子は消え去った。

「……………」

「……………」

「……………」

教室にしばしの沈黙が訪れる。
どうやら、状況に付いていけてないらしい。

「さて、Fクラスの皆。お遊びの時間は終わりだ」

突如響く野太い声。

声の方を向くと、そこには西村教諭（通称 鉄人）が立っていた。

「あれ？ 西村先生。僕らに何か用ですか？」

「ああ。今から我がFクラスに補習について説明をしようと思っ
な」

我がFクラス？

「おめでとう。お前らは戦争に負けたおかげで、福原先生から俺に
担任が変わるそつだ。これから一年、死に物狂いで勉強できるぞ」

『なにいつ!?!?』

クラスの男子生徒（私、康太、秀吉除く）が悲鳴をあげる。
生徒指導の鬼と呼ばれる彼が担任になれば、悪ふざけができなくな

る。

そんなことを考えているのだと思う。

私としては文句は無い。

この人は良い教師だ。

「いいか。確かにお前らはよくやった。Fクラスがここまでくるとは正直思わなかった。でもな、いくら『学力が全てではない』と言っても、人生を渡っていく上では強力な武器の一つなんだ。全てではないからといって、ないがしろにしていいものじゃない」

なん……だと……っ!?

と驚いた雰囲気を出しておいたが、特に驚く要素はない。

まあなんだ。なんとという正論、ということだな。

「吉井。お前と坂本は特に念入りに監視してやる。なにせ、開校以来初の《観察処分者》とA級戦犯だからな」

「澪が入ってない!? 一番暴れた人なのに!」

「当然だ。御門は若干快樂主義の気があるが、それでも常識を弁えて学力も高い。監視する必要性なんぞないだろう」

私が快樂主義?

自覚はないが、彼が言うのならはそうなのかもしれん。楽しめることを追求したりするが。

あ、快樂主義じゃないか。

「くっ、でもそうはいきませんよ！ なんとしても監視の目をかいくぐって、今まで通りの楽しい学園生活を過ごしてみせます！」

「……お前には悔い改めるといふ発想はないのか」

それでこそ明久だ。

悔い改めるとか、そんなことをされたら「お前誰だ」という展開になりかねない。

もしくは「保健室へ行け」。

「とりあえず明日から授業とは別に補習の時間を二時間設けてやる
う」

む、それは嫌だな。

趣味に割く時間が少なくなってしまう。

どうすれば補習から上手く逃れることができるだろうか。

そんなことを考えていると、優子が寄ってきた。

「さて、漣。貴方も約束、忘れてないでしょうね？」

「ああ、忘れてないとも」

まだ歳じゃないんだ。

1時間程度しか経っていないのに、忘れてたまるか。

「約束？ 澁も雄二のような約束をしたのかな？」

「ん、ああ。ちよつとな」

「……あれは雄二だけでよかったはずだ」

「確かにそうだがね。あの条件が『負けたほうが言うことを聞く』であつて、『負けたほうのクラス代表が』となつてない以上、無視することもできんのだよ」

無視してしまえば、契約違反とされんとも限らんのだし。

「さて、何が望みだ？」

「そつね、特に決めてないのだけど」

そこまで言つて口を閉じ、考えるように首を傾げる。

そのまま視線が明久と島田のほうへ向いた。

「今日は約束通りクレープでも食べて帰りましょ」

「え？ 美波、それって週末の話じゃ……って、このままじゃ僕の食費が！ に、西村先生！ 明日からと言わず、今日からやりまし

よう！ 思い立ったが仏滅です！」

「『吉日』だ、バカ」

西村教諭とシンクロしてしまったのは仕方ないはず。

どうやったら仏滅と吉日を間違えられるのか、不思議でならない。

島田も頑張っているんだな、などと感心していると、優子はコクリと頷いた。

「決めたわ」

ということらしい。

肝心の内容は。

「今度、一緒に出かけましょ？」

聞く限り、明久と同じようなことを要求された。

名義的に『デート』と捉えればいいのか、普通に『一緒にお出かけ』と捉えればいいのか。

首を捻って悩むと、慌てた様子の瑞希と秀吉が食って掛かった。

「だ、ダメですっ！ 澁君は私と映画を観に行くんです！」

……。わーすごい、マジ初耳。(棒読み)

「あ、姉上！ それはその、なんと云うか。そう！ 卑怯だと思うのじゃ！」

「卑怯？ 澪は承諾してくれてるのに？」

「う、そ、それでも卑怯なのじゃ！」

「いや、意味がわかんないんだけど」

同感だ。

筋が通ってない。

で、私の返答はというと。

「了解。今度な」

もちろん了承。

約束を破るわけにはいくまいよ。

「み、澪君？ 私と映画を」

「構わんよ。ただし、優子と日程が被らない日にな」

「な、ならばワシも。漣、いいかの？」

「ああ、構わん。被らない日にな」

「……漣、そういうを優柔不断と言つのだと思つ」

「だろうな」

康太のツツコミに、思わず頷く。

だが、私は彼女達の誘いを断る理由はない。

断る理由がないなら、断るほうが失礼というものであったら、全て受け入れるさ。

「こうなったら卒業式には伝説の木の下で釘バットを持ってお前を待つ！」

「斬新な告白だな、オイ」

突然聴こえてきた明久の言葉に突っ込む。

私は西村教諭と案外馬が合うかもしれない。

そのへんはどうでもいい。

問題は、この後どうするか、だ。

せっかくこれだけ集まったのだ。

あっさり解散というのは面白味に欠ける。

パンパン、と手を叩き、FクラスとAクラスの注目を集めた。

「さて、諸君。我々両クラスの代表は、どうやらカップルになるよ
うだ」

決定事項、だと思う。

翔子の勢いから考えると。

「ということだ。AクラスとFクラスの親睦を深めておくのも、
悪くないと思わないかね？」

補習は明日から。

つまり、今日は帰っても構わない、ということだ。

というわけで、今日は親睦会をしようと思う。

両クラスの代表の仲がいいのなら、両クラスの仲が良くても悪くな
い。

いや、むしろそちらの方が都合がよからう。

両クラスの仲が良ければ、雄二と翔子が行き来しても不審に思われ
たりしないし。

というのは建前で。

本音はFクラスに利益があるかもしれない、ということ。

最上層のクラスと親交が深ければ何か特典つかねえかな、という自
分勝手且つ好奇心溢れる提案です。

長々と説明したところで、

「さて、諸君。そんな訳で、今から親睦会だ。坂本雄二と霧島翔子
の幸せを願って、乾杯でもしておこうじゃないか」

本当は西村教諭と高橋女史（両クラスの担任）も連れて行きたいが、彼等は大人だ。仕事というものがある。

「やれやれ、澪も変な提案をするものじゃな」

「……澪らしい」

「嫌ではないだろう？」

頭を振る二人に、苦笑しながら問いかけてみる。
返答は、

「「勿論」」

予想通りだった。

両クラスにも異論のある者はいないようで。
ファミレスに入り込み、AとFの親睦会を始めることとなった。

ファミレスの店員とか客とかに謝罪したい。

うるさくて、ごめんなさい。
いや、本当に。

しかし、あの瑞希の反応。

そこに優子も加えておこつか。

そろそろ、本気で調べ始めたほうが良いのかもしれんな。

試召戦争編 第十問（後書き）

ゼロの名前の由来はとっても簡単。

- 1・名前から部首を取る 『零』
 - 2・数字にする 『零』
 - 3・読む 『0』
- 『零』 『0』 『ゼ』 『ロ』

ファミレスでのやりとりは、そのうち番外編的なときにもやろっかなと考えています。

清涼祭編バカテスト 第一問

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力ください

『あなたが今欲しい物はなんですか？』

姫路瑞樹の答え

『クラスメイトとの思い出』

教師のコメント

成程。お客さんの思い出になるような、そういった出し物も良いかもしれませんね。

写真館とかも候補になり得ると覚えておきます。

土屋康太の答え

『Hな本(x) 成人向けの本』

教師のコメント

取り消し線の意味があるのでしょうか。

吉井明久の答え

『カロリー』

教師のコメント

この回答に君の生命の危機が感じられます。

御門滯の答え

『ビームサーベル、はサイズ的に無理なので、ライトセイバー』
教師のコメント

御門君が持つと割りと冗談にならないので自重してください。

清涼祭編バカテスト 第一問（後書き）

長々と放置すみませんでした。

ちよつと実力テストの成績及び進路云々で母親と衝突してしまいました。

PC禁止令どころか没収されたりしてました。

や、本当に申し訳ないです。

清涼祭編 第一問（前書き）

放置から復帰第一投目。

感が落ちてるので、もともとグダグダだった文はさらに酷い事に…

…。

ちよっとリハビリを混ぜながら頑張っていきます。

清涼祭編 第一問

『清涼祭』。

各クラスが露店を経営したり、喫茶店を開いたりする行事。儲けた金でクラスの備品を揃えたり、クラス会やるーぜ！なんて言う輩がいたりするかもしれない。

まあ、学園で行う数少ない娯楽の行事、とでも言えばいいか。

『清涼祭』。

それは、とどのつまり。

学園祭である。

当然ながら、学園祭には準備期間というものが存在する。

各クラスで何を行うか。備品はどうするか。そんなことを話し合う期間だ。

実際、お化け屋敷を行うために教室に改造を施しているクラスや、焼きそばの為に調理道具を手配するクラス。

この学園にのみ許された『試験召喚システム』についての展示を行うクラスなど。

各々、活気に溢れたLHRを過ごしている。

そんな中、我々Fクラスはというと

『吉井！ こいつー！』

『勝負だ、須川君！』

『お前の球なんか、場外まで飛ばしてやるー！』

グラウンドで野球なんてやっていたりする。もっとも、教室に残っているのが私と秀吉、康太、瑞希と島田がいたりするが。

康太は何時もの如くカメラの手入れ。

瑞希と島田は何か話していて、秀吉は私の隣でボンヤリしている。

『言ったな！？ こうなれば意地でも打たせるもんか！』

「漣、お前はさっきから何を言っておるのじゃ？」

窓から外を見ながらブツブツ言っていると、秀吉に声をかけられた。

「読唇術と似非声帯模写でアイツらの発言を再現している」

「なにゆえっ！？」

いや、特に理由なんて……。あえて言えば暇だったから。

本来ならばここで出し物の話し合いを行うべき時間。

だというのに、あのバカ達は今日も馬鹿騒ぎに精を出しているらしい。

奴等らしいから、それはそれで文句はないのだけれど。

ん？ あれは、

「お、西村教諭が出てきたぞ」

「また追い駆けられるんじやの、明久達は」

それがアイツらの日常だからな。

おー、西村教諭速いな。

それから逃げる事ができる明久達も速いのか。

「そういえば、溼は大会はどうするのじや？」

「ん〜、どうするかねえ……」

宣伝のつもりなのか、清涼祭では召喚でトーナメントを行う大会がある。

それが『召喚大会』。

チームセル
二人一組で戦闘を行い、優勝したら何かの賞品が貰える。

勝敗のルールは、戦争と変わらない。

点数が0になったら負け。

人数が極端に少なくなった戦争と思えばいいだろう。

あとは、観客がいるからと妙に緊張しないことが重要だ。

私としては、大会には全く興味が無い。

賞品は面白そうだとは思うのだが、別に欲しいとも思わない。

そんなこんなで、大会に出ようと思える理由がないわけである。
が、もし出場するのなら、

「霧島、じゃない。翔子か瑞希と組むのが一番理想的かね」

翔子とならば、学年ツートップの実力で相手を弄ぶことができるだろう。いわゆる弱肉強食。

瑞希とならば、合図や話し合いなしでお互いの行くことがわかるはずだ。いわゆる以心伝心。

実力を重視するのならば翔子と。相性を重視するのならば瑞希と。

まあ当然の選択だろう。

そのことを説明すると秀吉は、

「そうじゃのう」

と納得しつつも、どことなく不機嫌な色が垣間見えた。

だが、あえて気が付かない振りをする。

気が付いたところでどうしようもないのだし、それが私の勘違いという可能性もある。

そも、勘違いではないとしても、どうすればいいのかわからんのだ。そんな思考を振り払い、再び大会について考えてみる。

よくよく考えてみれば、負ける可能性が低すぎる戦いというのは面白くない。

ハラハラするような戦いで勝利をもぎ取ってこそ、喜びというものは大いと思う。

となれば、翔子が瑞希と組むのは得策ではないだろう。

点数の低い雄二や明久、康太や秀吉と組むのが一番いいかもしれん。いや、組むのなら秀吉だな。

雄二はなんやかんやで戦いが得意だし、明久にしては召喚獣を動か

すことに慣れている。

康太は科目が保健体育ならば無敵だ。他は最悪だが。

それに対し、秀吉はバランスの良い召喚者と言える。

何かに特化しているわけでもなく、それでいて成績が悪いわけでもない（あくまでFクラス内で）。

そんなわけで、もしもペアを組むのなら私は秀吉を選ぶだろう。

まあ、出ないのだがね。

「出場する意思は無いな。今回は、クラスの出し物に専念しておくさ」

高校生の仕事と言えば、召喚戦争よりも学園祭だろう？

いや、実際はどうでもいいんだが。

・
・
・
・
・
・
・
・

「さて、そろそろ春の学園祭、『清涼祭』の出し物を決めなくちゃいけない時期が来たんだが」

野球を中断させられてFクラスに帰還した雄二は、若干不機嫌そうにして床に座る私達を見下している。

「とりあえず、議事進行並びに実行委員として誰かを任命する。そいつに全権を委ねるので、後は任せた」

あの野郎。

興味がないから全て他人に押し付けるつもりだな。

試召戦争の時とは大違いだ。

その態度に何かを感じ取ったのか、瑞希が小声で問いかけてきた。

「漣君。坂本君って学園祭はあまり好きじゃないんですか？」

「好きか嫌いかは知らんが、少なくとも興味はないみたいだな」

アイツのことだ、興味があれば率先してやってのけるだろう。

「そうなんですか……。寂しいです……」

瑞希の表情に翳がさす。

そのまま、上眼遣いでこちらを見てきた。

「漣君も興味ないですか？」

「私か？ そう、だな……」

どうでもいい、というのが本音だ。

学園祭は、当然のように学生が行うものだ。

露店も売店も、全て学生が管理するものとなる。

つまり、それだけ質やら何やらが落ちた物を売っているのだ。

いや、高校生が作ったということが醍醐味であり、もしかしたら市販よりも安いのもかもしれないが。

だったら市販の食べよ美味いから、と思わなくてもないわけで。

まあ結局は、私が歪んだ性格をしているだけなのだが。

しかし、である。

祈るような眼で見ってくる瑞希を気にせず、「ない」と言つのも気が引ける。

あれだ。例えは悪いが、雨の日に捨てられた子猫を見つけたら、なんとなく居心地が悪くなるだろう？

助けるべきか。いやしかし、助けた後が……、みたいな。

猫が嫌いな人はそうでないのかもしれないが、私はそうだ。

とにかく、そんな状況に遭遇してしまったかのような錯覚がある。

私は、瑞希が泣いたら一発で撃墜されるのだから当然と言えよう。

わかっていると思うが、恋愛的にはなく精神的に、な。

「興味はない」

「そう、ですか」

悲しげにめを伏せる彼女に、もう一言。

「だが、面白そうではあると思う」

「え？」

私の発言に疑問を抱いたのだろうか。首を傾げる瑞希。矛盾したことを言っているのだから仕方ないだろう。説明したいのだが、あー、なんと例えればいいのか。

こう、流行っているカードゲームがあるとするだろう。それを友達がしているのを傍観しているとき、「面白そうだ」とは思うけど「俺もやろう」とは思えない感じだ。ふむ、自分でもわかりにくい説明だが、そう説明するしかない。

「えっと、それはどういう……？」

「ま、適当に楽しんでおこうかということだ」

「はあ……」

キョトンとした顔をする瑞希の頭を、グリグリ撫でておく。グシャグシャになった髪を慌てて直す彼女に癒され、視線を雄二に戻した。

「んじゃ、学祭実行委員は島田ということかい？」

「え？ ウチがやるの？ うっん……、ウチは召喚大会に出るから、ちよつと困るかな」

「雄二。実行委員なら、美波より姫路さんの方が適任じゃないの？」

「え？ わ、私ですか？」

強気な島田より性格の柔らかい瑞希が担当したほうが、話し合いでは荒れないだろう。

しかしである。

島田の性格にも瑞希の性格にも、長所と短所があるわけで。

「姫路には無理だな。たぶん全員の意見を丁寧に聞いているうちにタイムアップになる」

瑞希の性格には話し合いが荒れないという長所があり、丁寧すぎるために時間が掛かるといふ短所がある。

そういうことだ。

説明不要だったかな？

「それにね、アキ。瑞希も召喚大会に出るのよ」

「え？ そうなの？」

「はい。美波ちゃんと組んで出場するつもりなんです」

ギョツと拳を握る瑞希の姿は、やはり小動物を連想させる。

「学校の宣伝みたいな行事なのに。二人とも物好きだなあ」

一応説明しておこうか。『試験召喚大会』は今年から開催される。世界的に注目されている『召喚システム』の一般公開も行われるため、どう考えても宣伝そのものだ。宣伝して『召喚システム』を知らしめ、寄付などの資金調達を期待しているのではなからうかと推測する。

「ウチは瑞希に誘われてなんだけどね。瑞希ってば、お父さんを見返したいって言うてきかないんだから」

「お父さんを見返す？」

「瑞希ほろひの父親ちちがどうかしたのか？」

「うん。家で色々言われたんだって。『Fクラスのことをバカにされたんです！ 許せません！』って怒ってるの」

「あらら。姫路さんが怒るなんて珍しいね」

「だって、皆のことを何もわかってないくせに、Fクラスっていう理由だけでバカにするんですよ？ 許せませんっ」

「……………」

「……………」

いや、Fクラスここの連中がバカなのは事実なんだが……。

しかし、さすがの瑞希おしさまの父親もこの状況を危険視するか。まあ、設備が最悪だしな。

ふむ、どうにかしなければなるまい。

一番楽なのは、戦争で数ランク上のクラスに勝利することだ。

Aクラスは無理でもCクラスかBクラスならば、私と瑞希が前線で強襲をかければどうにかなる。

しかも雄二の策による奇襲も上乘せされるのだ。まず負けることはない。

だが、戦争に敗北したクラスは一定期間を置かなければ戦争を申し込む事ができない、というルールがあるのだ。

それがある以上、Aクラス戦で敗北した我がクラスが戦争を行うことは無理。

となればどうするか。

最高責任者、つまり学園長に直訴する。……却下。

成績別に設備の優劣を決めるとしている以上、Fクラスだけ優遇するわけにはいかない。

当然のように拒否されるだろう。

さてさてどうするか。

ふと意識を戻すと、島田が黒板に何かを書いていた。

『候補？……吉井』

『候補？……明久』

「さて。この二人のどちらが良いか、選んでくれ」

「ねえ雄二。明らかに美波の候補の挙げ方はおかしいと思わない？」

『どうする？ どっちが良いと思う？』

『そうだなあ……。どちらもクズには変わりないんだが……』

「こらっ！ 真面目に悩んでいるフリをするんじゃない！ あと、平然とクラスメイトをクズ呼ばわりするなんて、君らは人間のクズだ！」

どうしよう、ついていけない。

明久がなにかの候補者になっていることはわかったのだが、困ったな。

「ほらほら、アキってば。そんなことより、ウチとアンタでやることに決まったんだから、前に出て議事をやらないと」

「なんだか僕はいつもこんな貧乏くじを引かされている気がするよ……」

状況だけ見れば貧乏くじなのだろうが、島田がいわゆるツンデレであることを考えればそうでもないだろう。

どうせ明久はなにも気付かないだろうけど。

しかし、候補とはあれか。清涼祭の実行委員についてか。

とすると、黒板に候補者の名前を書いていた島田は決定なんだな。だからこそ候補者は明久一択なのだろう。

「んじゃ、あとは任せたぞ。ふあ〜……」

立ち上がった明久と入れ替わりに、雄二は席に付いた。欠伸を隠す気がないことをから、絶望的なまでにやる気がないことがわかる。

「ウチは議事進行をやるから、アキは板書をお願いね」

「ん。了解」

「それじゃ、ちゃっちゃと決めるわよ。クラスの出し物でやりたいものがあれ挙手してもらえる？」

島田が言うと、数名が挙手。

全員がやる気なしというわけでもないらしい。

「はい、土屋」

「……（スクツ）」

指名されたのは康太。

最近は土屋康太という本名よりも、ムッシュリー寡黙なる性識者という渾名のほうが圧倒的に馴染んでいる。

本人が文句を言わないから、どうでもいいのだろう。

「……………写真館」

「……………土屋の言う写真館って、かなり危険な予感がするんだけど」

女子にとってはそうかもしれない。

しかしである。

欲望に忠実な男子には大受けするはずだ。

写真を宝の山と呼ぶかもしれない。

康太が主催の写真館は、写真館ではなく覗き部屋と言つべきだと思うが。

どうせ本人の了承なしの無断撮影だろうからな。

「アキ、一応意見だから黒板に書いてもらえる？」

「あいよー」

明久は何故か数秒考え込んだ後、黒板に書き込む。

【候補？ 写真館『秘密の覗き部屋』】

……。
え？ なに？ そのまま？
素直すぎるネーミングセンスに絶句した。

「えーっと、土屋君らしいです、ね？」

戸惑っているらしい瑞希が、困ったように苦笑して首を傾げてきた。

「だな。アイツらしいのは良いと思うが、お前も撮影対象だぞ？
ちゃんと給料は貰っておけよ」

「え？ そうなんですか？」

「……ああ、そうだ」

明久も明久だが、コイツも自分に対して鈍感な部分がある。
どれだけ容姿が優れているのか、自覚していない。

それを言えば、康太や雄二、秀吉に島田も自覚していないっぽい。
翔子と優子もかなり怪しい。

工藤は、ギリギリ自覚してるかな？
だからこそ軽々しく誘惑なんてできるのだろう。

……。
やれやれ、

「鈍感ばっかじゃねえかこの野郎」

「えつと……?」

「気にするな。お前はそのまま、純粹に生きればいいさ」

容姿端麗であることを自覚して高飛車になられても困るしな。ポンポンと頭を軽く叩くと、照れたように微笑してくれた。

「中華喫茶? チャイナドレスでも着せよっつていうの?」

瑞希の頭、というか髪を撫でながら意識を戻すと、島田の疑問の聲が聞こえた。

次の提案は中華喫茶らしい。
で、立っている須川が発案者か。

「いや、違う。俺の提案する中華喫茶は本格的なウーロン茶と飲茶を出す店だ。そうやってイロモノ的な格好をして稼ごうってワケじゃない。そもそも、食の起源は中国にあるという言葉があることからもわかるように、こと『食べる』という文化に対しては中華ほど奥深いジャンルはない。近年、ヨーロッパ文化による中華料理の淘汰が世間では見られるが、本来食というものは」

なんだコイツ。中華信者か?

そう思わざるを得ないほどの力説に、私は内心ドン引きした。
考えてもみる。

普段は適当な馬鹿騒ぎを起こしてる馬鹿が、いきなり中華について真面目に語る場面を。

ある意味怖いじゃないか。

それが、今の奴だ。

しかしまあ、感心する部分もある。

深く研究するほどの趣味が、一つでもあるのは良いことだ。

これほどの記憶力と、調べたであろう意欲。

馬鹿をやらす真面目に勉学に励めば、良い線行っただろうに。

「アキ、それじゃ、須川の意見も黒板に書いておいてくれる？」

「あ、うん」

黒板に向かって硬直する明久。

さては須川の話、半分も理解していないな？

ネーミングに困っているんだろう。

「どうしたの？ 早く書いてよ」

「りよ、了解」

【候補？ 中華喫茶『ヨーロッパピアン』】

えー。

ないわー。

マジキチだわー。

などとキャラが崩壊してしまう(意図的だが)ほどのネーミングセンスだった。

ビックリだ。

ちなみに、候補?があるのだから当然候補?も出ている。紹介しておこう。

【候補? ウエディング喫茶『人生の墓場』】

今すぐ全国の既婚者に土下座してこい。

瑞希の髪を弄びながら呆れていると、ガラガラとドアが開いた。筋骨隆々の男性、Fクラスの担任、鉄人こと西村教諭だ。

「皆、清涼祭の出し物は決まったか?」

「今のところ、候補は黒板に書いてある三つです」

西村教諭はゆっくりと、明久の字が書いてある黒板に目を向けた。

【候補? 写真館『秘密の覗き部屋』】

【候補? ウエディング喫茶『人生の墓場』】

【候補? 中華喫茶『ヨーロッパアン』】

「……補習の時間を倍にしたほうが良いかもしれんな」

あー、そう来るかー。

私にも被害があるのだから困ったもんだ。

『せ、先生！ それは違うんです！』

『そうです！ 吉井が勝手に書いたんです！』

『僕らがバカなわけじゃありません！』

「馬鹿者！ みつともない言い訳をするな！」

明久を売って何を逃れようとしたクラスメイトを一喝。

「先生は、バカな吉井を実行委員に選んだこと自体が頭の悪い行動だと言っているんだ！」

ああ、この教師は……。

良い教師で尊敬できる人物なのだが、時折何故教師をやっているの
だろうかと思う発言や行動をとるから頭が痛い。
もしかしたら、あの人もFクラスに染まってきているのかもしれないな。

「まったくお前たちは……。少しは真面目にやったらどうだ。稼ぎを出してクラスの設定を向上させようとか、そういった気持ちすらないのか？」

『そうか！ その手があつたか！』

『なにも試召戦争だけが設備向上のチャンスじゃないよな！』

『いい加減この設備にも我慢の限界だ！』

なんというか、こつ。
素直だな、コイツら。

「み、みなさんっ！ 頑張りましょう！」

瑞希の声が響き渡る。

見ると胸の前でグツと拳を握り、やたらとやる気の溢れた彼女がいた。

そんな瑞希には悪いが、らしくないと思う。

彼女は本来、目立つことは苦手な性格なのだ。

こういう公の場で大声を出すことに、少々違和感があった。もしかしてそこまで思い詰めているのだろうか？

『出し物はどうする？ 利潤の多い喫茶店が良いんじゃないか？』

『いや、初期投資の少ない写真館の方が』

『けど、それだと運営委員会の見回りで営業停止処分を受ける可能性もあるぞ』

やれやれ。

ようやくやる気になったのか、教室中に意見が飛び交い始める。

『中華喫茶ならはずれはないだろう』

『それだと目新しさに欠けるな。汚いせいであまり人が来ない旧校舎だと、その特徴のなさは致命傷じゃないか？』

『ウエディング喫茶はどうだ？』

『初期投資が大きすぎる。たった二日の清涼祭じゃ儲けは出ないんじゃないか』

『リスクが高いからこそリターンも大きいはずだ』

「はいはい！ ちょっと静かにして！」

やる気が出たのはいいが、まとまりがなくなりつつある。
島田が手を叩いて注意するものの、全く効果はないようだ。

『お化け屋敷とかの方が受けると思う』

まあ、この教室なら雰囲気は出るかもな。

『簡単なカジノを作ろう』

賭博は犯罪。

『焼きとうもろこしを売ろう』

いいな、美味そうだ。

それにしても、意見がバラバラになってきた。

候補は三つなのに、次々と新しい提案が出てくる。

戦争のときはもう少しまとめに機能していたはずなのだが。

やはり、島田と明久では統率能力が不足しているのだろうか。

恐らく困り果てたのだろう。島田が額に手を当てて溜め息をつきながら明久に話かけている。

なにを話しているのかはわからんが、たぶん「坂本を出せないか？」
というようなことだと思う。

アイツの統率力は眼を見張るものがあるからな。

明久もどうしようもないのか、困ったような視線を送ってきた。

まあなんだ、少しくらい手伝ってやるとしようか。

「瑞希、耳を塞いでおけ」

「え、耳ですか？ どうして？」

「ちょっとデカイ音を出すんでね」

瑞希が首を傾げながらも耳を塞ぐのを確認し、身振りでも明久に耳を塞ぐように指示する。

アイツも私が何をするのかわかっていないのだろうが、島田にも耳を塞ぐように言ったらしい。

前の二人が耳を塞ぎ、今度は康太と秀吉と雄二なのだ。

雄二は寝ているからどうしようもない。

康太と秀吉は、何故か既に耳を塞いでいた。

明久達の行動を見て私に視線を移していたから、とりあえず真似をしておこうということだろう。

彼等の行動力に満足しつつ、カバンから一丁のモデルガンと一つのマガジンを取り出す。

マガジンにしっかりと『火薬』が装填されているのを確認し、薬室に送り込んだ。

で、窓に向けて引き金を引くと、

パアアンツ！！！！

発砲音が鳴り響いた。

一瞬で静まり返る教室。

ソレを機に私は手を叩く。

「さて、好き勝手に意見を出されても処理に困る。既に前に出ている三つの中から選べ。いいな？」

まるで従順な犬のように、コクコクと頷くクラスメイト。たぶん、先程の音を警戒しているのだろう。

わかっていると思うが、アレは銃ではない。モデルガンだ。つまり、『弾丸』はでない。

私は火薬をセツトして引き金を引いただけだ。

「島田、あとは頼む」

「あ、うん」

既に耳から手を離していた彼女に、あとの事は任せる。

「それじゃ、写真館に賛成の人！

はい、次はウェディング喫

茶！　　最後、中華喫茶！」

順調に多数決が進み、結果。

中華喫茶に決定した。

無難なところだろう。

正直、ウェディング喫茶になったらどうしようかと思っていた。

「それなら、お茶と飲茶は俺が引き受けるよ」

「……………（スクツ）」

立ち上がったのは須川と康太。

提案者である須川は当然として、康太も立ち上がるとは意外だ。

ああ、でもアイツ、手先が器用だからな。

料理くらい出来て当然かもしれん。

「ムツツリーニ、料理なんてできるの？」

「……紳士の嗜み」

料理＝紳士の嗜み。

それは初めて聞いた。

「まずは厨房班とホール班に分かれてもらうからね。厨房班は須川と土屋の所、ホール班はアキの所に集まって！」

さてさて、私はどちらにしようか。

「それじゃ、私は厨房班に」

「ダメだ姫路さん！ キミはホール班じゃないと！」

よくやった明久！

あの子の料理を売りに出すなど、死滅者が続出するだけだ！

『明久、グツジヨブじゃ』

『……！（コクコク）』

秀吉と康太は褒め称え、雄二は……。雄二？ お前は寝ているんだろう？ 何故そんなに震えているんだ？

「え？ 吉井君、どうして私はホールじゃないとダメなんですか？」

無自覚って怖いよね。

どうしよう、という眼で明久が見てきたので、私が答えることにする。

「単純に言ってしまうえば、容姿が良いほうが客受けが良いからだ」

「容姿、ですか？」

「ああ、まあつまり。お前は可愛いからホールで接客をしる」

「か、可愛いだなんて……。澁君がそう言うなら、ホールでも頑張りますねっ」

いえ、ホール“で”頑張つてほしいです。

「アキ。ウチは厨房にしようかな？」

「うん。適任だと思う」

「……………」

頑張れ、超頑張れ島田。

「それなら、ワシも厨房にしようかの」

「秀吉、何をバカなことを言っているのさ。そんなに可愛いんだから、もちろんホールに決まってみぎゃあっ！ み、美波様！ 折れます！ 腰骨が！ 命に関わる大事な骨が！」

やれやれ。

墓穴を掘りすぎだ。

「……………ウチもホールにするわ」

「そ、そうですね……………。それが、いいと、思います……………」

不機嫌そうに言う島田と、激痛で痙攣しながら答える明久。

呆れたもんだ。明久は鈍感すぎる。

「……漣は？」

島田を哀れに思っていると、いつの間にか隣にいた康太に聞かれる。
そうだな。

「私はホールと厨房を兼任しよう。人手の足りない方をやればよか
ろう」

あれだ。

思い出に残る学園祭とやらを、楽しんでおこつじゃないか。

清涼祭編 第一問（後書き）

バカテスだけに限らないですが、小説やら漫画やらのキャラはほとんど美形ですよね。

容姿平凡とか言ってるくせにイケメンとか、もうデフォルトですよ
ね。

……。

あー、ちくしょう。

清涼祭編 第二問（前書き）

どうも、お久しぶりです。

なかなか更新が安定しない。

なんとか頑張ってるんですけど、文章も安定しないし。困ったなあ。

清涼祭編 第二問

ファミレスにしる喫茶店にしる、接客は女性がすることのほうが多い気がする。

これは偏見なのだろうが、恐らく女性のほうが楽だからだろう。

こう、セクハラで（店側が）訴えられることもないし、（客側の）心理的な問題とかで。と勝手に想像しているわけだが。

となれば、男にも女にも見える私はどうなのか？ という話。

正直言つて、私の性別は服装で判断される場合が多いと思う。

それがなんとなく哀愁を誘うがそれは放っておいて。

とりあえず、私がそんな人材であるが故、康太に男性用女性用両方の制服を用意させることにした。

女装（に見えないだろうが）の時の撮影許可を報酬として。

まあなんだ、使えるものは使っておく思考で物事を進めているわけだ。

「アキ、ちよつといい？」

HRも終わり、康太に服の注文（中華喫茶だからチャイナ服）について事細かに相談していると、帰ろうとしていた明久を島田が呼び止める。

用があるのは明久であり私ではないようなので、気にしないことにする。

「で、女性用チャイナのスリットだが」

「……腰骨辺りまでが望ましい」

「やかましい、下着見えるじゃねえか。一番深くても膝辺りにしてくれ」

「……」

「小柄だからって上目遣いされても困る」

「……」

「知ってるか？ 涙眼が通用するのは女だけなんだぜ」

小柄なコイツがするから耐えられるが、雄二とかだったら私は発狂するかもしれない。

男にされても鳥肌がスタンダップするだけで、心の揺らぎとかその他とかは生まれえない。

残念だったなバカヤロー。

秀吉？ アイツは異分子じゃないか。この例には当て嵌まらないよ。

「……せめて太股が見える程度に」

「……はいはい、わかりました。ただし、太股の半分より下までな」

野郎共のねつとりした視線を受けるのは苦痛だからな。
それ以上は料金取るぜ。

「……わかった」

「良い子だ」

グリグリと康太の頭を撫でながら一安心する。

これ以上譲歩しろとか言われたら、大規模の議論が始まるところだった。

後は完成を、というか清涼祭当日を待てばいいだけだな。

接客についてはそれっぽくやっておけば、文句は言われないうつ。さて、やることも終わったし、帰るとしようかね。

「だってアンタたち、愛し合ってるんでしょ？」

「もう僕お婿に行けないっ！」

帰り支度をしていると、島田の疑問の声と明久の絶叫が聞こえた。
うん？ 展開が読めないね。

明久と誰かが愛し合ってることはわかったが。

「誰が雄二なんかと！」

……マジですか？

「だったら僕は、澪や秀吉の方がいいよ！」

……。

なるほど、なんとなく展開は読めてきた。大筋だけだが、明久ホモ疑惑が浮上しているということだろう？

……。

アレ、じゃあ私と秀吉がピンチってことか？

……。

「ヤッベ。秀吉、逃げるぞ。明久に襲われる」

「う？ う、うぬ」

「ちょっと待って二人とも！ 誤解！ 誤解だから！」

いやー、それは無理がある。

あんだけ大声で宣言しておいて、誤解はないだろう。

なんて、からかっておくことにしようかね。

コイツが同性愛者ではないことくらい、長年の付き合いの上に理解してるしな。

いや、相手が秀吉だったら、変わるかもしれんかね。

「で、なにがどうなって明久のホモ疑惑が浮上することになったんだ？」

「あ、うん。坂本を動かしてもらえないかなあと思ってね」

「なるほどね。理解した。把握した」

「ねえ、なんでそんな説明で理解できるの？ おかしいよね」

「え、だってお前と雄二は、愛し合ってるんだろっ？」

「だから違っつて!!」

「澪が明久を虐めるとは、珍しいこともあるもんじゃ」

私もそう思うよ、秀吉。

ちなみに理由はとくにない。

ただ、流れるに虐めておいたほうがいいんじゃないかなろっかという判断で実行しただけ。

「悪かったって。それで島田、そもそもなぜ雄二を動かしたい？」

「アイツがいないと、クラスがまとまらないでしょうっ？」

「まあ、そうだな。少なくとも、お前さんが指揮を執るとアイツが指揮を執るのでは大違いだ」

「バツサリ言ってくれるわね」

「飾り付けられても嬉しくはなかるっ？」

ケタケタ笑ってやると、苦笑を返してきた。それにしても、

「随分深刻な話してるんだな」

島田ともかく、明久がそこまで考えるとは。

「いやいや、そこまで深刻な話じゃないんだよ。喫茶店の経営とク
ラスの設備の話で」

「アキ、そうじゃないの。本当に深刻な話なのよ……」

「え？ どういうこと？」

ん？ どうも食い違いがあるみたいだな。

「本人には誰にも言わないで欲しいって言われたけど、事情が事情
だし……。けど、一応秘密の話だからね？」

「う、うん。わかった」

「実は、瑞希なんだけど」

「瑞希がどうした？」

「あの子、転校するかもしれないの」

「は？」 「ほえ？」

瑞希が転校？

妙だな、私は何も聞いてないぞ。

転校するならば、瑞希おじいさまの父親から私に説明があるはずなのだが。
Fクラスの教室への対策をしないから、評価が下げられたのかねえ？
私もそれなりに悩んでいるつもりだったが。

「……………」

「ん、マズイな。明久が処理落ち寸前だ」

「このバカ！ 不測の事態に弱いんだから！」

「明久、目を覚ますのじゃ！」

相当ショックだったのか、放心状態になる明久。

そんな彼を現実に戻そうと、秀吉がガクガクと揺さぶる。

頭が取れるんじゃないかなろうかと心配してしまう程シェイクをすると、
明久がコツチに戻ってきた。

「秀吉……、モヒカンになった僕でも、好きでいてくれるかい……？」

半分ほどだが。

というか、秀吉が明久に好意を持っていることが前提なのな。いや、可能性が無いわけじゃないから文句はないが。

明久は恐らく男の中でも魅力的な部類に入るだろう。

そして秀吉は、女のような容姿をしている。

そのせいで女のように扱われることで内面的にも女性化しつつあったりなかったり長くなるので以下略。

うーん、この論が通るなら私も可能性に当て嵌まるわけだな。別に困らないが。

「………どういふ処理をしたら、瑞希の転校からこっいふ反応が得られるのかしら」

「ある意味、稀有な才能かもしれんのだ」

「やれやれ、世話の焼ける。おい、とつとつと目を覚ませ」

頭を軽く小突く。

「………はっ！？ いけない、ちょっとトんでた」

言われなくてもわかります。

しかし、転校か………。

「島田、その情報は確かなのか？」

「うん、瑞希本人から聞いたから。御門は聞いてなかったの？」

「ああ、知らん」

「そうなんだ。最初に聞いたのかと思ってたのに」

普通はそう思うよな。私もそう思う。

ならば何故連絡が来なかったのか。

一番簡単な結論は、私に心配をかけたくなかったから瑞希が口止めした、というものだが。

果たして正答か誤答か。

「島田よ。その姫路の転校と、さっきの話が全然つながらんのが」

秀吉が首を傾げる。

「それでもないのよ。瑞希の転校の理由が『Fクラスの環境』なんだから」

「ってことは、姫路さんの転校は両親の仕事の都合とかじゃなくて」

「そうね。純粹に設備の問題ってことになるわ」

姫路瑞希は学年三位の学力を持つ。

つまり、本来ならばAクラスの教室に行くべき人材だ。

しかしクラス分けテスト当日に体調を崩し、保健室へ。

テストは不参加扱いとなり、Fクラスになってしまった。

体調不良が原因とはいえ、最高クラスであるはずが最低クラスになっってしまったのだ。

しかもその処遇は最悪。

ござにみかん箱という設備に、切磋琢磨し合う周囲もバカばかり。

本人に非がない以上、不満を持ってもおかしくはない。訂正、持つのが普通だと思う。

なにより、一番問題なのは、

「瑞希、身体弱いからなあ……………」

「そつなのよねえ……………」

この特徴というか弱点というか。これは昔からあった。

なにかの病気が流行れば、瑞希は必ず感染する。

流行らなくてもインフルエンザとか風邪とかなんかに感染する。

あとは運動が苦手だとか。ん〜、これは本人の運動能力の問題か。

「なるほどのう。じゃから喫茶店を成功させ、設備を向上させたいのじゃな」

「うん。瑞希も抵抗して『召喚大会で優勝して両親にFクラスを見

直してもらおう』とか考えてるみたいなんだけど、やっぱり設備をどうにかしないと」

召喚大会で優勝して、ねえ。

いやいや、瑞希が優勝してもどうしようもないだろうに。もともとAクラスの実力があるのだから。

しかし、あの大会はタッグ戦だからな。なんとかいける……か？

さて、長々とした説明が続いたが、要するに。

「雄二を炊き付ければいいんだな」

「そうなるわ」

「それじゃあ、まずは雄二に連絡を取らないとね」

「そうじゃな。どうやら雄二は教室におらんようじゃし」

明久がポケットから携帯を取り出し、操作する。

呼び出すのは勿論、雄二の番号。

携帯を耳に当て、相手が出るのを待っている。

『
』

「あ、雄二。ちょっと話が」

うん。

雄二の声は聞こえるんだが、何を言ってるのかサッパリわからん。

『

』
「え？ 雄二。今何をしてるの？」

『

』
「雄二！？ もしもし！ もしもーし！」

どうやら切られたらしい。

「坂本はなんて言ってた？」

「えっと、『見つかった』とか『鞆を頼む』とか言ってた」

「……なにそれ」

おお、島田の視線が鋭い。

『コイツ、使えねえー』とか言ってた不良の眼と同等な気がしないでもない。

何度も思つが、この女、本当に明久が好きなんだろうか？

「大方、霧島翔子から逃げ回っているのじゃろうな」

「同感だ。アイツは異性に弱いみたいだしな」

瑞希のことは妹（もしくは小動物）感覚でしか見ていないようだ。

島田に関しては男友達異性同然、と言えば失礼か。

あー、異性として認識しているが、恋愛対象ではないと思っているのだと推測する。

いや、今はそんなことどうでもよくて。

「雄二を捕獲しないとな」

「大丈夫、僕に任せて」

明久？

「相手の考えが読めるのは、なにも雄二だけじゃない」

私と秀吉と島田が顔を見合わせる中、明久は自信に満ちた表情でそう言った。

・
・
・
・
・

・
・
・

「やあ雄二。奇遇だね」

あきひさは ゆうじ を みつけだした！！

……………。

いやいやいやいや、おかしい。おかしいだろこれは。

雄二の従者を自負している私だが、ちょっとこの考えは付いていけない。

というか、それを理解できている明久はなんなんだ。

私が何を言いたいのかと言えばだな。

「…………… どういう偶然があれば女子更衣室で鉢合わせになるのか教えてくれ」

そう、そうなのだ。

雄二はなんと、女子更衣室に隠れていた。

そして明久は、なんの迷いも無くここに辿り着いたのだ。

私がおかしいのか？ 違うだろ？ 私は正常だよね？

「つーか、なんで溲までいるんだよ」

「いや、私は明久についてきただけで。まさかこんな場所に辿り着くとはこれっぽっちも……」

ガチャッ

常識というものについて深く悩んでいると（私もだいぶズレているが）、ドアが開いた。
三人で振り向くと、そこには。

「えーっと……あれ？ Fクラスの問題児コンビと透？ ここ女子更衣室だよな？」

なんか、優子がいた。
体操服姿で。

な、なんだったってー。（棒読み）

「やあ木下優子さん。奇遇だね」

「秀吉の姉さんか。奇遇だな」

「優子、奇遇というごとくしてくれると嬉しい」

「あ、うん。奇遇だね」

あはは、うふふ。

いや、実際笑ってたのは私以外の三人ですけど。
しかも眼が笑ってないです。

明久と雄二は頬を引き攣らせ（焦りで）、優子はコメカミを引き攣らせて（怒り、多分）いたりします。

「先生！ 覗きです！ 変態です！」

「逃げるぞ！」

「了解！」

うわあ、アイツら私を置いて行きやがった。
っていうか素早いな。

さすが学力以外高スペック。

……私、逃げ遅れたんだが、どうしよう。

『木下！ 大丈夫か！？』

最悪だ、西村教諭が来た。

ヤバイなこれどうしようどうしようマジヤベエ。

背筋に流れる汗が冷たい。

コレが冷や汗なんだ。あはは久しぶりだなあちくしょう。

なんか体の節々がギシギシ鳴るほど焦ってぶっ飛んでるな私。

「遷、コッチに来なさい」

「ハイ」

いや、従うしかないよな？

どう転んでもアウトなんだから、従って相手を刺激しないほうがいいよな？

「ほら、ちょっと此処に隠れてて」

「……？」

隠れる？ 何故？

「おい優子、そんなに押し込むな」

「いいから、此処にいなさい」

「……ハイ」

なんて言うの？ 眼光？

それがヤバイくらい満ちた眼で私を見つめ（睨み）、更衣室を出た。正直、なにがどうなってるのかわからなかったりする。

何故こんなところに押し込まれたのか。

逃がさないためですよそうですね。

うあー、瑞希にバレたらなんて言われるか……。

あ、その前に関節技だったりしますか？
なんにせよ、諦めるしかない。

私の命運は優子に掛かっているわけであり、まさか女子更衣室に入っていた野郎を助けるなんて物好きは、

『無事だったか木下！？』

『大丈夫です。先生、アツチにFクラスの問題児コンビが』

あれ？

『またアイツらか！？ 今度こそ補習を受けさせてやる！』

誰かが、流れるに考えて西村教諭が走り去っていく音が聞こえる。

……。

え、助かった？ て言うか、助けてもらった？

少し呆然としていると、優子が再び入室してきた。

「あれだけで先生が爆走して行くなんで、相当問題視されてるのね」

「あ、ああ。学年代表だからな」

問題児的な意味で。

「そうね。なんだかんだで、ウチのクラスでも話題になってるし」

Aクラスでも話題になってるのか。

有名になったな、良くも悪くも。

祝福するべきか哀れむべきかわからん有名さだな。

軽くあの二人の学園生活について心配しながら、優子に押し込まれていた場所から出る。

少し狭かったからだろう、肩やら首やらが地味に痛い。

首を撫でながら優子の正面に立つ。

とりあえず、礼を言わなくては。

なんかよくわからんが、助けてもらったのは事実なわけで。

「あーっと、なんだ。助けてもらって感謝する」

「別にいいんだけど。っていうか、なんでこんなところにいるのよ？」

「清涼祭について雄二に用があつてな。翔子から逃げ回っていたアイツを探すのに、明久に付いて来たらここだった」

「なにそれ？ 結局どういうことよ？」

「翔子から隠れるのにここを使っていた雄二を、明久がいとも簡単に見つけ出したということだ」

「……それは、凄いわね」

「変な意味でな」

何をどうしたら女子更衣室に隠れることになり、何をどう考えたらそれをアツサリ見破ることができるのか。

わからないっ。私には、親友と主のことが、わからないの……っ！
冗談はこれくらいにしておこう。

気持ち悪くて背筋がゾワゾワする。

「話は変わるけど」

「ん、どうした？」

「漣、貸しーよ」

「……え？」

「だから、貸しーだってば」

彼女はクスリと微笑んで、

「西村先生を騙してまで助けてあげたんだよ。ご褒美を貰っても、
良いと思うんだ」

こういうのを魔女って言うんじゃないだろうか？
逃げ道を塞ぎ、恩を売り、追い詰め、乞う。

微笑みを浮かべたままそれを行う彼女は、とても妖しく艶やかで、まさしく、魔女だった。

結局、私の休日の一つ優子に譲渡することが決定。

適当に談笑して時間を潰したあと、更衣室を出て教室に戻った。

体操服が意外と似合っていたなと思ったのは内緒。

・
・
・
・
・
・

「おかえりじゃ、漣」

「……おかえり」

「ん、ただいま」

教室に入ったら、なんか秀吉と康太に出迎えられた。

女だったら惚れてたかもなーなんて、可能性の一片もないことを考える。

二人の柔らかい髪を軽く弄び、奥にいる雄二へ近づぐ。

気配を感じたのか、顔をコチラに向けた。

「あ、お帰り溲」「よう、溲。遅かったな」

「私を置いて逃げたくせに。文句を言われる筋合いは無いからな」

声を揃える二人に恨むように言うと、肩を竦める。

どうせ上手く退けるだろう？ 暗にそう言っているようだった。

ああ、上手く退けたともさ。

休日の一つ犠牲にしてなバカヤロ！。

や、大して問題はないんだけどな。

むしろそれだけで補習室行きを逃れたのは幸運だったというか。

いやしかし、休日に使う金は全て私が払うことを考えると、不幸と言えなくもない。

別に貧乏というわけではないが。むしろ両親のおかげで金持ちだが。

「そんなことより、学園長のところに行くぞ」

バカと天才は紙一重という言葉があるように、幸運と不運は紙一重だったらしちゃうのかもしれない。

なんて馬鹿げたことを考えていると、雄二に肩を叩かれた。

学園長？ かまわんが、

「何が目的だ？」

「直訴」

私の質問に、簡潔且つ単純に答えてくれた。
直訴。直訴ねえ。

「……教室の件か？」

「それ以外になんかあるか？」

「そこまで話が進んだのか」

「手間が掛からなくていいだろ？」

「まあ、そのとおりだな」

得意げに問いかける彼に、私は苦笑を返す。

「よし。じゃあ早速、学園長室に向かおうよ」

「そうだな。学園長室に乗り込むか」

「乗り込むってなあ、喧嘩売りに行くんじゃないぞ。まあいいけど。
島田と秀吉、康太は清涼祭の準備計画でも進めててくれ」

「それと、鉄人が来たら俺たちは帰ったと言っておいてくれ」

明久と雄二が立ち上がる。
やる事が確定したら、あとは簡単だ。
行動力抜群のコイツらなら、尚更ね。

「うむ、了解じゃ。鉄人と、ついでに霧島翔子も見かけたらそう伝えておこう」

考慮に入れていなかったのだろうか？ 微笑む秀吉に翔子の名を出され、雄二は硬直する。
ふむ、やはりコイツは翔子に弱いな。
彼女に好意を抱いていると言ってもいいようなものなのに、それでも交際を断るとは。

何か思うところがあるのだろうか。
それを取り除いてやれば素直にくっ付きそうなもんだが。

「アキ、しっかりやってきなさいよ」

「オツケー。任せといてよ」

コッチはコッチで、相性は良さそうなんだけどなあ。

鈍感な明久と、ツンデレ（割合9：1くらい）の島田だ。

どう考えても進展は難しいだろう。

なんとか手助けをしてやろうと思うが、島田が気難しくてどうしようもないのが現状だ。

いやしかし、良く考えてみると面倒臭いラインナップだよな、私達

は。

明久は鈍感バカ。

雄二は素直にならなくて。

康太は色気のある展開になると鼻血を吹く。

秀吉は、あー、割愛。

私はそもそも男か女かわからない。

よくもまあ、こんな変わり者が揃ったものだ。

ある種の不良品とも言える気がしないでもない。

男衆の将来と云うか女性関係と云うか。

そんなものを心配しながら、私は雄二達の後を追った。

・
・
・
・
・
・
・

さて、程ほどに歩いて学園長室の前。

『……賞品の……として隠し……』

『……こそ……勝手に……如月ハイランドに……』

なにやらお話中らしい。

声の調子から考えると、穏やかな談笑というわけではなさそうだ。

「雄二、淺、どうする？ なにか話してるみたいだけど」

「そうか。つまり中には学園長がいるというわけだな。無駄足にならなくて何よりだ。さっさと中に入るぞ」

「本当にいい性格してるよな、お前は」

嫌いじゃないけどな。

コイツのおかげで色んな暇が潰せるわけだし。

むしろ好意に値する。

「失礼しまーす！」

ノックしてから返事を待たずにズカズカ入り込むなんて、どこのガキだ貴様ら。

オイ、誰かコイツらに礼儀を教えてやれ。

嫌かそうか。なら私が教えてやるう。

別に無礼でも構わんのだが、世の中にはPTOというものがあつて

……。

普通は学園長室に入るには、ノックして返事を待ってお辞儀をして
だなあ。

なんて、言っても無駄だろうからどうでもいいか。

「本当に失礼なガキどもだねえ。普通は返事を待つもんだよ」

ご尤なことを言いながらも、しかし、本人も充分失礼に値する物言いをするのは学園長だ。

長い白髪が特徴で、ここ文月学院が誇る試験召喚システム開発の中心人物、藤堂カヲル。

カヲルではなく、カヲルだ。ここ重要、テストに出るぜ。配点は80点な。

ミスったら即補習行きだ。

「やれやれ。取り込み中だというのに、とんだ来客ですね。これでは話を続けることもできません。……まさか、貴女の差し金ですか？」

クイツ、と眼鏡を押し上げながら言うのは、竹原教頭。

鋭い目付きとクールな態度で一部の女子から人気が高いらしい。

真偽は知らんが、ムツツリ商会の情報であるため、信憑性は高い。だからどうしたって話だが。

しかし、私個人としては、どうも胡散臭い雰囲気が嗅ぎ取れてしまう。

そのためか、あまりお近づきになりたくない人物だ。

あ、ここテスト出るぞ。配点は20点な。

……なんてこった、テストなのに2問しかないじゃないか。

これはもはやテストなんかじゃないな。

「馬鹿を言わないでくれ。どうしてこのアタシがそんなセコイ手

を使わなきゃいけないのさ。負い目があるというわけでもないのに」

「それはどうだか。学園長は隠し事がお得意のようですから」

私達には把握できない会話が行われる。

わざわざ私が気にする必要などないのだが、どうもキナ臭いな。

「さつきから言っているように隠し事なんて無いね。アンタの見当違いだよ」

「……そうですか。そこまで否定されるならこの場はそういうことにしておきましょう」

竹原教頭の視線が、一瞬部屋の隅へ移る。

それを追って隅を見てみるが、おかしいものは視認できなかった。

「それでは、この場は失礼させて頂きます」

踵を返して学園長室を出て行く教頭。

ふむ、あの視線の動き。そこに何かあると確信し、尚且つそこにあることを確認するような視線だった。

となれば、あそこに何かがあるのは確定だろう。何かはわからんが、視認できないのだからどうしようもない。

もつとも、眼で確認できないだけであり、康太に調べさせれば見破られるだろうが。

「んで、ガキどもアンタらは何の用だい？」

その声と表情からは、教頭との会話を中断させられたことによる不満は感じられない。

むしろ好都合だったのか？ それとも、あの会話に興味自体なかったのか？

どうでもいいな。そんなことで頭を悩ませるより、瑞希の件について頭を働かせよう。

「今日は学園長のお話があつて来ました」

諸君、私は現在、奇跡を目撃している。

あの雄二が、悪鬼羅刹の坂本雄二が、敬語を使っているではないか。ムツツリ商会が賞品として扱うなら、レア度は最高だろう。

値段は度外視な。こんなもん誰も買わんだろう。

あ、いや。翔子が買うか。

「アタシは今それどころじゃないんでね。学園の経営に関する事なら、教頭の竹原に言いな。それと、まずは名前を名乗るのが社会の礼儀ってモンだ。覚えておきな」

言ってることは尤もなのに、なんでこんなに無礼に感じてしまうのだろうか？

「失礼しました。俺は二年F組代表の坂本雄二。こっちの銀髪が」

「始めまして。同じくFクラス、御門滯です」

「で、こっちが」

雄二は明久を示し、紹介した。

「二年生を代表するバカです」

例え目上の者の前であろうと、明久を弄繰り回すことに隙がない。これこそ、雄二クオリティー。

「ほう……。そうかい。アンタたちがFクラスの坂本と御門、そして吉井かい」

「ちょっと待って学園長！ 僕はまだ名前を言ってませんよね!？」

あの紹介で個人が理解できてしまうほど、明久は有名らしい。

「気が変わったよ。話を聞いてやろっじゃないか」

そして明久の言葉を完全スルーの学園長。
頑張れ明久、超頑張れ。

「ありがとうございます」

「礼なんて言う暇があったらさっさと話な、ウスノロ」

「わかりました」

これだけ罵倒されて冷静なままとは。

雄二もバカなだけではないんだな。
すぐにボロが出そうだけど。

「Fクラスの設備について改善を要求してきました」

「そうかい。それは暇そうで羨ましいことだね」

「今のFクラスの教室は、まるで学園長の脳味噌のように穴だらけで、隙間風が吹き込んでくるような酷い状態です」

ああ、ほらボロが出た。

沸点低いなあ、お前。

「学園長のように戦国時代から生きている老いばれならともかく、今の普通の高校生にこの状態は危険です。健康に害を及ぼす可能性が非常に高いと思われます」

まともなことを言っているのに。

前半の罵倒のせいで説得力がガタ落ちじゃないか。

「要するに、隙間風の吹き込むような教室のせいで体調を崩す生徒が出てくるから、さっさと直せクソババア、というワケです」

こつこつ奴にこそ、無礼という言葉はふさわしいのだと思う。

よくもまあ、何の恐れもなく強気で行くよな。

書類に判子を押すだけで個人を退学させることができる人物を相手にするなら、大抵の奴が弱気になるもんだが。

面白いからいいけど。

今まで無礼に無礼を返すという手法を取ってきた学園長が、雄二の言葉を受けて黙り込む。

思案顔になっている。

うーむ、良い予感はないね。

「あの、学園長……？」

雄二が立腹させたと思ったのだろうか。

無言になった学園長、明久が不安げな声を掛ける。

「……ふむ、丁度いいタイミングだね……」

……。

オイ、聞こえたぞクソババア。

アンタ、私達を何かに利用する気だな？

「よしよし。お前達の言いたいことは良く分かった」

「え？ それじゃ、直してもらえますね！」

いや、それはないだろう。

この学園の方針は、成績の良い者には良い設備を、成績の悪い者には悪い設備を与えること。

そうして「この設備は嫌だ。あの設備が欲しい」と思わせ、上のクラスを引き摺り落すために勉強する。

そんな展開を望んでいるのだ。

だからこそ、学園長の返答は容易に想像できた。

「却下だね」

「雄二、このババアをコンクリに詰めて捨ててこよう」

「……素直だな、明久」

「お前はもう少し態度には気を遣え」

お前に言われたくないだろうな、明久も。

「やれやれ。このバカが失礼しました。ともかく、理由を教えてください。ただいてもいいですよね？」

「そうですね。教えてください、ババア」

「と言うか、教えてもらえないとが暴れるんで。そこんところ理解よろしくお願いします、ババア」

「無礼な言葉遣いをするわ学園一の危険人物をけしかけるわ。……お前達は本当に聞きたいと思っっているのかい」

待て学園長。

「アンタも私を危険人物と呼ぶか？ え？ この女郎。刻むぞちくしょう。」

「自分が危険だつてのは自覚してるがね。しかしだ。私で危険なんて言ったら、私の両親は厄災レベルだぞ。いいのかそれで？」

「理由も何も、設備に差をつけるのはこの学校の教育方針だからね。ガタガタ抜かすんじゃないよ、なまっちろいガキども」

仰るとおり。

と、納得できるんだがね。
幸か不幸か、Fクラスには瑞希がいるのだよ。
諦めるわけにはいなくてね。

「それは困りますね。なんせ私の可愛い妹分は、少々貧弱でして」

「と、いつもなら言っているんだけどね」

私の言葉を遮り、学園長は顎に手を当てながら続ける。

「可愛い生徒の頼みだ。こちらの頼みを聞くなら、相談に乗ってやるんじゃないか」

ただではない、と。

交換条件か。

交換条件ねえ……。

さてさて、どんな条件を出してくるやら。

黙り込む私に代わり、雄二が聞く。

「その条件ってなんですか？」

「清涼祭で行われる召喚大会は知っているかい？」

「ええ、まあ」

「じゃ、その優勝賞品は知っているかい？」

「え？ 優勝賞品？」

それは、私も覚えてないな。

大会に出るつもりがないから、賞品を確認していないのだ。
トロフィーと賞状が貰えるのは覚えているのだが。

「学校から送られる正賞には、賞状とトロフィーと『白銀の腕輪』、
副賞が『如月ハイランド プレオープンプレミアムペアチケット』
が用意してあるのさ」

ペアチケットと聞いて、雄二がピクリと動いた。

しかし、なにかするわけでもない。

なにかあったのだろうか？

私は白銀の腕輪が気になるのだが。

ああ、ちなみに如月ハイランドについてだが。現在建設中の巨大テ
ーマパークのことだ。

廃病院を改造したお化け屋敷や日本一デカイ観覧車、世界で三番目
に速いジェットコースターなどなど。

なんかソレっぽいものが多々あるらしい。

まだオープンはされていないので、本当かどうかは知らん。

「副賞のペアチケットなんだけど、ちょっと良からぬ噂を聞いてね。
できれば回収したいのさ」

「回収？ それなら、賞品に出さなければいいじゃないですか」

「そうできるならしてるさ。けどね、この話は教頭が進めたとは言え、文月学園として如月グループと行った正式な契約だ。今更覆すわけにはいかないんだよ」

学園長は召喚システムの開発で手一杯なため、経営に関しては教頭に一任している。

そんな噂を康太から聞いたことがある。どうやら本当らしいな。

それにしても、教頭が進めた、ね。

さっきの話、やはりキナ臭いものだったんだな。

「気が付かなかったんですか？」

「白銀の腕輪の開発で忙しかったんだよ。それに、妙な噂を聞いたのも最近だし」

責任は、感じているようだ。

ただ、どうしようもなかったということらしい。

「それで、悪い噂ってのは何ですか？」

学園長は呆れたように溜め息をついて一拍置き、つまらない内容なんだけどね、と前置きする。

「如月グループは如月ハイランドに一つのジnkクスを作ろうとするのさ。『ここを訪れたカップルは幸せになれる』っていうジnkクスをね」

「？ そののどこが悪い噂なんです？ 良い話じゃないですか」

「そのジnkクスを作る為に、プレミアチケットを使って来たカップルを結婚までコーディネートするつもりらしい。企業として、少々強引な手を用いてもね」

ああ、なるほど。

つまりだ、ハイランドを訪れた数組のカップルを強引に結婚させる。それによって、『ハイランドを訪れるカップル 結婚 〓 カップルは幸せになれる』という構図を作ろうとしてるわけだ。

なかなかおもしろいな、なんだと!?!?」……。

遮るなよ。いいけどさ。

叫んだのは雄二だった。

なんか、焦りとか驚愕とかその他いろいろがゴツチャ混ぜになったような表情だ。

「どうしたのさ、雄二。そんなに慌てて」

「慌てるに決まってるだろう！ 今ババアが言ったことは、『プレオープンプレミアムペアチケットやってきたカップルを如月グループの力で強引に結婚させる』ってことだぞ!?!?」

「う、うん。言い直さなくてもわかってるけど」

雄二のうろたえっぷりに、明久が引いている。ここまで焦っているのは本当に珍しい。なにがあつたのだろうか？

「そのカップルを出す候補が、我が文月学園つてわけさ」

「くそつ。うちの学校は秀吉や澪みたいなのを含めて何故か美人揃いだし、試験召喚システムという話題性もたつぷりだからな。学生から結婚までいけばジंकウスにも申し分ないし、如月グループが目をつけるのも当然ってことか」

うん、褒めてくれてるんだろうけどね。あまり釈然としない。それは置いといて。

悔しげに唇を噛む雄二は、明久が首を捻るほど様子がおかしい。思わず明久を顔を見合わせてしまう。結局、なんなのかわからないが。

「ふむ。流石は神童と呼ばれていただけはあるね。頭の回転はまずまずじゃないか」

学園長の言葉に、私の中で警戒が生まれる。随分と雄二について詳しいじゃないか。

学校を代表するバカという紹介で、明久の名前もすんなり出てきたみたいだし。

私の『危険人物』なんていう評価も知っていたようだ。
学園の長なら当たり前なのか？

「ま、そんなわけで、本人の意思を無視して、うちの可愛い生徒の
将来を決定しようって計画が気に入らないのさ」

本当にそう思ってるのかねえ。

さて、さつきから「絶対にアイツは参加して、優勝を狙ってくる」
だのなんだの言っている雄二は放っておいて、話を進めようか。
カップルがどうのとか結婚がどうのなんていう話題で壊れるってこ
とは、どうせ翔子となんかあっただけだろうし。

「ふむ。つまり、交換条件というのは」

「そうさね。『召喚大会の賞品』と交換。それができるなら、教室
の改修くらいしてやるんじゃないか」

なるほど、まさにギブ&テイクな提案だ。

受けても問題ないと思うが。

ただ、「『召喚大会の賞品』と交換」という言い方が気になる。

プレミアチケットの悪い噂がどうか話していたのだから、「『プ
レミアチケット』と交換」でいいじゃないか。

わざわざ明言を避けた言い回しに、少し引つ掛かりを覚えた。

私が捻くれているから気になるだけ、だろうか？

どちらにせよ、要警戒、というところだな。

さてさて、私の警戒のしすぎならそれでよし。

そうでないのなら、今度はどんな面倒事なのやら。

「わかりました。この話、引き受けます」

つと、ちょっと考え事に没頭している間に、話は進んでいたようだ。いけないいけない。しっかり聞いておかなければ。

「そうかい。それなら交渉成立だね」

「ただし、こちらからも提案がある」

ニヤリとした、心地良くない笑みを浮かべる学園長に雄二が話しかけた。

「なんだい？ 言ってみな」

「召喚大会は二対二のタッグマッチ。形式はトーナメント制で、一回戦が数学だと二回戦は化学、といった具合に進めていくと聞いた」

一回戦が数学と決まると、その対戦は全員数学で競うことになる。それが終わると、別の科目で競うことに。科目を被らせないのは、点数が消費したまま戦っても面白味に欠ける可能性を考慮しているのだろう。

この大会は一応、見世物なわけだし。

「それがどうかしたかい？」

「対戦表が決まったら、その科目の指定を俺にやらせてもらいたい」

鋭さを秘めた目つきで学園長を睨む雄二。
この質問に、なにか仕掛けたことがわかった。

「ふむ……。いいだろう。点数の水増しとかだったら一蹴していたけど、それくらいなら協力しようじゃないか」

「……ありがとうございます」

どうやら、学園長の答えは雄二の警戒心に火と油を投げ込んだらしい。

雄二の目つきはさらに鋭くなり、その奥で脳みそを働かせていることがわかる。

さてさて、なにを警戒しているのやら。

「そつだ、一つ忘れてた」

学園長が今思い出したように、

「御門、アンタは出場しないでもらいたいね」

そう言った。

ん〜？ これはおかしいね。

「なんでですかババア！！」

学園長の望みはプレミアチケットの回収であり、

「御門は勝ち汚い戦い方、って言えばいいのかね」

つまり点数の高い私が出るほうがどう考えても好都合なわけだ。

「こつ、アンタ達みたいな素人丸出しの戦いじゃなく、プロみたいな戦い方なんだろう？」

「それはそうですが、でもそれで大会に出させないなんて！」

だというのに、それを否定して私を出場禁止にするのは、自分の首を絞めるようなもので。

「召喚大会つてのは、一種の宣伝、見世物なんだ。御門みたくアツサリと相手を潰せるような奴が出たら、宣伝にならないじゃないか」

「つまり、観客をハラハラさせるような戦いじゃなきゃ意味がないつてことか？」

「そういうことさね」

ふむふむ。ん〜。

私の戦い方が不都合？

点数が高いと不都合？

どっちでもいいが、とりあえず。

このババア、なんか隠してやがる。

優勝賞品の回収を狙っているのに、恐らく優勝候補に挙げられる私の出場を禁止するのが良い例だ。

私の戦い方は、他の者よりも精錬されていると自負している。

それを見せて、観客を魅せられないと断言するには、どう考えても

軽率だと思うのだ。

まあ、長くなるので詳しいことは置いといて。

「別に構わないですよ」

「話が解る奴は嫌いじゃないね」

「またも、ニヤリと笑われる。」

背筋にモゾモゾとするなにかが奔り、ああ、完璧に警戒しているんだなと自覚した。

「漣、なんで!？」

「明久、大会はお前と雄二に任せる」

まだ納得できていない明久を落ち着かせるように、話を続ける。

「喫茶店のほうも監督が必要だろう? 私はアチヲを担当するぞ」

「でも、漣が出たほうが……」

その後ろに、可能性は高い、とつくのが理解できる。

実際そうなのだろうし、私もそう思う。

しかし、だ。

「明久、お前と雄二が出るんだぞ」

唇を歪め、笑ってやった。

「負けるわけがない」

召喚者としては間違いなくトップレベルの明久と、策士としてトップレベルの雄二。

この二人がタッグを組んで、負けるわけがない。

「漣が喫茶店のほうを担当してくれるってんなら、俺たちも頑張らないとな、明久」

「うん、そうだね。漣、喫茶店のほうはお願いするね」

「任せる。売り上げを期待しておけよ」

「……話はまとまったようだね」

学園長の声に、私達は緊張を取り戻す。

「さて。科目の指定に教室の改修、売り上げでの設備の向上の許可。」

ここまで協力するんだ。当然召喚大会で、優勝できるんだろうね？」

「今回は俺もやる気だからな。問題ない」

雄二は口元を歪め、不敵な笑みを浮かべる。
完全にやる気だった。

「絶対に優勝して見せます。そっちこそ、約束を忘れないように！」

明久もやる気充分。
そして私は、

「明久も雄二もやる気がある。これで負けるわけがないでしょう」

当然、やる気は満ちている。
問題解決の道は見えた。
あとは、そこを開拓するだけ。

「それじゃ、ボウズども。任せたよ」

「「おう！」」「了解」

文月学院最低にして最強のコンビが誕生した。

私は、そうだな。

喫茶店のガードマンってところか？

清涼祭編 第二問（後書き）

学園長からの報酬として、オリジナルの腕輪とか出そうと思っんですが。

なかなかどうして、どんな効果の腕輪にするか悩んでいました。

いや、候補とかは三つ程考えてあるんですよ。

ただ、ちよつとそれどうよ？ みたいなのばかりで。

一応書いておくので、アドバイスというか意見というか。そういうのを貰えると嬉しいです。

有力候補順です。

1・武装変更……召喚獣の武装をあらかじめ設定した武装に変更する。簡単に考えるとSEEDのストライカーパックみたいなもんです。

2・融合……使用者と誰かの召喚獣を融合させる。その際、点数は（使用者の点数＋相手の点数）／2に変更される。性能はとも高いが、二人の相性が良くなければ上手く操作できない。

3・爆撃……150点消費でグレネードを投擲する。密集地帯で効果的であるが敵味方関係無くダメージを与える。さらに一科目に一回しか使えないという制限もある。なお、再テストを受けると再び使用可能になる。使い所が難しい。

どうでしょう？

こんなのもいいんじゃないか？ なんていうアイデアがあれば、是非お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6880k/>

戦神とテストと召喚獣

2011年2月11日10時51分発行